
ライスMと味噌汁で

MAS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライスMと味噌汁で

【Nコード】

N3077I

【作者名】

MAS

【あらすじ】

高校二年生の悠木奏音ゆうきかなと（男）がある日、学食でお嬢様の迷惑に巻き込まれてしまう。それをきっかけに、平和だった奏音の周りがかしくなっていく……。奏音の駆け抜ける一ヶ月のお話。

2010年6月6日、修正いたしました。以前のものの続きは第6話の途中からです。

プロローグ

突然だが俺は一人で学食に来ている。小遣いに余裕ができたから今日は奮発してラーメンを頼もうと思う。

何で一人で来たのかと言うと、別に友達がいらないわけじゃない。いつも一緒に食べている周を連れてくるとラーメンを奪われかねない。せつかくのラーメンだ。誰にもやってなるものか！

学食のおばちゃんに挨拶すると何も言わずにいつものライスMと味噌汁を準備している。

「おばちゃん、今日はラーメンを」

「もつと早く言いなさい。もう準備しちゃったじゃないの！」

挨拶だけで準備するなよ！ とは、思ったが心に留めておいた。だつて兵糧攻めなんてやられたら大変だからな。

「はいよ、ラーメン」

おばちゃんは面倒臭そうに渡してくる。今、指をわざと入れたよね？

おばちゃんの妨害を乗り越えてあいている席に座った。この時間は混んでいるので、席に座るのにも一苦労だ。

「なんですの？このメニューは安っぱいですわ！」

後ろで文句を言っている奴を振り返って見てみると、そこには漆黑でつやのある髪の高い女子が二人の女子を連れて座っていた。二人のショートカットの女子たちは鏡を見ているかのように同じ顔をしている。

周りの娘たちも十分可愛いが、中でも長い髪の女子は格別だ。その娘を見惚れているであろう男子の中には、彼女連れの奴までいる。まあ、顔だけならかなりいいと思うが、性格があれじゃあね。

「ん、んぐ。まずい！ こんなの食べられませんか！」

そんなこと言ったらおばちゃんの逆鱗に触れちまうぜ。ほら、3、2、1……。え、何もない？ おばちゃんを見てみるとこつちを睨

みながら拳を壁にぶつけている。怖！

「やべ、せつかくのラーメンが伸びちまう」

こんなのことを気にしたせいでラーメンをまずくしたくないかな！ さっそく、いただき……。

ぽちゃん。

ラーメンの中に何かが落ちた……、これは消しゴム？

どこからどう見ても有名な某消しゴム。なんで？

消しゴムが飛んできた方を見ると、さっきのお嬢様気取りの女がいる。

「何してくれんだよ、三か月ぶりのラーメンだったんだぞ！」

消しゴムには大量の消しカスが付着していたらしく、水面に浮いている。これじゃあ、もう食えない。

「そんな安っぽいものでそんなに怒らなくてもいいじゃないですか？」

「俺にとっては豪勢なんだよ！ 弁償しろ！」

俺たちが騒いでいるので、周りの奴らが食いながら見ている。見せもんじゃねえぞ、コラ！

「あいにく、お金は持ち歩いてませんわ」

「じゃあ、どうやってお前が食ってるの買ったんだよ！」

「知りませんわ！ 気分を害されました。ミキさん、マキさん行きますわよ」

その女は取り巻きの二人を連れて行ってしまった。

そこに残された、俺と消しゴム入りラーメン。

「気分を害されたのはどっちだよ！」

プロローグ（後書き）

この作品は以前に短編として書いたものです。

面白いと感じていただけるかわかりませんが読んで感想を書いていただけると幸いです。

第1話

まったく、さつきはえらい目にあっただぜ。あの後、食べ物を粗末にするなっておばちゃんに怒られたしな！　なんで俺がそんな目に会わなきゃならんのだ！

まあ、今日の授業も終わったし帰るか。今日は見たい番組はないけど、ぼーっとテレビでも見るぜ。

お？　前にいるの周じゃね？　ちよっと、ちよっかいでも出してから帰るか。

「おい、周。　んぐ！」

突然後ろから押さえつけられて、口にハンカチをあてられた。ぐぐ、息できん。力も強すぎ！　抵抗できん。なんか俺引きずられてるし……。意識も……。もう……。ろうと……。

「ん、誰か読んだか？」

反応鈍すぎだろ！

「おい奏音なんだろ。どこにいんだよ！　出てこいよ！　出てこない？　なーんだ、気のせいかな」

待つて……。くれ、俺ならここに……。助けて……。

「ん。こ、ここは？」

気付いたらそこは豪華な食堂だった。天井からはシャンデリアが吊るしてあり、床にはシックなじゅうたん。テレビの中でしか見たことがないような金持ちのパーティーホールみたいな部屋だ。

「ここは、いけみやしろ池宮城邸の食堂です。」

後ろから凜とした声がしたので振り返ってみると……。振り返れねー！　椅子に縛り付けられてる。

「何のつもりだ！　俺なんか誘拐しても、うちの親共は一円たりとも出さないぞ！」

言つてて自分で悲しくなってきた。

「貴方は悠木奏音、男、16歳。宮城学園高校二年、特進科の一組に所属。前回の期末テストの学年順位は5位。三大家族で兄弟はなし。父親は保険会社のサラリーマンで年収は……万円、転職一回。貴方のお小遣いは三千元。学食ではいつもライスMと味噌汁を注文。趣味は……」

「もういいよ！どこからそんなに調べたんだよ！」

「マキさんの情報収集技術はすごいでしょう！」

声の持ち主が俺の視界に移動してきた。こいつどこかで……って、忘れるはずがねえ！昼の消しゴム女じゃねえか！

「そういえば、自己紹介がまだでしたね。私は池宮城紅葉です、覚えておきなさい！」

紅葉と名乗ったこの女は、長い手入れのいきとどいた柔らかい髪を手ですいた。

お前の名前なんてどうでもいいんだよ！

「てめえ、なんで俺を誘拐した！」

消しゴム女は不思議そうな顔をする。どう考えても誘拐したんだろ！

「ただ食事に招待しただけです！」

どうしたら、薬で眠らした後引きずってくるのが食事に招待になるんだよ！

「私は昼のことが悪かったと思い、せめてもの償いのために招待したんですの」

もう疲れた、テンション高いまま維持するのは大変なんだぞ。

「はあ、そうかよ。悪いと思ってるならこのロープをほどいてくれ」

「そうですね。ミキさん、マキさんほどいてください」

紅葉がパンパンと手をたたく。

「はっ」

突然両脇に二人が現れた。こいつらは……、昼の取り巻き二人か。一瞬でロープをほどいた二人はいつの間にか消えていた。

「さて、食事にしましょうか」

昨日は本当にひどい目にあっただ。その後、食事になったんだが、空気が重くて……。あの女ときたら食事のときは何もしゃべらなかつたし、俺が話しかけると食事中だから話すなだ？ 周りにはスーツを着た人達が並んでるし……。もう何を食べたか覚えていない。俺なんかじゃ一生出会えない様な豪華な食事だったんだけどなあ。あゝ、もったいねえ！

「おい、奏音！ てめえ昨日何やってたんだよ！」

いつの間にか学校に着いていたらしい。なぜか周が怒っている。

「お前、帰りに声かけただろ！ それで振り返ってもいないし。かなり探したんだぞ！」

こいつあの後、俺を探してたのかよ。

「誘拐されたんだよ！ほんとっ、迷惑なお嬢様もいたもんだぜ」

「誘拐？ お嬢様？」

不思議そうに俺の言葉を繰り返す。馬鹿に見えるからそういうのはやめとけや！ まあ、口に出しては言わないよ。そういうとこ直したら周のキャラが壊れちゃうしな！

「そうなんだよ、無理やり連れてかれて食事に招待だぞ！ 頭がおかしいと思えないね！」

「お嬢様ってどんな娘だった？」

こいつよつぽど『お嬢様』という言葉が気になってるらしい。

「まんまお嬢様だな。確か変な名前で……。えっと……。ああ、そうだそうだ！ 『紅葉』とかって言ってたな、変な名前……だろ？」

なぜか、俺が『紅葉』の名前を出した瞬間に周の表情が凍った。いや、周だけじゃない、クラス全員が啞然としている。

「おまつ、マジで『池宮城紅葉』と話したのかよ！ それに食事だとお！」

「ん？ なんだ、あいつ有名なのか？」

まあ、あんな目立つ奴なら有名でもおかしくないけどな！

「知らないのか！ あの池宮城財閥のご令嬢じゃないか！ この学校関係者で知らん奴なんていないぞ！」

「……、マジで？　なんでそんな奴がこの学園にいるんだよ！」

確かに家はそこら辺の金持ちってレベルじゃなかったが。

「この学園だつてあの財閥の物だろ？　高校の名前を思い出してみろや」

クラスメイト達も、俺が紅茶と食事をしたと知って好き勝手騒いでいる。いいな〜とか、あの人俺らが話しても無視するんだぜとか、逆玉の興じゃんとか。って、最後のねえぞ！　俺はあんなわがままな奴と一緒にいたくはないからな！　もつとおしとやかな娘が好きなんだよ！

「はいはい、てめーら黙れよ〜」

そこに教師が入ってきた。やい教師！　そんな言葉づかいでいいのかよ！　貴方、まだうら若き乙女ですよ？　……、ギリギリね

「え〜と、いない奴いたら返事しろよ。よし、全員いるな」

いつも通りそう言つて教室を出て行こうとする。あいつ、生徒に欠席つけたことないだろ！

その時、教室の戸がピシヤンとでかい音を立てて開いた。硝子割れるから！

そこにいたのは怒り狂つたおっさんだった。……、誰だよ！

「池宮城財閥の会長じゃないか！」

へー、池宮城財閥ノ会長サンナンデス力。……、ナンノヨウデシヨウカネ？

「俺の娘をたぶらかしたのは何処のどいつだあ！」

やっぱり……。娘が娘なら親も親だな。

「お前だろ！」

「早く行けよ！」

貴方達、薄情だね。

周りの反応を見て会長様が俺を連れていく。いや、俺も抵抗しな

かったわけじゃないんですよ？　この人、力ありすぎ……。てか、昨日もこんなことあったよ？

「何なさるんですか！」

見なおしたよ！　教え子が連れていかれそうになってるのを助けようなんて。これからは敬意をこめて教師Aと呼ぼう！　実は名前覚えてないんだよね。後で周に聞いたところ。

「くびになりたくなければここを通せ！」

「どうぞどうぞ」

おい！　ためらいもなく俺を差し出しやがった！

そう言ってる間に会長様は俺を引きずっていく。

ひ、引きずらないでえ。誰か助けてえ。

さて、私は黒塗りの高級車（運転手つき）に押し込まれたんですが、会長様はなかなか口を開かない。

運転手が発前に一言言ったのが最後だ。もう十分前かな……。会長様は何処を見つめるでもなくぼーっと前を見ている。

「……」

今なんか言ったか？　小声過ぎてわからねえ！　さっきあんなに叫んでたじゃねえかよ！

「紅葉はなあ……。昔から素直で……。笑顔を振りまいてくれるし……。本当にいい娘なんだ……」

そうかあ？　あんなにわがままな奴が？

「それなのに！　それなのにお前ときたら、紅葉が強く断らなかったのいいことに、食事に無理やり連れてっただと！」

会長様は顔を真っ赤にして、怒りで肩を震わせながら睨みつけてくる。

って、おい！　俺が無理やり連れてった？　いつそんなことあっただよ！

「紅葉をお前の毒牙に掛けるわけにはいかんだ！」

勝手に話を進めるな！

「会長さん、俺の話を聞いてください！」

「言い逃れするつもりか？紅葉とは遊びだったというのか！」

えー！　なんでそんなに誤解してんの！

「そんなことないです！　俺、紅葉さんのこと別に何とも思ってますん！」

あんな迷惑なやつ、興味ないから！

「なんだと。お前、紅茶を弄んでおいて何とも思ってますんだあ！
ヤバッ、失言ったよ！」

「俺は娘のためなら人一人を物理的に、社会的に、精神的に殺すことだっていとわない。覚えておきなさい！」

脅してきたよ！

「さて、君はこれからどうする？」

ここでお腹が減ったとか冗談を言つと俺が魚のえさになりそうだから、自粛しましょう。

「これからは、紅葉さんとは一切関わりを持ちません！」

「本当だな？」

会長様の口が吊りあがつてるんだけど……。

「ほ、本当です！」

「じゃあ、これから一度でも紅葉と話したら消えてもらっからな！
いいな！」

有無を言わせない気迫がある。

「は、はい！」

「そうか、なら安心だ。では君はここで降りたまえ！」

えー！　俺ここどこかわからないんだけど！

「早くしたまえ！」

最終的に運転手につまみ出された俺を置いて走り去っていった。

ハハハ、ヤト帰ッテコレタヨ。ここ二日こんなことばっかだよ。
厄年ではなかったはずだけど……。

「ただいま！」

災難が続いた俺を家族はきつと癒してくれる……、
「奏音！ こんな時間までどこで何してたんだい！」
はずもなかった。

「いろいろ大変だんだよ！ 飯は？」

マイマザーは自分の腹をポンポンと叩いた。

「喰っちまったのかよ！」

「昨日も遅く帰ってきて、飯はいらないと言ったのは何処のどいつだい？」

確かに昨日のあの女のせいで遅かっただけか。あの親子め！ とことん俺に迷惑掛けやがって！

「仕方ないだろ！ 無理やり連れて行かれたんだから！ なんか喰うもんねえの？」

「ないね！」

言い切りやがったよ！ 仕方ない、台所でなんか探すか。

「奏音、何やってんだい！」

「なんか喰うもの探してんだよ！」

あんたがなんも出してくれないからだろ！

「お前に喰わせるものなんてないね！ 台所から出てきな！」

台所にも居ちゃいけないのかよ！

しゃーね、もう寝るか！

「台所に来たついでに皿洗ってきな！」
ひでえ。

今日の朝食は食パン一枚（六枚切り）とコーヒー一杯（インスタント）。育ち盛りの俺には全然足りないが仕方ない。家では母は絶対だ！

「あー、腹減った」

口に出して言うのと空腹も加速する気がする。

「おはよ！ 奏音ちゃん」

後ろから俺の頭を突き飛ばしながらやってきたのは瑞穂だ。こいつは俺に追いつくために走ってきたのだろう。肩で息をしているためにトレードマークのポニーテールがふさふさと揺れている。

「何すんだよ！」

「久しぶりに一緒に行けるのがうれしくて！」

俺に向けてくる満面の笑み。こいつは皆にこの笑みを振りまくから勘違いする奴が後を絶たないのだ。

そっぴや最近一緒に学校へ行つてなかったな。学校でも話さないし。別にどうでもいいが。

「昨日はどうなったの？」

会長様による誘拐のことを言っているらしい。

「開放してもらうのが大変だったよ！」

そんな、話をしている俺の隣に一台の黒塗りの高級車が止まった。見覚えあるぞ！ まさか！

降りてきたのは従者二人を連れた紅葉お嬢様。ここに女の娘が四人いるが、彼女の硝子のような透明な肌は誰も真似できないだろう。そして、今の俺には紅葉お嬢様の容姿を眺めている余裕などない。ヤバイ！ こいつと関わりと消される！

「待ちなさい！」

無視、無視。

「行くぞ、瑞穂！」

「で、でも。この人奏音ちゃんに話があるみたいだよ？」

察してくれー、瑞穂！ 俺は拒否してるのわからないか！

「どうして私を無視しますの！」

「お前と話すと消されるんだよ！」

あー、反応しちまったよ。死亡確定！ もういい！

「で、何の用だよ！」

反応しちまったなら仕方がない。話を聞いてやるか！

「昨日お父様に招待されたそうですね」

「招待？ 誘拐の間違いだろ！ てめーら親子は誘拐ばかりしやがって！」

普通に招待できないのか！

「お父様をバカにしましたわね。覚悟しなさい！」

何をだよ！

「ミキさん、マキさんやってしまいなさい！」

「うっ」

一瞬意識が遠のいた。見るとミキと見られるほう（よく似ているので自信はない）がスタンガンを持っている。

「天の裁きです！」

何が『天の裁き』だ！ ふざけやがって！

「勝手なことやってんじゃねえ！」

「やめなよ、奏音ちゃん！」

なんで止めるんだよ！ いや、何を止めるんだよ！

「あなたはこいつの何ですの？」

「あつ、はじめまして衣川瑞穂きぬかわ みずほです。奏音ちゃんの幼馴染だよ！
なに自己紹介してんだよ！

「幼馴染？ こんなのと付き合わないことをお勧めしますわ！」

ひでえ、お前は俺の何を知ってんだよ！

「んゝ、私の友達は私が決めるから気にしてくれなくていいよ！」

「ふん！」

紅葉お嬢様は怒って先に行ってしまった。まあ、先に行ってくれて助かったが……。

ってか、俺はどうなるの？

朝から疲れたよ！ 授業始まるまで寝るかな。

「おい、奏音！紅葉お嬢様と何話してたんだよ？」

周のせいで睡眠を妨げられたじゃねえかよ！ タイミングの悪い奴め！

「なんで知ってるんだよ！」

ほんの十分前の事だぞ！　いくら紅茶が注目を集めると言っても早すぎだろ！

「いや、前にいたから」

見てたのかよ！

「見てたならわかるだろ！　あいつの勝手さを！」

「まあ、逆玉の興狙ってるんだからそれくらい我慢しろよ」

狙ってねえよ！　いつ俺がそんな素振りをしたんだよ！

「狙ってないって言いたいんだろ？　じゃあ、なんで何回も話すのさ？　お父さんとも会ったし」

こいつ、俺の言いたいことわかってんじゃねえかよ！

「別に会いたくてあつたわけじゃない！　見てただろ無理やり連れていかれるのを」

「いつまでそんなこと言ってるんだよ。もうばれてるぜ！　観念しろよ！」

なぜ、観念せにやなんのだ！

「あんな奴、逆玉の興狙っても割に合わん」

「お前そんなこと言っていると夜道で後ろから刺されるぞ！」

紅葉を狙ってるやつ多いんだから、と周は続ける。

「知らん」

もう周を無視して寝ようとする、担任である教師Aではなく学年主任が入ってきた。寝れなかつたじゃねえかよ！

「悠木君、後で職員室に来るように」

なんか呼び出しされるような事したか？

周がほら教師にも狙われてる！　みたいな顔をしている。うざっ！

職員室に入るとさっきの学年主任がたばこを吹かしながら、手招きした。こんなところでたばこなんて吸っていいのかよ！

「悠木君、君は最近池宮城さんに迷惑をかけているそうですね？」

「迷惑を被ってるのは俺のほうです」

「そんなことはどうでもいいんです！」

言い切りやがったよ！

「重要なのはあの池宮城さんが怒っているということです。これ以上何かやったら退学になりますよ？ 謝ってきなさい！」

「嫌だね！」

なんかこの教師泣いてるんだけど！

「お願いだから、俺も首になってしまっただよ！ 家族を養っていかなくちゃいけないんだからさ！ お前が謝ればそれで丸く収まるんだよ！」

泣き落しかよ！

「お前は私たち家族に路頭に迷えと言っのか！」

「俺は悪くない！」

「いいから、行くぞ！」

教師に無理やり連れていかれる。もう嫌だあ！

今俺は二年三組、つまり紅葉お嬢様のクラスにいる。

紅葉がふんぞり返って椅子に座っていて、その一步後ろの左右にミキとマキが立っている。

紅葉の小川のようにきらきらと光る唇は横一直線に閉じられていて、水晶のような瞳は俺たちを真直ぐ見つめている。

「このたびは御迷惑をおかけしました！」

教師が一生徒である紅茶に深々と頭を下げているが、俺は下げない！

「お前も謝れ！」

「痛い！ 痛い！」

この教師ときたら、俺の髪をおもいきりつかんで鉛直下向きに投げ下しやがった！

ガッツ！

俺の頭は教師の手を離れた後、床に衝突した。
痛すぎる……。

教師が生徒の頭を地面に叩きつけていいのかよ！

「本当に申し訳ございませんでした！」

「仕方がないですね、これからこんなことがないように教育しておきなさい！」

紅葉の言葉を聞いた教師はフーッと息を吐いた。安心したのだろう。ダメ教師め！

「はい、ありがとうございます！」

俺たちは何度も紅葉に頭を下げ教室を出た。

「……、なんで私が小娘に頭を下げないとならないんだよ」

そりゃ、そう思うだろうな。でも、俺に聞こえるように言わなくてもいいんじゃないか？

「ためーのせいだからな！」

この教師怖！ 言葉遣いも悪いし。

「最近奏音ちゃん、池宮城さんとよく話すよね？」

今日は珍しく瑞穂と一緒に帰路だ。

「別に話したくて話してるわけじゃないし」

「そうなんだー」

なんか上の空だな。こういうときの瑞穂はやバいんだよ！ 絶対

何か言いだすぞ！

「今日家に来ない？」

ほら来た。何年幼馴染やってると思ってるんだよ！

「なぜ？」

「お父さんが奏音ちゃんに会いたがつってるんだよ」

瑞穂の父さんかぁ。

「あんま、会いたくないな」

「奏音ちゃん、お父さんに好かれてるもんね！」

確かにそうなんだろうが……。

「でも、なんで急に？」

「池宮城さんのことを話したら……」

また、死亡確定ですか？

「絶対に行かん！」

「えー」

行ったら俺がどうなるか、想像できるだろ！

「実はもう後ろにいるんだなー」

「うわっ！」

何時からいたんだよ！

「さあ、我が息子よ。その池宮城さんのことを詳しく教えてくれな
いかな？」

ははは、無理やり連れてかれるの何回目だよ！

俺は瑞穂父に連れて行かれ、瑞穂の家にいる。昔は通って瑞穂と
遊んでいたが、最近は来ていない。

テレビとかブラウン管じゃなくなってるよ！

「俺はいつも言ってるよな？」

瑞穂父は俺とは違い真剣な表情で言ってくる。ってか、何をだよ
！ どうせろくなことじゃないくせに。

「瑞穂を好きにしていいいからほかの女には色目を使うなと！」

そういえばよく言ってたな。でも、親としてその発言どうよ？

「別に色目を使ってるわけじゃないけど」

俺、あいつの事よく知らないし、好きになる要素とかないし。

「じゃあ、なんで瑞穂がため息ばかりついていたんだ？」

はあ？ それがなんで俺に関係があるんだよ！

「昨日家でため息ばかりついていたんだよ！ 瑞穂の友達に聞いて
みたらお前が最近池宮城さんと仲よくしてるって言うじゃないか！」

瑞穂の友達に聞くなよ！

「で、君はどちらが好きなんだ？」

なんでみんな、そっちの方向にいくかな。本人たちはそんなこと
考えもしてないのに……。

そのとき、瑞穂父の背後に一つの影が見えた。つつても、誰かは
すぐわかるんだけどね。

ガッツン！

瑞穂父は後頭部を激しく殴打された。

きゃー、殺人よー！

後ろに立っていた瑞穂は息を上げ、右手には自由の女神型のライターが握られてる。

あれって結構硬いんだよねえ。(体験者談)

「ふう、やっと追い付いた」

瑞穂父の速さは自然界最速なのではないだろうか？

「お父さんの言うことなんて気にしないでいいからね！」

瑞穂の引きつった笑顔、久しぶりにみたなあ。

「ほらもう帰って帰って！」

追い出されたよ！

瑞穂の父さん大丈夫だったかな？ まあ、明日にでも聞いておこう。

さてと、今日は早い時間に開放されたから、繁華街の方に行ってみるか！ そういえば、まだ今週の漫画雑誌立ち読みしてねえよ！

じゃあ、まず始めは本屋かな。

今週も漫画家さん、夢をありがとう！ いやあ、面白かったね！ つらい現実を忘れさせてくれるよ。

思いのほか時間がつぶれたなあ。そろそろ、帰るか！

ん？ あれは周と穂乃香ちゃんじゃね？

周もそろそろ認めちゃえよ！ 俺だったら穂乃香ちゃんは紅葉の次くらいにごめんだけどね。

外伝 1

ん、最近奏音と一緒に帰らんくなったな。奴の周りは忙しいかな。別に帰りたいわけじゃないが。

「叔父さん！」

「叔父さん呼ぶな！」

反射的に振り返りながら叫んでしまった。後ろからはショートカットで線の細い女の子が髪を揺らしながら走ってくる。

「え、なんで？」

「俺とお前は同年だろ！」

同年の女の子から叔父さんと呼ばれる俺の気持ちになって見やがれ！

「でも、叔父さんなのは事実だよ？」

突然だが、皆さん状況が理解できないと思うので説明しよう。俺、泉周には同年の姪、泉穂乃香いずみほのかがいる。年の離れた兄の子供が生まれた年に母親が俺を産んだからだ！俺の両親頑張りすぎだろう？

「叔父さん、誰に話してんの？ 頭大丈夫？」

「叔父さんヤメイ！」

『え』と駄々をこねている子供のような顔をしながら見上げてる。

「でも、私は周君の頭がおかしくたって好きだからね！」

なぜか、こいつは俺の事が好きらしい。それも、ライクでなくラブだ。でも俺は妹的な奴としか思えない。まあ、好いてくれるのは俺としてもうれしいんだが。でも、でもだな……、

「そろそろストーカーするのやめてくれない？」

そう、こいつのストーカー癖はどうにかしてほしい！

「ストーカーはひどいよ！」

「じゃあ、洗濯機の中の俺の服のにおい嗅いだり、俺が入ってるときに風呂場に入ってこようとしたり、俺の予定を全部手帳に書いて

俺より把握してるのはストーカーって言わないんだな？」

最近ではパソコンを使って俺の行動をシュミレーションしたりもするらしい。

「私はただ周君分が欲しかったただだよ！」

周君分ってなんだよ！ ブドウ糖にでも変わるのか！

ちなみにこいつは俺とは別の家に住んでいたが、最近親父に無理言って俺の家で居候をしている。いや、親父は喜んでいたが……。

こいつのせいで俺は彼女ができたことがない。好きな子に告白しても二股はいけないよって断られるんだぜ。奏音はしてるのに！

「私はどこまでも周君に着いて行くから！」

「おもいつきり、ストーカーじゃん！ てか、俺らは三親等なんだから結婚とかできないんだけど？」

いところなら結婚できるんですけどね。

「それでも私は構わない！」

「俺は構うの！ 結婚したいの！」

「私と？」

「お前とじゃねえ！」

第2話 前編

また、新しい朝がやってきた。昨日は遅くまでゲームをやったから眠いぜ！ 最近のゲームはすごいな！ 早く帰って続きをやりたい！

今日は、なんか車が多いな。てか、ここはすれ違いもできないような狭い道だぞ？ こんなとこ、走んなや！

そう思っていたら、昨日に引き続き隣に黒塗りの高級車が止まった。

そこから降りてくるのは会長様！ 顔は怒りで一昨日会った時と同じ人とは思えないほど歪んでいる。

はは。俺、死んだな。

「私は、一昨日に紅葉と関わったら消えてもらうと言ったよな？」

ここで知らないと言っても、知ってると言っても終わりじゃないか！ どうすればいいんだ！

「どうなんだ！」

「は、はい！」

「そうだよな、言ったよな？ では、約束通り消えてもらおうか！」

俺はこれからどうなるのだろう？ コンクリ詰めにされて東京湾にでも沈められるのだろうか？ それとも、どっかの軍の外国人部隊にでも売り飛ばされるのだろうか？

「消えてもらう前に一つ聞いておこう。なぜ、命の危機を知りながら紅葉と関わったんだ？」

ど、どう答えよう？ ここでうまく答えれば救われるかも！ うん、これだ！

「紅葉さんのためなら命が惜しくなかったからです！」

どうだ！

会長の肩が震えだした。

やばっ！ また失言だったか？

「ハハハ」

えー、笑いだしたよ！ 怒りのあまり可笑しくなったのか？ 今から走って逃げれば助かるだろうか？ 相手は車だし、狭い道を抜けて行けばなんともかなるんじゃないだろうか？

そうと決まれば速いに越したことはない！ よし！

「俺は君みたいな熱い男は嫌いじゃない」

な、何？ 何とかなったの？

「よかるう。紅葉と仲良くやりなさい。ただし！ 紅葉を泣かしたら本当に消すからな？ いいな？」

「は、はい！」

「会長様、お時間が」

運転手の人とはまた別の、そのまんま執事といった感じの人が車から降りてきた。

「わかった、今行く」

「では、失礼しよう。フハハハハ！」

笑いながら走り去って行った。

親公認になったのか？

命の危機を何とかかくぐった俺は、4限目が終わり次第全力疾走しているクラスメイトに混ざるだけの体力もなく、とぼとぼと学食を目指した。急がないのはいつものことだがな。

購買部で好みのパンを買おうとしたら、走ったぐらいじゃ足りないかもしれないけど、一人学食で食べようと思ったら開いている席は意外とあるもんだ。

ヤベツ！ 周忘れてきた。まあ、いいか。どうせ一緒に行っても二つなんて開いてる席ないし。

それに周ときたら、女の子にいつも弁当作ってもらってるんだぜ！ もちろん穂乃香ちゃんのだが。奴は穂乃香ちゃんの弁当を食べるのが恥ずかしいらしく、昼は学食で食べて、弁当は早弁か遅弁？ する。昼飯代がもつたないと思わないのかね？

こんなことを考えていたら、何が違和感がした。なんだろう？

周りに廊下を歩いている生徒は昼休みなのに一人もいなく、足音も俺の一つしか聞こえない。何かおかしい？ よく見てみると、俺の影が大きいことに気付いた。というか、二人の影がくっついてい
るような？

「旦那様を言いくるめたそうだな？」

ヒッ！ 俺の耳元から声が聞こえた。俺は驚いて五歩ダツシ
ユした後振り返る。そこにいたのは、腕を組んだマキだった。

こいつ、気配を消して歩幅を合わせて足音を俺のものに隠しながら
背後をついてきたらしい。

「もつと、普通に出てこいや！」

「私がお前の刺客だったら死んだたな」

「そんな奴、いるかよ！」

スパイ映画の見すぎだ！

「どうかな？ 旦那さまなら送ってきてもおかしくないぞ？」

やべえ、マジで刺客を送られそうだもんな。

「旦那様を言いくるめたらそれで安心か？」

「勝手に勘違いしただけだよ！」

まあ、あの勘違いがなかったら今頃どうなっていたかわからんが
……。

「旦那様は言いくるめられても、私たちは無理だからな！」

「だから、俺。お嬢様に興味ないって！」

「池宮城財閥の財産にしか興味が無いのか？ 最低な男だな！」

激しく勘違いしてますよね？ もちろん俺だって金は欲しいが、
結婚をそういう理由ではしたくない！

「そうじゃねえよ！」

「じゃあ、お前は紅葉様のためにどこまでできるんだ？」

「何もできねえよ！」

なんで、俺があいつに何かしてやんなきゃいかんのだ！

「ほう。見所があるじゃないか！ 自分が何もできないちっぽけな

存在と理解しながらも、紅葉様を求めるんだな」

プラスに解釈しすぎだろう！

「そうかそうか。旦那様が認めたのも納得がいったよ。紅葉様を幸せにして差し上げてくれ！」

そう言つと、目頭を押さえながら去って行つた。そんなに感動することだったのか？

なんか周りはおもいつきり勘違いしているけど、お嬢様と会話すらまともにしたことないんだけど？

外伝 2

今日はもう授業が終わり放課後だ。私は街にあるオープンカフェに直行した。

学園には小学校のように寄り道してはいけないうんて決まりはな
いんだけど、制服でいると歩いている人の目が気になる。私って自
意識過剰？

なぜオープンカフェに来ているかというところ、穂乃香ちゃんに悩み
を聞いてもらおうと思って……。

悩みとはもちろん奏音ちゃんの事。最近、池宮城さんといろいろ
あつて大変そうだから、池宮城さんと同じクラスの穂乃香ちゃんに
相談する。

穂乃香ちゃんなら、今の状況の打開策を見つけてくれるかもしれ
ない。

でも、穂乃香ちゃんに相談するのは間違いかなくって思う今日
この頃。他に相談する人もいないんだけどね。

「瑞希ちゃん。ごめん、待った？」

穂乃香ちゃん、やっと来たよ。

「私も今来たところだよ」

多分、周の事を追いかけていたのだろう。

「で、相談って言ってたけどやっぱり奏音君の事？」

私っていうと最初に奏音ちゃんの事が出てくるの？

「そう」

「だよな〜！」

穂乃香ちゃんの目が輝いているよ！ 私の悩みを楽しんでるでし
よ！

「最近池宮城さんとの噂聞くし。あれってどこまで本当なの？」

「知らない！」

私には関係ないもん！

「瑞希ちゃんのお父さんも黙ってないんじゃないの？」

「そう！　それが問題なの！」

昨日のあの後、私はお父さんの手当てをお母さんに任せて、私は部屋に籠った。

だって、あんな無神経な人にかわりたくなかったんだもん。

「瑞希ちゃんのお父さんって私に通じるところがあるよね」

自分でわかってたんだ……。

「それで、瑞希ちゃんは どうしたいの？」

「わ、私？　私は……、今のままの関係でいたいな」

今の関係を壊そうとは思えない。

「池宮城さんに取られてもいいの？」

「それは嫌だよ！」

「なら、自分から行かなくちゃ！　後から後悔しても遅いよ！」

でも穂乃香ちゃんみたいにはできないよ。

「でも」

「私がうまく手をまわしてあげるから！」

心配だな。

第2話 後編

やっと休みが来たぜ！ 今週は長かった……。かなり面倒事に巻き込まれたからな。

でも、週末は奴らと会うこともないだろう。家でゆっくりするぜ！

「奏音！ 奏音いないのかい！」

母親が俺を探しているみたいだ。嫌な予感しかしない。今のうちに見つからないように外に出よう！

「奏音！ ここにいたのかい。呼んでるんだから返事なさい！」
「やべっ！ 見つかった！」

「暇なら買い物に行つてきな！」
「面倒くさいなあ！」

「いやさ、今から勉強しようと思って」

「あんたが勉強なんてするはずがないよ！」

ひどっ！ 俺だつてときどき、たまに、稀に勉強するときもあるはずだと思わなくもないこともないんだけど……。

「ほら、ここに買うものは全部書いてあるから買つてきな！」

近くのスーパーの広告に何個かメーカーで がつけてある。えつと……、紙しかくれないの？

「金がないと買えないだろ！」

「あら、お金が欲しかったのかい。それならもつと早く言いな！
つたく、面倒だね！」

まるでいつもは渡してないのにみたいに言うなよ！ 忘れてただけだろ！

それで、俺は何を買ってくればいいんだ？ えっと、千葉産大根
Lサイズ一本98円！ メキシコ産かぼちゃ1/4カット148円
！ 大分産ピーマン200g98円！ 山梨県・他国内産ナス2本
88円！ 国産若鳥手羽120g98円！ お一人様一つ限りか。
これで何を作るんだろう？

って、これタイムセールじゃん！ あそこのスーパーのタイムセールはおばちゃん達が怖いから嫌なんだよ。やべっ、後十分で始まるし！

「母さん、金まだ？」

「うるさいね！ もっと早く言わないあんたが悪いんでしょ！」

ええー、そんな馬鹿な！

「ほら、お金だよ。早く行つてきな！」

そう言つて渡されたのは五百円硬貨一枚。果してこれで足りるだろうか？ いや、足りない！ 足りるわけないだろー！

でも、もう金をもらつてゐる時間なんてない！ もらおうとしたところでまたグタグタ言われるだけだ！

残りはもう八分！ 残された時間は少ない！ スーパーまで信号に止まらなければ自転車で六分といったところ。信号に止まったらOUTです！

俺は全力疾走する。車も抜いてるぜ！

うおー！

やっと辿り着いたぜ！ ヤベ、もう始まつてるよ！
うおーやー！

頑張つておばさん達の中に手を伸ばす。

まずは大根！ あともう少し。そこだあ！

その瞬間、横からやってきた手に俺の狙っていた大根はいとも簡単に持つていかれた。

ならば、次はかぼちゃだあー！

しかし、またあともう少しというところで取られてしまう。
今度こそは……。

最終的に俺は母に頼まれたものを一つも取れなかった。
すべては俺が取ろうとしているのをわざわざ奪っていく男のせいだ！

そいつは身長が高く、世間一般ではイケメンと言われる部類の顔をしていた。年齢的には俺と同じくらい。

文句の一つくらい言ってやろうと思ったが、タイムセールが終わった時には見当たらなかったのと言えなかった。

はぁー、絶対に怒られるなぁ。

店の外に出ると、例の男がおばちゃん達に囲まれている。

おばちゃんにも人気あんのかよ。

何をやっているのかと見てみると、奴ときたらさっきのタイムセールの品をおばちゃん達に配っているじゃないか！

「てめえ、いらなら俺によこせや！」

「嫌だね！」

それだけいうとやつはまたおばちゃん達と話し始める。
なんなんだよ、こいつは！

何も買えずに家に帰ってきた俺に対して、母親は全く怒りもしなかった。

それどころか、

「多分買えないと思ってたよ」

とまで言う始末。じゃあ、買いに行かせるなよ！

「そうそう、使わなかった千円そこにおいておきな！」

「つちよ！ 五百円しかもらってないんですけど！」

「そうだったかい？ じゃあ、千円おいてきな！」

人の話聞け！ ってか、それはカツアゲですか？ 息子からカツアゲしますか？

俺は何も言わずに五百円を置いてその場を離脱した。

はぁー、もう疲れた。おばちゃん達はいつもあんな戦いをしてるのかよ！ 男にはとても無理だな。

せつかくの休日だったのに休めなかったし。

もういいや。寝よ。

プルルル、プルルル。

このタイミングで電話ですか？ 周だったら無視しよう。

携帯の液晶を見てみると、見覚えのない番号だった。

間違い電話か何かだろう。放っておけば勝手に切れるっしょ。

プルルル、プルルル。

そのうち、切れるだろう。

プルルル、プルルル！

もう少し待てば……。

プルルル、プルルル！

だあー！ うるさいな、早く切れや！

「はい、もしもし！ どちら様で？ 間違い電話だったら怒るよ！」

「えーと。君はあれだろ？ 私がわかるか？」

わかるわけねえーだろ！ それに、あれってなんだよ！

「誰だよ！ オレオレ詐欺か？ ああー？」

「お前は、ゆ、ゆゆつ、悠木……、かかかつ、奏音だよな？」

オレオレ詐欺ではないようだ。

「そうだが、お前は誰だよ！」

「わ、私はマキだ」

マキって言うのと昨日のおもいつきり勘違いした女だよな？

「何の用だよ？」

「明日、午前十時に駅前の噴水のところに居ろ！」

どうせ、面倒ごとだろ！

「明日は用事があるんだが」

「何の用があるんだ？」

「家でゆっくりしていようかと……」

チッ！

舌打ちが聞こえたんですけど！

「聞いた私が馬鹿だったよ！ 明日は遅れたら容赦しないからな！」

ガッシャン！

切れたよ！ いつも通り強制ですか？

深い眠りの中にいた俺は突然現実世界に呼び戻された。

グボツ！

腹が痛い。何か思いっきり殴られたみたいだ。

いつもならこんなことはない。俺の家族は俺が寝坊していても誰も起こそうとしないからだ。

完全に覚醒していない意識の俺は目を開けることで、覚醒できると思っていた。

目を開けるとそこに待っていたのは、朝のまぶしい日差しと俺の腹を踏みつけているマキの姿が……。

ああ、まだ俺は夢の中にいるんだ。昨日こいつから電話があったから気になっていて、夢にまで出てきたんだな。

まだ、夢を見ているのならいつそのこと今からもう一度寝てしまおう。夢の中で寝るなんてなかなかできる体験じゃないしな。

先ほどの衝撃も和らぎ睡魔が俺を迎えに来た。まぶたが次第に閉じて行く。さよなら、夢の中のマキよ。

「寝るなあー！」

ぐはっ！

俺は再び現実世界に引き戻された。腹の上にあつた足がまた振り下ろされたらしい。

俺だって、これが夢じゃないことぐらいわかってるさ！ でも、でもだな。寝ざめてすぐにこんな風景が広がっていたら現実逃避の一つくらいしたくもなるだろ！

「早く起きろ！」

俺は包まっていた布団をはぎ取られ、ベットから突き落とされた。いくらなんでもひどすぎませんか？

「約束は十時からだろう？ まだ六時じゃないか！」

約束の駅前の噴水までは、俺の家から歩いて十五分ほどのところにある。九時に起きたって間に合うだろう。

「男なら早く行って待っているのが当たり前だろう？」

俺だってその通りだと思いが、それだって限度があるだろう！

「俺に何時間待てと？ てか、なんでお前俺の部屋にいるんだよ！」

「お前の母親に入れてもらった。お前を起こしてくれと頼まれたんだ」

何やってんだよ！ 俺の知り合いが来たならまず俺を起こしに来いよ！

「さあ、早くしろ！ 出かけるぞ！」

結局、俺は十時まで三時間待たされた。だが、まだ来ない。

誰がっと思うだろ？ もうマキはいるんだから。

「誰か一緒に行くのか？」

「はあ？ 何を言っている？ 昨日言っただろ？」

「聞いてねえよ！」

「そうだったか？」

昨日の事くらい覚えてるや！

「今日はお嬢様とのデートだ」

「はあー！」

なんで勝手にデートなんか仕組んだよ！ 今日是一日あのわがままお嬢様と一緒になのか？

せっかくの日曜日だというのに早朝から叩き起こされて、お嬢様の面倒をみて……。全く休めもしないんだな。

「もう十時じゃないか！」

「お嬢様は多忙なんだ！ 我慢しろ！」

「はいはい」

まあ、ちよつとくらい遅れたっていいけどさ。

さて、十一時を回りました。無言で立っている俺たち二人を通り過ぎていく人々が不審がつているようだ。

「さすがに遅いなあ。私は様子を見てくるからお前はここで待っている！」

そう言い残して、マキは人混みの中に消えていった。

そして現在の時刻は午後八時。おもいつき待ちぼうけを喰らった。

空からはポツリポツリと雨粒が降ってきた。ここいてはびしょ濡れになってしまうので、この噴水が見える店の軒先に避難した。

いつまで待たせるんだよ！　こうなったらとことん待つてやるぜ！

さて、今日は月曜日。新しい一週間の始まりだ。

でも俺は今ベットの中で寝ている。別にまだ早朝だからとかいうオチはない。

昨日待ちぼうけを喰らった俺は風邪をひき寝込んでしまったのだ。定番だな……。

軟弱な奴とか言われても仕方がないのかもしれないが、十二時間以上待った俺の忍耐力は評価に値すると自負している。

でもまあ、土日に関を休めることができなかったからちょうどいいと言えはいいのかもしれない。

退屈で仕方がないが。

今、家にいるのは俺一人だ。母親は買い物がてら近所のおばさんと世間話を少々。あと三時間は帰ってこないだろう。

昼飯は米はあるからお粥でも作れとのこと。俺、病人なんですけど？　少しくらい氣を使ってくださってもよろしいのではないでしようか？

まあ、自分で飯を作るのは面倒くさいので作らない方向で。別に作れないわけじゃないですよ？

ピーポーン！

玄関の呼び鈴の音がした。

誰だよ！　母親はいないし、俺が出るしかないか。
がちゃ！

えー、開いちゃったよ！俺まだ玄関まで行ってないんですけど？母親なら呼び鈴は鳴らさないし。

泥棒ですか？

母め、ちゃんと鍵かけてけや！

やべえ、足音が俺の部屋に向かってくる。

これはもう、中学の修学旅行で買った木刀で応戦するしかないな！がちゃ！キー！

扉が開いた。今だ！

「おりゃー！」

「きやあ！」

泥棒は驚き尻もちをついた。

きやあ？随分かわいい声を出す泥棒だな。

よく見てみるとそこにいたのは頭を抱え、震えている瑞希だった。

「何勝手に入ってきてんだよ！泥棒かと思ったぞ！」

「だって、奏音ちゃんが心配だったから」

「そうかよ」

そういえば、こいつは昔から気になっていることがあると、後先考えずに一直線に突き進む奴だったな。

「お昼は食べたの？」

「食べてねえ」

「おばさん作ってくれなかったの？」

こいつ、まだ俺の母親の性格を理解してないらしい。俺と知り合って十何年にもなるのに。俺の家にもかなり来たのにな。

「外で世間話してるよ」

「そつなんだ、じゃあ私が作ってあげるよ！」

「悪いな」

瑞穂の料理は母のよりも断然おいしいから、素直にうれしい。まあ、こんなこと言ったら飯を作ってもらえなくなるから言わないが……。母様、いつも食事を作ってくださっていること感謝していますよ！

「はい、できたよ」

飯は俺が心の中で母親の機嫌を取っていた間にできていた。機嫌を取るのには結構時間がかかるらしい。

「玉子粥だよ」

「ありがとう。うん！ うまいな」

ツルルルルル！

今度は電話が鳴り始めた。

「私が出てくる！」

そう言つと瑞穂は食卓の横に置いてある電話の受話器を上げた。

「もしもし、悠木ですが……。はい、はい。……はい、……はい」
ある程度話していたかと思うと、受話器を俺の方へ突き出してきた。

「奏音ちゃん、池宮城さんだよ！」

瑞希がなぜか不機嫌に見えた。

「はい、代わりました。奏音です」

「紅葉です。昨日は申し訳ありませんでしたわ。私を待っていて、風邪をひいたんでしょ？」

受話器から聞こえてきた紅葉の声はおしとやかでとても学園で会った時と同一人物とは思えない。

「確かにそうだが……。いや、そんなことはないぞ！」

「そう」

紅葉は明らかに納得していない様子。俺が『確かにそうだ』とか言ってしまったんだから当然か。失言だな。

「それで、昨日のお詫びに風邪が治り次第埋め合わせをしたいのですが？」

「気にしなくてもいいぞ？」

俺も強制的につくらされた約束だ。紅葉の方だって似たようなものだろう。

「私がしたいんです。させてください！」

「わかった。いいよ」

紅葉の気迫に押されてついOKを出してしまった。ところで、紅葉がしたいのは埋め合わせなのか？ 俺とのデートなのか？

まあ、前者に決まっているか。でも、無理作らされた約束にまで責任を持つとするのはすごいな。

「それでは、また決まり次第連絡しますわ」

俺が受話器を下ろすと頬を膨らました瑞希の姿が目に入ってきた。どこの幼稚園児だよ！

「昨日、池宮城さんとのデートの予定だったんだってね？」

「まあ、そうだったな」

別に隠すような事でもないだろう。

「私が心配してきてあげたのに……。ばっかみたい！ 奏音ちゃん
は池宮城さんに看病してもらえばいいんだよ！ ふん」

瑞穂は扉を思いつきり閉めるとそのまま帰っていった。

何だったんだ？

外伝 3

今日は奏音が学校を休んだらしい。

どう考えても私のせいだよな？ 電話でもかけてやればよかった。まあ、体力もありそうだしそんなに心配しなくてもいいだろう。

明日にでも謝っておくか。

「マキちゃん。マキちゃん」

私の親友である穂乃香ちゃんがやってきた。

「どうしたの？」

「この前薦めた小説は読んだ？」

えっと、穂乃香ちゃんが薦めてくれた小説って言うところ……、ああ、あれだね。

「えっと、あのネット小説？」

「そうそう」

「ごめん、まだなんだ」

まだ読んでないけど恋愛小説だってことはわかる。だって、穂乃香ちゃんは恋愛小説読まないから。

私はファンタジーとかも好きだけど、穂乃香ちゃんとは話が合わない。最近では恋愛小説ばかりを読んで、その内容をよく二人で話している。

「そっかー、あの話は面白いよ！ 主人公の娘と幼馴染の純愛がいよいよ」

「純愛ものなんだ。久しぶりだね。最近はどうドロドロしたのにハマってたんじゃないの？」

私は最初、重いのは読みたいくないと思っていたけど、薦められて読んでみると面白く穂乃香ちゃんのお勧めをほとんど読破してしまった。

「そっなんだけど、私の一番好きな作家さんの新作だから！ 前から楽しみにしてたんだ！」

「そういえば、穂乃香ちゃんは悠木の知り合いだったよね？」

前に穂乃香ちゃんの思い人の親友が悠木だと聞いたことがある。

「そうだよ。それが、どうしたの？……。あ、そうか！池宮城さんと奏音君はどこまでいったの？池宮城さんのお父さんが奏音君と話すために学園まで来たんだよね？」

「悠木は旦那様に認められたよ。でも、旦那様がこのまま何もしないとも思えないけど……」

旦那様はそういうお方だ。自分の好きな者にはわざと試練を与えようとする。

「親公認になったんだ……」

そういうと穂乃香ちゃんは険しい表情を見せた。

「もしかして穂乃香ちゃん、悠木の事が……」

「あはは、それはないよ。私には周君がいるもん！でも約束が……」

……

そういえば、穂乃香ちゃんには好きな人がいたね。犯罪的なまでにアタックしてるって噂で聞いたことがある。普段はそんなことしそつにはみえないんだけどね。

「そうだったね。でも、悠木ときたら旦那様に認めてもらったのにお嬢様に全然会いに来ないんだよ？だから私が仲を取り持とうとして……」

「それで、奏音君は学園を休んだんだね？」

「うん。でも、今回は失敗しただけで次回は成功させるから！」

第3話

今日朝起きてみると、昨日の風邪が嘘のように治っていた。昨日の瑞穂の卵粥のおかげだろうか？

うまかったもんね。怒って帰ってしまったみたいだったから、瑞希の手料理はしばらく食べれないだろう。

そういえば、瑞希はなぜ怒って帰ってしまったんだろう？ お礼を言っただけだからか？

まあ、今日会ったら言っておこう。

そう思って学園に来たのだからなかなか時間が取れず、昼休みになっってしまった。

今日はパンの気分だな。

「周、今日はパンにしようぜ！」

「パンか、今からだとまともなの残ってないだろう？」

購買部のパンは競争率が高く、チャイムが鳴ったと同時にダッシュしても欲しいものが手に入るかわからないくらいだ。

「大丈夫だよ。人気のあるのは取れないだろうが、結構いろいろ残ってるから。それに奥の手もあるしな」

「そうか。じゃあ、そうしよう」

ほとんど使うことはないが、購買部には裏の入手ルートがある。知っている人は少ないが、今も存在するはずだ。

購買部、そこは学園の中にある最強最悪の戦場の名前だ。そこでは、性別、学年など関係なく戦闘を繰り広げている。

ここで勝利を挙げたものは午後の平穏を約束され、敗北したものは飢餓に苦しむ。

そこに情け容赦などなく、誰一人他人を気遣う余裕などない。

学食も人がごった返しているのだが、ここは比べ物にならない。

俺たちはこの地獄絵図を目の当たりにして言葉を失った。

「購買ってこんなにひどかったか？」

「俺らが来てた時はここまでではなかったよ。最近、新作のパンを販売するようにしたら人が激増したらしい」

「こんなことなら、学食にしとくんだったな。」

「どうする？」

「今からじゃあ、学食に行ったらって席はとれないぞ」

俺らはこの戦場で敗北と今にも突きつけられようとしている時、そいつは現れた。

まあ、裏ルートはなるべく使いたくなかったし。

「悠木、何をしてるんだ？」

「お前は、マキ……じゃない。ミキだな」

マキとは雰囲気が少し異なっている。

「ほう、私たちの区別がつくのか。それで？ 見たところパンを買いみたいいだな」

「お前もパンを買いに来たのか？ 池宮城とマキとで弁当じゃなかったか？」

前に紅葉と三人で弁当を食べているのを見たことがある。

「そうだな。だが、パンを買いに来たんだ」

「足りないのか？ そんなに食べるようには見えないが……」

ミキはマキと同じでそんなに大きくない紅葉より、一回り小さいほどの小柄な女だ。弁当プラスパンなんて想像できない。

「そんなに食うのに小さいんだな」

そう言った瞬間、周はミキに睨まれた。ミキは体が小さいことを気にしているらしい。口になくてよかったよ。

「私は運動をしているからな。ある程度エネルギーが必要なんだ」

「何をやってるんだ？」

ミキが何かの部活に入っているなんて聞いたことがない。

「武術を少しな。お嬢様の護衛として日々鍛錬をしているんだ。ここでパンを買うことはいいトレーニングになる」

「それで、どうやってこの状態でパンを買った？」

ミキと話し込んでいたが人は一向に減っていない。

「私を甘く見てるだろう。私にかかればそんなことは余裕だ。そう
だ、お前の分もついに買ってきてやろう。なにがいい？」

「総菜パンかな。三つ頼む」

「いいだろう、そこで待っている！」

そう行つた直後ミキは人ごみに消えていった。

「俺の分はー！」

隣で叫ぶ周。自業自得だな。

昼飯はミキのおかげでかなりいいものが食えた。中には人気の焼きそばパンなどあの時間には存在していないものまで。

もしかしたらミキも裏ルートを使ったのかもしれない。それだつたら、悪いことをしたな。

もちろん周は昼飯なし。分けてくれーと叫んでいたが、穂乃香ちゃんの手作り弁当を早弁したんだからいいだろうということで、無視した。

そして放課後。ミキに呼び出され下駄箱のところに出向いた。

そこにいたのはミキ、マキ、そして紅葉だ。

「よう。今日の昼は助かったぜミキ！」

「それはよかった。嫌いなものじゃなかったみたいだな」

あそこの総菜パンはどれもおいしい。よほどの嫌いなものが挟んでいない限り、誰もが全部好きだろう。

「ああ、うまかったぜ。それで、あの人気の総菜パンはどうやって手に入れたんだ？ あの時間にはもうなかっただろう？」

「それは企業秘密だよ」

やっぱり裏ルートを使ったのか。まあこいつなら大丈夫だろうが、その内何かしてやらんな。

「ミキ、そろそろ本題に行つていい？」

今まで黙っていたマキが口を開いた。

「うん。わるいわるい」

「それで本題なんだが……」

こいつらからの話なんていい予感がしない。また、振り回されることになるだろう。

「お嬢様がこの前の埋め合わせをしたいと申されるんだ」

ミキの横にいる紅葉が頷く。

「気にしなくてもいいのに。お前だって、急に予定が入ったんだろ？」

「貴様、お嬢様に向かって『お前』だと？ 命が惜しくないと見える！」

ミキとマキが怒りをあらわにしている。

「じゃあ、俺はなんて呼べばいいんだ？」

「お嬢様か紅葉様だろうな」

俺は紅葉の家臣じゃないんだけど。

「なら、紅葉で」

俺が『様』とかつけても似合わんからな。

「貴様！」

「それで構いません」

今にも噛みついてきそうなミキ、マキを押さえて紅葉が許可してくれた。

「ですが！」

まだ、納得できないらしい。当たり前といえば当たり前かもしれないが。

「今はそれより本題です。こんなことをしていたら時間がなくなつてしまいますわ」

「はっ！」

紅葉の鶴の一声でミキ、マキはおとなしくなった。

「それで紅葉。埋め合わせはしなくてもいいぞ？」

「そうはいきません！ 私は高貴なる池宮城の娘。約束を破ってそのままなどとはできません！」

さすがに池宮城財閥のご令嬢ともなると、譲れないのがあるら

しい。

「まあ、紅葉がいいならいいけどな。で、どうするんだ？」

「では、食事に行きません事？ そろそろ私は夕御飯の時間ですの
で」

飯と言えば、最初るときも飯だったな。今度はあんな気まずい食
事じゃないといいが……。

「それなら、俺が場所を決めていいか？」

「はい、構いませんよ？ 和食でもフレンチでもイタリアンでも、
なんでもかまいません」

俺はそんな高そうなところ知らないがな。

「なら、俺がいつも周と行くところにしよう」

「お前、まさかお嬢様を庶民が行くようなところに連れていくので
はないだろうな？」

マキが小声で言ってきた。多分お前の想像通りだと思うぞ？

「私はどこでもかまいませんよ？ この前の埋め合わせなのですか
ら。ところで何を食べますの？」

「たぶん、紅葉は食べたことがないだろうな」

マキとミキは気付いたらしい。もう止めようとはしてこないが、
正気かと視線を送ってくる。

「何事も経験だ。もう食べることはないだろうし、庶民の食べ物
を人生で一度くらい食べておいても損はしないんじゃないか？」

俺が紅葉たちを連れていったのは有名な某バンバーガーのチエ
ン店。少し奮発して高い方へ行った。

高い方と聞いて何個か思いつく方がいるかもしれないがそれは想
像にお任せします。

紅葉とマキを席に座らせ、ミキとハンバーガーを買いに行く。

ちなみに代金は俺が四人分俺が出す。今月の小遣いが飛んでしま
うが、ここはケチってはいけなくところだろう。

「お嬢様が、学食のご飯を食べてまずいとおっしゃっておられたの

を忘れたのか？」

隣にいるミキが口を開いてきた。

「そうだな。でも、俺は紅葉の口に合うようなところには行かないし、背伸びしても仕方がないかなって」

「お嬢様は、池宮城グループで作られた最高級の食品しか普段食べられないんだ。お屋敷には専属のコックもいるしな。そんな、お嬢様にハンバーガーとは……。飽きられても知らないぞ？」

こいつらは、俺と紅葉をくっつけようとしているんだから、俺と紅葉がうまくいくように言ってくれてるのか？

ハンバーガーを持っていくと借りてきた猫になっっている紅葉が目に入ってきた。どちらかと言えば、猫と言うより猫の置物だ。何世代にもわたって完成させられたであろう白く一点の曇りもない肌。絹糸を思わせるサラサラとした長い髪。そして、見つめていると吸い込まれそうになる澄んだ瞳。そのすべてを自然が作り出せるだろうか？

俺は紅葉にできるだけ自然に話題を振った。

「なんで、ハンバーガーショップで緊張してるんだよ？」

「私は普段こんなに騒がしく、他人のいるところで食事をしませんから」

「そうなのか」

普段食えるときは執事が周りで見ていて、パーティーとかもあるだろうから、そういうのには慣れてると思っていたな。

「私は普段、ミキとマキとで食べますし、パーティーでは料理を手に取りませんもの」

「それなら、学園の学食はどうなんだ？ 普通に食べているように見えたが？」

最初に会った時は今みたいには緊張していなかった。周りの迷惑を顧みず文句を言っていた気がする。

「学園はもう慣れましたもの。でも、最初の内はあんなところ入るうとは思えませんでしたわ」

そんな会話をしながら、紅葉はハンバーガーを見た。

「これはどうやっていただきますの？ フォークもナイフも見当た
りませんけれど？」

「これはな、こうやって手で持ってそのまま食べるんだ」

紅葉は目を丸くして驚いている。

「手で食べるのは中東のそういった文化のお国だけだと思っていま
したわ」

紅葉は庶民の事をまるつきり知らないらしい。まあ、あの学園な
ら金持ちだけと付き合ってやってけるしな。

「さあ、食べてみな」

そう言つと紅葉は頷きバンバーガーを正面に構え深呼吸して始め
た。

はむっ！

紅葉が小さな口を精一杯開いて食べようとするが、全部入りそう
には到底思えない。小さく整った手でバンバーガーをローズマリー
の花弁のような淡い赤色をした口へ持つていく。そんな何気ない動
作一つとっても様になっている。

仕方なく上半分をまず食べることにしたようだ。

「あら？ おいしいですわ！ こんなもの初めていただきました」
「気に入ってくれてみたいでよかったよ」

実は紅葉達に買ったのは最近クラスの女子がおいしいと話してい
たもので、俺が食べているものより150円ほど高い。

「お前たちは食べないのか？」

まだ、ミキとマキが口をつけていなかった。

「いや、いただく」

食べた始めた二人は食べ慣れた様子で紅葉のように苦勞すること
もなく、やはり小さい口で少しずつ食べていく。

「お前らは食べたことがあるのか？」

「私たちの食生活は多分お前のものと変わらないと思うぞ」

いくら池宮城の家臣でもそんなにいい生活はしてないんだな。

「同じ家臣の中でも、良家出身でいいものばかり食べている方もいらつしやるけどな」

相槌をしながら紅葉を見てみるとハンバーガーが崩れかけていた。

「紅葉、中身が落ちるぞ」

「食べているとどうしても崩れてしまつて」

確かに、紅葉が食べているハンバーガーは崩れやすそうな形をしている。

「ミキ、マキの食べ方を参考にして食べてみるよ。ほら、口の周りにソースがついてるぞ」

紙ナプキンを使い紅葉の口元をふきとってやる。紙ナプキン越しに触れた紅葉の唇はマシユマ口のように柔らかく、それでなおかつ張りがあり俺の指を強く押し返してきた。

「なっ！ 何をするんですか。それくらい自分でできますわ！」

紅葉は顔を真っ赤にしている。ミキ、マキも顔が少し赤くなっている気がする。

こういった女の子らしい行動をされると、俺もどうしていいかわからなくなってくる。瑞希が相手だったらこんなことはないだろうが……。

「悪い、気遣いが足りなかったな」

「いえ、気にしてませんわ」

紅葉はそう言っているが、顔の紅潮は一向に治らない。

なんか俺まで恥ずかしくなってきた。

「私はもうこれでいいですわ」

紅葉のハンバーガーを見ると、半分も減ってなかった。

「遠慮しなくてもいいんだぞ？ それとも、やっぱり口に合わないかったか？」

「そんなことはありません。私はいつもこれくらいしかいただきますから」

女の子ってそれだけで足りるのか？ 俺は一セットだけじゃ足りないくらいだからな。

「マキももういいのか？　じゃあ、ミキ食ってやれよ！」

「私はそんなに食べないぞ！」

「お前はかなり食うだろう！」

昼休みも弁当とパンを食べてたからな。ワンセットだけじゃ足りないだろ。

「私は昼は食べるが、夜はそんなに食べないんだ。太るからな」

「お前は少しくらい多く食べて身長伸ばせよ」

「奏音、ミキは身長は気にしてませんからそういうこと言っはいいけませんよ」

紅葉が口を紙ナプキンで拭いた後、そつとつぶやいた。てか、紅葉に名前呼ばれたの初めてじゃね？

「いつも残してるのか？」

三人ともそれしか食べないなら、かなり少ない量で済んでしまうだろう。

「量は調節してもらいますが、食べられないときは捨てさせていただいてますわ」

「いいもん食ってんだろ？　もったいないなあ」

最初の食事会の事はあまり覚えていないが、かなりいいものを食べさせてもらったのか？

「もったいないのですか？　お金を払って買っているのですから、食べ残してもいいのではないのでしょうか？」

「そんなこと言える奴、なかなかいないぞ」

同じ日本にも生活に苦しんでいる人も今日は多いんだから。

「学園の半分以上の生徒は言っていると思うぞ？」

確かにあの学園は金持ちが多いからな。

「じゃあ、そろそろ店を出よう。ここで話し込むのも、庶民の若者がよくやることだが紅葉にはまだ早そうだしな」

紅葉は少しこの雰囲気慣れたみたいだが、まだ緊張が残っているように見える。

かたづけをして店を出ると、店の前には黒塗りの高級車が止まっ

ていた。

「ここまでか……」

最初はどうなる事かと思ったが、以外に楽しむことができた。楽しい時間が終わるのは何度体験しても慣れることがない。

「お嬢様、お迎えに上がりました」

正装をしてる初老の執事が車の扉を開ける。

「今日は楽しかったですわ、それではまた機会がありましたらお願いしますわね」

そう言つて紅葉が車に乗り込んでいく。最後に紅葉が見せた笑顔は純粹で、どこまでもかわいくて……。俺はこの一瞬の為に今日一日を頑張ってきたのだ、とそう思えた。

「じゃあな」

「今日はありがとな」

ミキとマキも紅葉に続いた。

三人が乗り込むと執事は扉を閉め、俺に一礼すると助席に乗り込んだ。

俺は紅葉達の乗った車が見えなくなるまで見送り、帰宅することにした。

「うおりゃー！」

覇気まとった掛け声とともに、ミキが俺に向かってボールを投げしてきた。日々鍛錬していると自分で言っているだけあって、彼女の投げるボールはそこの男子が投げるものよりも数段速く、重みがある。

普通ならこうやって俺を一直線に目指してきたボールを受け止めるのが男なのかもしれないが、俺はミキのボールを受け止めるほどの自信がないのでうまくかわすようにしている。

「ぐはっ」

俺の後ろで頑張つて受け止めようとした男子が、俺の代わりに餌食になってしまったらしい。これでもう五人目だろうか……。

さかのぼること十五分。今日の体育の授業は三組と合同かつ男女合同でドッジボールをすることになった。このメンバーの担当教師は四人なのだが、授業をするのが面倒くさかったのであろう。一番下っ端である一組女子担当の教師一人に押しつけて自分たちは教官室で話し込んでいる。

それが今回の出来事の真相だ。

「チームは一組対三組でいいな」

一番下っ端と言っても体育教師であることには変わりがない。一々反抗しようなどという生徒は余程の馬鹿でもない限りいない。すんなりとチーム分けが終わり、さっそくゲームを始める事になった。

相手には当たり前だが紅葉およびミキ、マキがいる。

紅葉はかわすことすら難しい。だから、紅葉を狙ったボールはすべてミキが取り狙った相手に報復を与えている。

紅葉を狙うとか度胸あるな……。あの会長に知れたらどうなるかわからないというのに。

「だあー！」

「ぐぼっ」

また一人餌食になったか。男でもミキのボールを取るのは至難の技だ。

それだけのリスクがあっても紅葉を狙いたいという男子が後を絶たないのは、それだけ紅葉に魅力があるということだろうか。

普段紅葉は周りの学生たちを会話すらしないので、男子共はこの機会を使つて話すきっかけを作りたいのだろう。ごめん。痛くなかった？ とか言つてな！

俺はそんなこと興味がなかったので、自分のところに来たボールのみをしつかりと避けて、あとはぼーとしていた。

いつの間にか敵味方共に人数が半分以下になっている。特にこちらのチームは男子が少なくなっていることが嘆かわしい。

「悠木、お前は私のボールを何度もかわすんじゃない！」

声のした方に目を向けてみると、ミキが怒気を張らせている。

俺は気付かないうちにミキのボールを何度かわわしていたらしい。でも、ドッチボールでボールをかわされたからって怒るなよ！

そういうゲームだろ？

「喰らえ！」

ミキは今まで力をセーブしていたのか、今までより速い球が俺を襲ってくる。

「喰らえって言われて素直にくらう奴がいるかよ！」

いくら速くても、しっかりと見ればかわせないボールじゃない！

「がはっ！」

俺の後ろにいた男子が餌食になってしまった。

「こいつ」

ミキは俺を当てられなくて、地団駄を踏んでいる。

そんな俺たちを見てミキの後ろで微笑んでいる紅葉とマキ。

「いけー、いけー！」

こいつらもかなり楽しんでるし。

一組の仲間たちまでも悪乗りして、ミキにボールをパスしてやがる！

「悠木なんてやつちまえ！」

これって俺をいたぶるゲームでしたっけ？

「ぶごっ！」

顔面にミキの渾身のボールを受けた俺はその場に倒れこんだ。女子は顔面なしだというのに、男子はありなので俺は当たったことになる。

「よし！」

ミキはガッツポーズをした後、紅葉とミキとハイタッチをしている。

「よくやった！」

「悠木なんてこれくらいされなきゃ、割に合わないだろ」

「いい気味だぜ」

「うーい、君たち同じチームだね？ ひどくない？」

結局、このかなり盛り上がったゲーム（俺にとつては最悪のゲーム）は、俺以外に八人の犠牲者を出して幕を閉じた。

朝学園に行くとクラスの雰囲気がいつもと違っている。何故が皆席を立て騒いでいるではないか。

「瑞穂、おはよ。この状態はなんだ？」

皆の輪の中に入っていなかった、瑞穂に挨拶ついでに聞いてみる。「そこそこ。机が一つ増えてたんだって。転校生が来るんじゃないかって皆話してるよ」

「お前はあの輪に入らなくてよかったのか？」

いつも瑞穂と仲良くしている娘も輪の中に入っているため、瑞穂は一人になっているのだ。輪の中に入って話してくれればいいと思うが。

「穂乃香ちゃんの宿題がまだ終わってないから」

そう言って恋愛小説を俺に見せてくる。また穂乃香ちゃんに薦められたな。彼女はいろいろな人に本を薦めているらしい。

「今日中に読んで返そうと思ってるから」

ハードカバーのその本はまだ半分くらいあるようだ。瑞希ってそんなに本読むの速かったか？

「まあ、頑張ってくれ」

それ以上続ける会話内容もなかったし、瑞希も目を本に戻したので俺は席に着いた。

「奏音、転校生だってよ！」

「そっらしいな」

今度は周が輪の中から飛び出して俺のところに来た。

「なんだよ、そっけないぞ！ あゝ、そうか。嫁さんが決まってる奏音君には、興味の無い話だったね」

嫌味ったらしいな！

「お前は穂乃香ちゃんがいるだろ！ それに女子だって決まったわけじゃないんじゃないのか？」

「絶対に女子だね！ それも絶品の！」

「どうしてそんなことわかるんだよ？」

職員室に見に行った奴でもいたのか？

「見た奴はいないが、俺のアンテナは美少女のオーラを感じた！」

周はワックスでツンツンにしている髪の毛を指差している。

「へー、それって触手だったんだな」

「ちげーし！ 触手じゃねえーし！」

まあ、冗談は置いておいて。

「あつちの女子は男子だって言ってるみたいだが？」

「ちょ、おまつ！ 親友の言うことじゃなくて、あいつの言うことを信じるのかよ！」

「別にどっちも信憑性はないんだろ？ それに親友とか言うなよ、虫唾が走る」

腕をさするジェスチャーをすると、周が泣きそうになっている。

「俺のハートは今、ズタズタになったぞ！ どうしてくれるんだ！」

「はいはい。すみませんでしたね」

こいつはこうなると面倒だからな、放っておくのが一番。

「彼女ができると、友達付き合いが悪くなると言うが本当なんだな

……」

周は遠い目をしながら自分の席に帰っていった。

することもなくなったので、席についてぼーっとクラスを眺めている。ほとんどの奴らはまだ転校生の事で騒いでいるが、さっきよりは減ったようだ。

まあ周がさっきの女子と転校生の性別について言い合ってるのを、

周りの奴らが騒ぎ立てているだけみたいだが。

今度は瑞希を見てみると、さっきの恋愛小説を集中して読んでいる。瑞希はポニーテールの活発な女子という見た目なので、本を読むのは意外なのかもしれない。前にあいつの部屋に行ったときに恋愛小説だけで本棚三つ使っているのを見たが、そんな瑞希の部屋は誰にも想像できないだろう。

瑞希自身は、穂乃香ちゃんに比べたらまだまだだよ！、とか言っていた。そんなこと言ったら、穂乃香ちゃんの部屋は本だけでいっぱいにならないだろうか？甚だ疑問である。
今度、周にでも聞いてみるか。

もうHRの時間になった。しかし教師はまだ来ない。転校生がいると何かとやることが多いのだろう。さっきからずっと瑞希を見ていたのだが（別に好きだから見ていたわけではございません、とだけは言っておきたい）、かなり面白かった。瑞希は気付いていないが、面白い場面になると頬笑み、悲しい場面になると目じりをハンカチで拭く。瑞希を見ているだけで、今どんな場面かが理解できるのだ。

でも見ていて思ったが、そんなに場面の変化が激しい本なのか？数十ページで面白い場面と悲しい場面を二回は行き来していたぞ？

なんだかんだで、待つこと十分。やっと教師Aがやってきた。

「おい、席着けよ！ 欠席にするぞ！」

えっと、だんだんレベル上がってませんか？

「この雰囲気だとお前らも知っているとと思うが、今日転校生が来た」「いえーい！」

「美少女！ 美少女！」

「イケメン！ イケメン！」

クラスが異様な雰囲気醸し出している。

「てめーら黙れや！」

ドスのきいた声で、生徒を黙らす教師A（女）。クラスは一瞬で呼吸音一つしなくなった。

「はい、転校生君入ってきなさい！」

ガラガラッと音がした後入ってきたのは男だった。

あいつ、どこかで見たぞ？

「やったー！ イケメンよ！」

勝負は女子の勝利になったようだ。周はもう興味がなくなったと見えて寝始めた。

「今回転校してきた、河原林玲央かわはら りょうだ。以後よろしく」

「河原林っていうと、池宮城、花山院と並ぶ財閥の？」

「そうだな。私は河原林の時期会長だ！」

なんというか、気の早い奴。

「ってことは、この学園には二つの財閥の御曹司と御令嬢がいることになるの？」

「二つ……？ そうだな、この先どうなるかはわからないが。さて教師よ、私はどこに座ればいいのかね？」

教師Aに対しても大きな顔をするが、彼女は何も言わない。権力の犬め！

「後ろの席が空いているから座りなさい」

「わかった」

玲央は席に向かって歩き出したが、俺の席の前で止まった。

「君はこの前の。このクラスだったのだな」

「どこかで、会ったか？」

確かにあった気がするがどこだったかな？

「このクラスはこの学園で一番頭がいいクラスと聞いたが、君がいるなら大したことなかったみたいだね」

「知り合いだっけ？ んー、人違いじゃないかい？」

こんな印象に残る奴覚えてないはずがないだろう。

「お前は悠木奏音だろう。私を忘れたと言うのか？ あんなにも邪魔をしてやったのに！」

邪魔？ 邪魔なんかされたか？ されたなら余程小さい邪魔だったんだな。

「土曜日にスーパーで邪魔をしてやったじゃないか！」

「あーあーあー、あの時の。そういえば、おばちゃんに大人気の野郎がいたな」

「やつと思い出したか！ 私は紅葉さんがいるからこの学園に転校してきたのだ。お前は紅葉さんとお付き合いをしているらしいな？ 立場をわきまえないか！ 私が彼女を幸せにするのだから！」
はいはい、もう勝手にして。

放課後になった。今日一日玲央に付きまとわれた俺はもうクタクタだ。

奴ときたら休み時間になると俺のところに来ては、自分の傲慢をずつとしている。その上、トイレにまでついてきやがった。

「お前は何がしたいんだよ！」

「私の目的はお前を紅葉さんと別れさせることだ。だから、お前に私の素晴らしさを教えて敵わないと思わせることで別れさせようとしてるのではないか！」

別にお前の素晴らしさとか知りたくないし。

「お前は誰に俺と紅葉が付き合っていると聞いたんだよ？」

「誰って？ 池宮城の会長に聞いたんだ。あの人は俺がせっかく婚姻を申し込んでやったのに、紅葉さんには付き合っている人がいるから無理だとか言いなさる。自分の立場をわかってないんじゃないか？」

やっぱり会長かよ！ ってか、こいつはなんで会長を下に見てるんだ？

「立場ってどういうことだよ？」

「あまり公表してはいけないことだけどな、今池宮城は傾いているのだ。私の力を貸してやる代わりに紅葉さんをくれと言っているのに断る？ どうしたらそんな考えができるんだろっな」

あれだけの規模の池宮城が傾いている？　それが本当だったら、この国は大変なことになるぞ！　少なくとも数十万人規模で仕事を失う人が出てくるだろう。

「私が池宮城を吸収して世界最大の財閥を作り上げるのだよ！　できた暁には、お前を雇ってやらないこともないぞ？」

「別に雇ってほしくないし」

なんでこいつの下で働かねばならんのだ！

「後から後悔しても遅いからな！　それで？　紅葉さんを私に渡してくれる気になったか？」

「本人に聞いてみる。それでいって言われたならいいんじゃないか？」

俺ら付き合っていないしな。

「そうかそうか。紅葉さんが私を認めないわけがない！　これで池宮城も私のものだな！」

一緒にいて恥ずかしいほど大声で笑い始める玲央。こんな奴に付き合う理由もないし、さっさと帰ろう。

鞆を持って何も言わずに教室を出ようとすると、玲央が俺の前に回り込んで静止を求めてきた。

「待て待て。私の話はまだ終わっていないぞ！」

こいつ、まだ続けるつもりかよ！

「お前のすごさはわかったから、もう帰っていい？」

「だめだ！　今から私の仕事での功績を教えてやる。心して聞け！　聞きたくねえーし！」

「あつ！」

タイミングの悪いことに紅葉達が教室から出てきたところに鉢合わせした。

「これはこれは、紅葉さん。今日もいつもながらお綺麗で！」

「ありがとうございます。奏音、この方はお友達ですか？」

「違う。付きまとわれてるだけだ！」

「紅葉さん、私ですよ！　以前に何度もお会いしましたよ」

玲央はそう言うが、紅葉は首をかしげる。紅葉が首をかしげたときに髪がサラサラと流れ、フローラルなスズランの香りが漂ってきた。

紅葉のような金持ちになれば、香水とかシャンプーとかはすごいものを使ってるんだろな。

「この方は河原林の御曹司ですよ」

どうしても思い出せない紅葉に、耳打ちして教えるマキ。結構金持ちは会う機会があるんじゃないのか？ 覚えておけよ！

「河原林様は、別の学園に通われていたのではありませんでした事？」

さっきまでとは違い、少し緊張した様子で玲央に言った。

「紅葉さんに会いたくなりましてね、私は転校してきたのですよ。そうそう。貴方のお父様からお聞きしたのですが、紅葉さんはこいつと付き合っているのですか？」

こいつと言ったところで俺を指差す。

「私と奏音が？ そうなのですか、奏音？」

紅葉の頭の上に？が何個も浮かんでいる。

「俺に聞くなよ！」

「もしかして二人は付き合っていないのですか？ なら、話は早い。紅葉さんは今日から私の婚約者です」

「えっ！ なぜ私が貴方の婚約者にならなければなりませんの？」
紅葉の当たり前の疑問を玲央は理解できないようだ。

「私が紅葉さんと結婚したいからですよ」

「紅葉はどうしたいんだ？」

困り果てて、俺の方を見てきた紅葉の気持ちを聞いてみる。

「私はまだ学生ですし、貴方の事もよく知りません。急に婚約者と言われても……」

「私なら貴方を幸せにできますよ」

ミキ、マキは俺に目で合図を送ってくる。助け船を出せということだろうか？ 仕方ない、今回くらいは助けてやらんとな。

「俺は紅葉と付き合っていないとは言っていないぞ！　今は俺がいるんだからそういうこと言うのはやめてくれないか？」

付き合っているとも言っていないが……。

「何を今さら！　君たちが付き合っているようにとはとても見えないぞ！」

何をもって付き合っているように見えないと言っているのかわからないが、当たっているのは紅葉の事が好きだからできる技だろうか？

「じゃあ、どうしたら信用してくれるんだよ？」

「そうだな……、ではデート風景でも見せてもらおうじゃないか」

そんな理由で俺は紅葉との二度目のデートをすることになった。さて、今回はどうしようか？　紅葉が喜ばないようなところに行ったら、紅葉の事がわかっていないって玲央に言われてしまうかもしれない。

「紅葉は行きたいところはあるか？」

「いいえ、特にありませんわ。奏音に任せます」

はい、来た！　一番困る返し！　俺に紅葉が喜ぶことなんてわからないぞ！

「早く行き先を決めないか！　紅葉さんを待たせるんじゃない！」

こいつはうざいなあ。んゝ、よし。決めた！

「じゃあ、買い物に行かないか？　最近何か欲しいものはない？」

「そうですね」

「お嬢様が欲しいものがあれば、すぐに用意しますから買いに行く必要なんてありませんよ」

紅葉ほどのお嬢様になると、買い物すら自分でしたことがないのか。

「じゃあ、洋服を見に行かないか？　紅葉がこういう服が好きなのが興味あるし」

「でも私、あまり買い物したことがありませんのでよくわかりませ

んわ」

「気にしなくていいって！ とりあえず、こっちにいい店があるから行こう」

俺は歩き出そうとして、ふと思った。俺が紅葉の彼氏なら紅葉の手を握って歩いたほうがいいのだろうか？

紅葉の方を見てみると歩き出さない俺を不思議そうに見てきた。

「どうしましたの？」

「手を繋ごうか……」

言っていて恥ずかしくなってきた。紅葉も恥ずかしかったのだろう。うつむき無言でうなずくと手を差し出してきた。

紅葉の手は赤ちゃんの肌のように柔らかく、ずっと握っていたいと思ってしまう。

しかし、紅葉の手を握ったのは失敗だと気付いた。手を繋いでいるということはそれだけ距離が近くなることを意味する。紅葉の髪からはスズランのいい香りはするし、美術館に飾られていてもおかしくないであろう石造のように整った美しい顔は近くにあるし、その上紅葉の呼吸音まで聞こえてくる。

俺の速くなった鼓動が手を握っていることで紅葉にばれていないか、顔が赤くなっているかばれていないかが心配で仕方がなかった。紅葉を連れて行ったブティックは、前に瑞穂と穂乃香ちゃんに連れてかれた店だ。ここら辺では一番お洒落で若者に人気がある店らしい。

俺たち二人のすぐ後ろにミキ、マキが、その後方三メートルに玲央がいる。玲央は何も言わずに俺たちをずっと見てくる。すごく気になるんですけど！

店に入るとそこには色とりどりのかわいい洋服が並んでいる。

「紅葉は普段どういった服を着ているんだ？」

「私の普段の洋服ですか？ お屋敷ではだいたいワンピース、パードイならドレスです」

何というかイメージ通りだな。紅葉のドレス姿はかなり様になっ

ているだろう。一度お目にかかりたいものだ。

「ならワンピースを見てみよう。紅葉が着ているのはやっぱりレースがたくさん付いたようなやつなのか？」

「いいえ、そういったものはパーティのドレスで着ますので、普段のワンピースはシンプルなものですわ」

紅葉の話を聞きながらワンピースを眺めていると、紅葉に似合いそうな薄いオレンジ色の落ち着いたワンピースが目についた。

「これなんて、似合うんじゃないか？」

「私にこのような大人らしい洋服が似合いますか？」

紅葉は少しこの服を着ることに自信がないらしい。紅葉ならどんな服を着ても似合うと思うのだけれどな。

「とりあえず試着してこいよ」

俺がそう薦めると紅葉はミキ、マキを連れて着替えに行った。

「これで納得したか？」

後ろで腕を組んでいる玲央に話しかけてみる。

「確かに恋人らしかったが、お前紅葉さんの事をあまり知らなそうだな？ 本当に恋人なのか？」

紅葉と初めて会ってからまだ二週間もたっていないんだから仕方がないだろ！

「まだ、付き合い始めて間もないからな。これからいろいろ知っていくんだよ！」

友達としてだけだな！

「なに！ では私がつ少し早くこちらの学園に来ていれば、紅葉さんはすぐに私のものになったのか！」

「そうかもしれないな」

お前みたいのとは付き合いたいとは思わないだろうけどな。

そんな話を話しているうちにミキが呼びに来た。紅葉が着替え終わったらしい。

試着室から先ほどの服を着た紅葉が出てきた瞬間、周りの空気が変わった気がした。紅葉がそこにいるだけで周りの空気が澄んでい

くような錯覚を覚えたのだ。紅葉の透き通った白い肌とワンピースの淡いオレンジ色の組み合わせがとても美しかった。確かにこの服は紅葉に似合いだろうと思って薦めたが、ここまで似合うとは思ってもなく、紅葉を見た瞬間言葉を失ってしまった。隣にいた玲央も同じのようだ。

「似合っておりませんか？」

何も言わない俺たちを見て不安に思ったのだろう。紅葉が心配そうな顔をして尋ねてきた。

「いや、とっても似合ってるよ。あまりに似合いすぎてから言葉を失ってしまったんだ」

「そんな！ 冗談は止してください」

別に冗談で言っただけつもりは全くないのだけれど……。

「紅葉はその服は気に入ったか？」

「はい。すごく感じのいい服で氣に行っただけですけど、私には似合わないのではないかと……」

「そんなことはない。とっても良く似合ってる」

「なんか、本当の恋人みたいだな。」

「そうですか……」

俺たちはミキ、マキに促されさつきいたところに戻ってきた。

その間も玲央は何も話さない。

「おい、玲央！ どうしたんだ！」

「私の事を呼び捨てにするな！」

「やっとな反応があつたか。」

「どうしたんだ？」

「紅葉さんが美しすぎて我を失っていたよ」

確かに美しかったがそこまでとは、おぼっちゃまは耐性がないのかな？

そこに紅葉がワンピースから制服に着替えて戻ってきた。

「そのワンピースは買うのか？」

「はい、奏音に褒めていただいたので購入したいと思います」

そのときミキ、マキ、玲央の三人からの視線を感じた。俺に買え
ってか！ そんな金ねえよと言いたところだがここで玲央に指摘
されたら今までやってきたのが水の泡になってしまふ。ここはやむ
を得ないか……。

「俺がプレゼントするよ」

「いいのですか？」

確か財布の中に隠し財産の諭吉さんがあったはず！ えっと、い
くらだ？ なっ！ 一万四千元だと！ あったかな……。

財布の中を確認すると小銭を合わせれば足りそうだった。

結局財布の中に残ったのは二十三円。足りたのが奇跡だった。レ
ジのお姉さんには苦笑されたが。

「ありがとう、大切にしますわ」

「どういたしまして。さて、玲央。これで満足したか？」

「呼び捨てにするなど言っているだろう！ 紅葉さんとお前が恋人
だと認めざるおえないな。でも、私はまだ諦めないぞ！ いつか紅
葉さんをこの手に！」

こういうと玲央は何時からあったのかわからないが、黒塗りの高
級車に乗って消えていった。

今日の午前中は何事もなく終わった。まあ、相変わらず玲央はう
ざかったが……。

昼休みになると、ミキ、マキに呼び出された。

「なんなんだよ、まだ飯食ってないんだぞ！ それに紅葉を置いて
きていいのかよ！」

「お嬢様の事は問題ない。信頼できる方に頼んできたからな。それ
よりもそんなに腹が減っているのか？ 一応弁当をお前のも用意し
たんだが、これでは足りないかもしれないな」

そう言っミキが出してきた重箱のような弁当箱。すみません、
足ります。いえ、多すぎです。

「どうしたらこのサイズの弁当を一人で食べきれんだよ！」

「男子はたくさん食べるんだろ？ 料理長に頼んだらこれぐらいないと足りないって言うから」

「ちなみにその料理長さんは男性？」

「女性だ」

男もそんなに食べないって教えてあげて！

「本題に入っているか？」

マキはが少しいらだっているように感じた。

「早く入ってくれ。そして早く帰してくれ」

「そんなに早く帰りたいならこの弁当はいらないな？」

ミキが残酷に言い放つ。

「欲しいです。弁当欲しいです。何時までもここにいますから！」

「じゃあ、一生いろ！ それで本題なんだが、玲央はどうしてる？」

ミキとマキは自分たちの弁当を開いた。

「玲央？ 玲央がどうしたんだ？ 奴は昨日とかわらんが？」

昼休み入ってすぐに俺のところに来るものだから、奴を巻くのが大変だった。

「昨日の捨て台詞が気になってな。何かやってくるんじゃないかと

……」

「特に何も考えてないんじゃないか？ そんな素振りはなかったぞ？」

それにどんな方法があるって言うんだ？ 親にでも頼むのか？

「何時どんなことをしてくるか分からないからな。旦那様も言っていたぞ、河原林は花山院とは違い注意してもし足りない」と

「そうだ、今までどれだけ池宮城の傘下の会社を狙われたことが…

…」

あの滅茶苦茶の会長にそう言わせるのだから、河原林は相当なものなのだろう。

「何かやってくるとしても、どうしろと言うんだ？」

奴がやってくることなんて検討もつかない。

「とりあえず、奴が何か不自然な行動をしたらすぐに我々に知らせ

てくれ！」

「何かができるわけではないが知っているだけで違うかもしれないから」

この真剣な雰囲気の中では心配しすぎだろとは言えなかった。

「でも、奴も紅葉の気持ちを無視してまではやらないんじゃないか？」

玲央が本当に紅葉の事が好きなら紅葉の気持ちは無視できないだろう。

「奴の言動からお嬢様の事を思っているように感じたか？」

「……まあ、何も起きないさ」

そんなはずはない。

「そんな話はやめて飯にしようぜ。何が入ってんのかなって！」

弁当の中を見て驚かすにはいらなかった。ミキ達の弁当の中身は普通だったので、この重箱弁当も中身は普通だと思っていたのだ。しかし、中から出てきたのはデパートのおせち料理よりも豪華な料理の数々！ 金粉とか振ってあるし！

「どうしたんだよ、この弁当！」

「だから、料理長がこれくらいの量が必要だって言うから」

「そうじゃねえ。何なんだよ、この料理は！」

「こんな質素じゃ嫌だったのか？ 屋敷の料理を食べたことあるからってそんなに口は肥えないだろ」

そういう意味でもない。こいつらはわざとやってるんだろうか？

「なんでこんなに豪華なんだよ！ お前らの弁当と違いすぎだろ！」

「料理長がお嬢様の彼氏ならこういったものに慣れておかないといけないからって言って作ってくれたんだ。感謝こそされても、キレられる理由なんてないと思うぞ？」

彼氏じゃないってお前ら知ってるだろ！ 弁当の量と一緒に料理

長に教えるよ！

「俺が言いたいのはなんでお前らとそんなに違うのかってことだよ」

「それは私たちはただの使用人で、お前はお嬢様の彼氏だからだろ」

？」

二人して何当たり前の事を聞くんだという顔をしている。

「わかったよ。じゃあ、この弁当皆で食べないか？ 俺一人じゃ食べきれないからさ！」

ミキ、マキは顔を真つ赤にして俺が望むならとOKを出してくれた。なんで顔を赤らめるんだよと思ったがその理由はすぐに明らかになる。

ミキ、マキが俺の弁当のおかずを取って二人して俺に向かって突き出してくるではないか！

「お前ら何がしたいんだよ！」

そう聞きながらもやろうとしていることなどわかっている。

「男と女、それに弁当ときたらやることは決まっているだろう？ こつちも恥ずかしいんだ。早く食べてくれないか？ それとも言わないとだめなのか？」

だめとかそういうことじゃなくて、根本的に間違ってるだろ！

俺たちそういう関係じゃないよね！

「あゝん」

周囲の視線が刺さる。女の子二人に何をさせてるんだといった感じだろう。別に俺が望んだ事じゃないよね？

両側から箸を突き出され、俺に逃げ場はない。俺は諦めて口を開けると、二つの異なるおかずが同時に放り込まれた。味が混ざってよくわからないんですけど！

「おいしいか？」

「おいしかったよ」

俺がそう言うときミキ達は愁眉しゅうびを開く。でも、この料理って料理長が作ったんだよね？ お前らが気にしなくても……。

俺はそんな恥ずかしい昼食をなんとか食べきった。あの重箱弁当を食べきれたことに自分でも驚いている。

「ふう、何とか食べきったな。おいしかったって調理長に伝えてくれ！」

「わかった。それでは玲央のことは頼んだぞ！」

昼休みに玲央のことをミキ達に頼まれたが、特に気にする必要がなかったらしい。俺が教室に戻るとすぐに寄ってきて、いつもながら自慢話を始めた。

よくもまあそんなに自慢することがあるな！

奴の自慢話を聞かなくてもいい授業中がこんなにも嬉しく感じたのは、生まれて初めてであろう。

「奏音君、最近大変そうだね。噂を聞くよ」

何の前触れもなく、現れたのは穂乃香ちゃんだった。栗色をしたショートカットの髪は紅葉の様に見惚れるほどではないにしろ、すごく似合っていてかわいいという印象を受ける。周にあれだけのアタックをしていなければ、告白を受ける機会も多いだろう。本人が いいのなら何も言うことはないんだけどな。

「周のところに行かずに、俺のところに来るなんて珍しいな」

穂乃香ちゃんは俺らのクラスに来たら、ずっと周にべったりしている。結構よくやってくるので、周と穂乃香ちゃんの仲は知れ渡っている。

「今日はちよつと、奏音君に用事があるの。明日って開いてる？一緒に遊びに行かない？」

「なんで俺なんだ？ 穂乃香ちゃんには周がいるだろう。あいつもあれで穂乃香ちゃんの事を気にしてるんだから、他の男と遊びに行ったりしたら泣くぞ？」

泣くまではいかないかもしれないが……。

「いいの！ 今は周君の事は置いておいても。周君との時間はいつもしつこきと取ってるから」

しつこすぎるくらいに付きまとってるからな！

「ん？ 奏音、どうしたんだ？ 穂乃香も来てたのか」
教室に入ってきた周が俺たちのところにやってきた。

「それがな、穂乃香ちゃんが明日遊びに行かないかって俺を誘うん

だよ。俺は周と行けって言ってるんだけど……」

「別に穂乃香が奏音と行きたいなら行ってくればいいだろう。別に俺の事を心配する必要はない！」

そう言って教室の前の方を見た周の顔には動揺の色が見えた。平然と振る舞っていても、動揺していることがばれただぞ。

「ごめんね。今度絶対に埋め合わせはするから！」

「別に気にしてないし……」

気にしてる様には見えませんけど！

「じゃあ、明日の午前十時に駅前の噴水のところに集合ね」

また、あの噴水ですか？　いくらこの街の一番の待ち合わせスポットだからって、週一で待ち合わせするのはどうよ？

「あそこは嫌なの？　それなら、家にまで迎えに行ってもいいけど？」

「すみません。それは勘弁してください」

「じゃあ、噴水に集合ね！」

穂乃香は周に一度抱きついてからクラスを出て行った。見てるこっちが恥ずかしくなるからそう言うのは公衆の場でやらないで！

周も恥ずかしかったみたいで真っ赤な顔をしている。周りの男子は目を真っ赤にして周を睨みつけていた……。

俺は今、駅前の噴水のところに来ている。時間は八時半。集合時間まではあと一時間半ある。前の待ち合わせのとき、マキに男は早く行くのもだって言われたからな。穂乃香ちゃんはまだ来るはずはないが、待っているのは悪いことではないだろう。

そして当たり前のように十一時半。集合時間を一時間過ぎた。なぜ、俺は待ちぼうけをいつも喰らうのだろうか？

ブルブル！

携帯が鳴り始めた、相手は穂乃香ちゃんだ。用事ができて来れな

いとかそういった内容だろう。

「もしもし？」

「もしもし。奏音君、何やってるの？」

「穂乃香ちゃんを待つてるに決まってるだろう！」

自分から呼び出しておいて待つてゐるのに、何やってるのではないだろう！

「奏音君、待つてるのはいいんだけど、もう少し周りに気を配ったら？」

「何の事を言っているんだ？ とりあえず来てくれないかな？」

「だ〜から〜、奏音君は後ろを見てよ！」

後ろ？ 後ろに何があるって言うんだ？

振り返ってみるとそこには噴水が……、って当り前だろう！ 噴

水の前で待ち合わせなんだから！

「後ろには噴水しかないぞ！」

「そうじゃなくて、噴水の向こうを見てよ！」

噴水の向こうだと？ 何があるっていうんだよ！

仕方なく言われた通り見てみると、そこには心細そうに駅の時計を見ている一人の少女がいた。ポニーテールの彼女は化粧によつて大人らしく見え、長いまつ毛が心細そうにしている顔をより一層寂しそうに感じさせてならなかった。

「はあ」

彼女はグロスの塗られた潤いのある柔らかそうな唇を開きため息をした。彼女のはいた息はグレーの空に昇っていく……。

「あれは……」

「気付いた？ ずっと待つてたんだからね！ 謝ってね！」

そう言つと、穂乃香ちゃんは電話を突然切る。はあー、そういうことかよ！

「待たせたな、瑞希」

瑞希は俺の顔を見るとさっきまでの一人寂しそうな表情を一変させ、ぱつと花が咲いたように笑顔を見せてくれた。

「穂乃香ちゃんからどこまで聞いてるんだ？」

穂乃香ちゃんの事だ、何も知らせずに呼んだに違いない。

「今日、奏音ちゃんがここに来るから一緒に楽しんで来てって言われて……」

俺が思ったより情報を渡されているようだ。ってことは、これは瑞希からしたら完全に俺の遅刻になるのでは？

「今回は俺が遅刻しちまったからな、どこか行きたいところはあるか？ 瑞希の行きたいところだったらどこにでも連れてってやるぞ！」

「行きたいところ？ んゝ、急に言われても……」

瑞希は何か意見を絞りだそうとしているのだろう。真っ白い空に目を向けながら片手を頬に当てながら考えている。

ん？ そういえば、瑞希の誕生日はもうすぐじゃなかったか？

「瑞希、誕生日って来週じゃなかったっけ？」

「えっ！ そうだけど、覚えてたんだ……」

ここ何年もおめでとうすら言わなかったからな、そう思われていても仕方がない。俺だって何かしてやりたいとは思わなかったこともなかったんだぞ？

「よし！ じゃあ、ちよつと早いが瑞希の誕生日プレゼントを買いに行こう！」

「ええー！ そんないいよ！ 悪いよ！」

「気にするなよ。それで何か欲しいものはあるか？」

瑞希はあわて驚き、真剣に考えだしたがなかなか欲しいものが見当たらないらしい。

「そんな無理に欲しいものを見つけないでもいいけどな」

「……奏音ちゃん……」

「ん？」

小さな声で呼ばれた。

「奏音ちゃんが……」

俺が何なんだ？

「……奏音ちゃんと遊びに行く時間が欲しい……な」

「なんだ、そんなことでいいのか？　じゃあ今日は思いっきり遊ぼうー！」

「うん！」

少し雲の残る青空の下、俺はかなり久しぶりに瑞希と遊ぶことになった。

遊ぶと言っても俺たちはもう高校二年生。昔みたいに公園で遊ぶわけにはいかない。とりあえずウインドウショッピングでもしよう。どこに行こうか？　どうせ瑞希に振っても意見なんて帰ってこないだろうし、勝手に決めてしまおう！　と言うことで、俺はまず昼飯に行くことにした。

「そろそろ腹の減る時間だろう？　何か食べたいものはあるか？」

「えーと、そうだな」

今日の瑞希はどこか変だ。いつもは俺と一緒にいるときはこんなに優柔不断じゃないのに……。見た目だって化粧はしてるし、着飾っているし。いつもの活発な雰囲気の瑞希とは全然違ってている。何と言えばいいのだろう、何かいつもより女の子らしい瑞希がそこにいる。

瑞希がこんなんじゃない、俺もどうやって接していいかわからなくなってしまう。

「特に無いのか？　それなら俺が決めるぞ？」

「じゃあ、お願いしようかな」

お願いされてしまった。さて、どうしよう。ここで選択を誤るとこの先がきつくなってしまう。今日は始まったばかりだし、冷静な判断が必要だ。

「じゃあ、あそこのオープンカフェに行こう」

あそこの評判はいいみたいだし、無難なところだろう。と考えて行ったのだが、それは間違いだっただけ……。何故か自分たちの座った席の周りにはカップルばかりだった。瑞希は相変わらず口数

が少ないし、どこを見たらいいかわからないし、かなり気まずい。周りから見たら俺たちもカップルに見えてしまっているのだろうか？
「奏音ちゃん、何を注文するの？」

お？ 瑞希から話しかけてきた、と思ったらそこにはウエートレスが立っていた。いやいや、言ったのは瑞希だけだね。

「瑞希は何にするか決めたのか？」

「うん、私はこれにしようと思って」

指差したのはサンドウィッチ。じゃあ、俺も軽めのを頼まないといけないな。

しかし、メニューを見ていて面白いのが目に付いた。

『チョコレートチャーハン』

いろいろ突っ込みたいことはあるが、なぜオープンカフェにチャーハン？ チョコレートを入れたからいいのだろうか？ 需要はあるのだろうか？ やばい、チョコレートチャーハンの事しか考えられなくなってきたぞ！

「じゃあ、チョコレートチャーハンで！」

言ってしまった。ウエートレスだって本当に？ 聞き間違えじゃない？ って顔をしている。おい、そっちが出してるメニューだろ！ そんなに驚くなよ！

ウエートレスは三回確認した後、やっと離れて行った。

「奏音ちゃんって昔からそういうよくわからないもの食べるよね？」
「なんか興味が湧くじゃないか。今食べないと一生食べれないかもしれないしな！」

そして持つてこられたチョコレートチャーハンを見て俺は驚愕した。チョコレートチャーハン、それは普通のチャーハンの上にドロドロのチョコレートがあんかけの様にかかっている。

これを俺に食べると？ 見ただけで心が折れてしまった……。瑞希も乾いた笑いをしている。

恐る恐る一口食べてみる。塩コショウの聞いたチャーハンに、甘ったるいチョコレートが絶妙で……、そんなわけはなかった。チャ

「ハンの塩気がチョコレートの甘さを強調していてかなりくだい！
食べ物で遊んでるとしか思えないぞ！

「瑞希、一口食べてみないか？」

「丁寧に断りさせていただきます」

どうしよ、瑞希も食いたくないと言ってるし、でも残すのはいけないと思うし。とりあえず飲み物で流しこもうとしてみるが、ドロドロのチョコレートがなかなかそれを許してはくれない。

半分くらい食べ終わった時点で、瑞希はサンドウィッチを食べきっていた。もう、食べたくない。俺は残っていた水を一気に飲み干して、瑞希に行くぞと告げた。

伝票はもちろん俺が取り、レジに向かった。最近出費が激しくてあんまり出したくないんだけど、ここは仕方ない。俺は貯めていたお年玉を切り崩し、会計を済ませた。

「いくらだったの？ 自分の分は出すよ？」

瑞希はそう言うってくるがここは払わせるわけにはいかない！

「いいよ、気にするな。それよりも今からどうしようか？」

聞いて気付いた。これは今日の瑞希には聞いては行けなかったこと。なぜ、俺はそれがわかっていて何度も聞いてしまうのだろうか？

「とりあえず、歩きながら決めようよ」

瑞希から意見が帰ってきた。これはきつとチョコレートチャーハンの力だな。あれは無駄じゃなかったんだ！

俺たちは瑞希の提案通り、とりあえず街を歩いて見ることにした。これは俺が最初に考えていたウインドウショッピングと同じなのでは？ 困った時のウインドウショッピングか……。

いつも歩いている街なのに、こうやって歩くとても新鮮に感じる。ショーケースに映る、雲ひとつない青空の下にいる俺たちは楽しそうに笑ってる。普段は目にもとまらなかったお店の中に、少し古ぼけたアクセサリーショップがあった。

「この店知ってるか？」

「知らない、こんなお店あったんだ」

よく街に出て友達と遊んでいる瑞希が知らないのだ。最近できたのか、それとも異次元に迷い込んでしまったのか……。

「入ってみようぜ」

入って見ると薄暗い店内には所狭しとアクセサリーが飾ってある。俺たち以外のお客さんはいなく、腰の曲がったおばあさんがレジに座っていた。おばあさんはいらっしやいも言わずにずっと俺たちの方を見ている。

店の雰囲気はあまりいいとは思えないが、アクセサリーはかなりのいのが揃っていると感じた。瑞希もこの雰囲気など気にも留めず、いろいろと手に取っている。

「奏音ちゃん、これなんてどうかな？」

瑞希は銀色の落ち着いた感じのイヤリングを耳に当てている。今日の瑞希にはぴったりだと思う。

「いいんじゃないか？ 似合うと思うぞ」

「そう？　じゃあ、買おうかな」

瑞希は何かを探し始めた。

「どうしたんだ？」

「えっと、値札が見当たらず……」

そう言われてみれば、この店の商品には値札が全くない。

「これいくらですか？」

瑞希がレジにいるおばあさんのところまで行って、聞いた。

「一万二千円だよ」

ぎりぎり聞こえるくらいの小さな声でそう言った。

「一万二千かあ、ちょっと高いけど欲しいな」

いや、高すぎではありませんか？　ぼったくりだろ！

「あつ、今一万円しかないや。買えないな」

「俺が出そうか？」

「ご飯も払ってもらったしそこまでしてもらえないよ」

確かに俺の財布は悲鳴を上げている。

「じゃあ、値切ろう。このイヤリング一万円になりませんか？」

「ならん！」

さつきはあんなにぼそぼそ言っていたのに、今ははっきりと言ってきた。

「うん、今度来るからいいよ」

瑞希はそう言ったが、かなり名残惜しそうに店を出るまでイヤリングを見ていた……。

オレンジ色の空に辺り一面が包まれた。

「今日は一日ありがとう」

「そんな、お礼を言われるようなことは何もしてないぞ？」

「今日は久しぶりに奏音ちゃんといられて嬉しかったから」

幸せそうな瑞希の笑顔を見て、俺まで幸せな気分になってきた。

「そうそう、忘れてた。これ誕生日プレゼントな」

「これは？」

「開けてみな」

小さな包みを俺から受け取り、そつと開いた。

「あつ、さつきのイヤリングだ！　いつ買ったの？」

「瑞希が他のを見てる間にこっそりとな」

「でも、これ一万二千円もしたんだよ？　もらえないよ」

包みなおし、返そうとしてくる。

「いいんだよ、それに返してもらってもどうしようもないし」

「ホントにいいの？」

「今までの数年分の誕生日プレゼントだと思ってもらってくれ」

「わかった。ありがとう！」

瑞希は金色（こんじき）の空の下で今日一番の笑顔を見せてくれた。

外伝 4

私は集合時間より一時間前に駅前の噴水が一望できる喫茶店に来ている。しかし、私が出る前から奏音君が待っていた。まずはブラス一かな。

三十分後。瑞希ちゃんも噴水へやってきた。二人とも噴水のところに来たというのに、二人は噴水を挟んで待っている。そのため、お互い一向に気付かない！ 何やってるのよ、あの二人！

奏音くんは数分ごとに時計を見てるし、瑞希ちゃんはぼーっと空を見上げている。

そして、集合時間から一時間たった。最初にしびれを切らしたのは私だ！ どうして二人とも気付かないし、何の行動も起こさないの？

携帯で奏音君に連絡を取る。

「もしもし？」

「もしもし。奏音君、何やってるの？」

一時間以上前から待っててもこれでは何の意味もないよ！

「穂乃香ちゃんを待ってるに決まってるだろう！」

「奏音君、待ってるのはいいんだけど、もう少し周りに気を配ったら？」

時計しか見てなかったら、来てもわからないじゃない！

「何の事を言っているんだ？ とりあえず来てくれないかな？」

「だーからー、奏音君は後ろを見てよ！」

奏音君は振り返って噴水を見る。

「後ろには噴水しかないぞ！」

当たり前でしょう！ あなたは噴水の前で待ってるんだから！

「そうじゃなくて、噴水の向こうを見てよ！」

これでやっと奏音君は瑞希ちゃんに気付いたみたい！

「あれは……」

「気付いた？　ずっと待ってたんだからね！　謝ってね！」
それだけ伝えると、電話を切った。

奏音君は電話が切れたのを確認すると、瑞希ちゃんのところに行つて何かを言つた。その一言で瑞希ちゃんの顔がさつきまでと打つて変わり、笑顔になった。んゝ、ここからじゃわからないよ。

しばらく二人で話しているので、近くに寄ってみる。

「瑞希、誕生日って来週じゃなかったっけ？」

「えっ！　そうだけど、覚えてたんだ……」

えー！　忘れてたの？　奏音君、それはひどいよ！

「よし！　じゃあ、ちよつと早いが瑞希の誕生日プレゼントを買いに行こう！」

それは私もついていけないと！

奏音君と瑞希ちゃんが歩き出したので、私もこつそりついていこうとすると肩を叩かれた。

「何ですか！」

こんな街中で話しかけてくる人なんてろくな人ではない。第一印象が大事だからと、少し怒つたような顔をして振り返るとそこには周君がいた。

「しゅ、周君！　なんでここに！」

こんなところで周君に会うことになるとは思ひもしなかった。家ではいつも周君の顔を見てるけど、外で見るとまた違った印象を受ける。

「別にいたつていいだろ！　穂乃香は奏音達を後をつけるのか？」

周君の指をさした先には小さくなつていく奏音君達！　待って、見失っちゃう！

「ごめんね、周君！　今は忙しいから、また家に帰ったらね！」

「お前に付きまとわれる事の面倒くさは俺が一番知ってるからなとりあえず、今日はやめてられよ」

そう言つと周君は少し強引にごつごつした大きな手で、私の手を掴んで引つ張つて行く。そんなゝ、ひどいよお、周君！　私の楽し

みんなに

。

第4話

瑞希を家まで送り届けた後、自分も家に帰ろうと歩いていると電話がかかってきた。この番号はマキが以前にかけてきた番号。今度は何だっけ言うんだ？

「もしもし？」

電話に出るとやはりマキの声が聞こえた。

「今日のデートは楽しかったのか？」

なぜ知っている？ そのことを知っているのは俺と瑞希、周に穂乃香ちゃんくらいしか知らないはずなのに。

「プレゼントは喜んでくれたか？」

「なんでプレゼントしたことまで知ってるんだよ！」
つい三十分前の出来事だぞ！

「いや、前にいたから」

デジャブですよ。前にもこんなことあったぞ！

「お前つけてたのか？」

穂乃香ちゃんとミキはグルだったのか？

「まあ、そんなことはいいじゃないか！」

よくねえーし！

「そういう事で、明日は一日空けておけよ。じゃーな」

「どういう事だよ。おい！ 待てや！」

プープー。

電話は既に切れていた。時間も場所も内容も聞いてないけどいいのか？

「お嬢様、こちらです」

誰かの話し声が聞こえる。

「ここが奏音の部屋ですか」

「こんな狭くて汚いところにお嬢様をお連れするのが心苦しいので

すが」

勝手なこと言っていていいじゃねえよ！

「奏音、寝てますね。こうして見るとかわいいかもしれません」

「かわいいですか？ お嬢様、こんな奴にそんな言葉は似合わないと思いますよ」

「それにしても、お嬢様を待たせるなんてこいつは！ 今すぐ叩き起こします！」

次の瞬間、腹に衝撃が走った。

「ぐはっ！ 何すんだよ！ ……、お前らここで何してんの？」

まず、紅葉が20cmの距離で俺の顔を覗き込んでいるのが目に入る。この距離で見ても、一点の曇りもない白い肌や透き通った瞳、サラサラとした髪は美しく、シトラスのいい香りに包まれる。俺は何も考えることができなくなり、紅葉と見つめあうまま固まってしまった。

「おい！」

がはっ！

もう一度腹に衝撃が走り、顔を上げたせいで危うく紅葉に当たりそうになってしまう。

「お嬢様にそれ以上近づくな！」

俺に馬乗りになっているミキが怒って、俺の腹をサンドバックの様にぼこぼこ殴ってくる。痛い痛いから！ それに、紅葉に近づくなってこの状況じゃ無理だろ！ 先に紅葉をどけるよ！

「マキも何か言ってやれよ！」

ミキはそう言うがマキは部屋の隅でうずくまっている。

「どうしたんだ？ 調子でも悪いのか？」

「まだ、この漫画最新刊読んでなかったから」

俺がこの前買ってきた漫画を読んでいた。その漫画の良さが分かるとは、結構趣味が合うのか？

「とりあえず……、紅葉とミキはどいてくれないか？」

少し名残惜しい気もする。

「仕方ありませんわね。ミキも降りてあげて」

「はい」

ミキは最後に一発殴ってから俺から降りた。

「それで、今日は何の用なんだ？」

「お嬢様が河原林様にお屋敷に招待されたんだ。だから、お前も連れて行くということだ」

それ、別に俺は関係ないよね？ 俺は行かなくてもいいと思うけど？

「俺は呼ばれてないんだよね？」

「お前みたいな庶民が呼ばれるわけがないだろう！」

「じゃあ、勝手に行ってきたくれ。俺は寝る！」

もう一度布団に籠ろうとすると、ミキの飛び蹴りが腹にヒットした。ぐっ！ これは効く。

「お前は、お嬢様があいつのところに行くのが心配じゃないのか？」

「心配？ あーあー、心配ね。心配だよ。でも、お前らがいれば大丈夫だろ？ その蹴りなら男にだってひけはとらないって」

「わかりました。では、私たちだけで行ってまいります」

紅葉は子犬のような潤んだ瞳で俺に熱視線を送ってくるし、ミキは俺を睨みつけてくる。マキはというとまだ漫画を読みふけている。最初の内は無視していたが、五分以上もそのまま固まっているので仕方なく俺が折れた。

「分かった、行けばいいんだろ。行けば！」

「そうですか、奏音？ 無理に行かなくてもいいんですよ？」

どの口で言うか！

「いいよ、行くよ。じゃあ、着替えるから部屋を出てってくれ」

「わかりました。ではミキを置いていきますから、着替えてくださいね」

ミキを置いていく？ どういうことだ？

「ほら、手伝ってやるからこっちに來い」

「はあー！ 自分でできるからはよ出てけや！」

こいつらは何を考えてるんだ？

「一人で着替えててできますの？」

紅葉は俺が着替えを一人でできないと思っていたのではなく、着替えという行為そのものが一人ではできないものだと思っていたらしい。お前はどこまでお嬢様なんだよ！

「出来るんだよ、いいから出ててくれ！」

紅葉達が出て行ったのを確認してからため息をつく。今日は大変な一日になりそうだ。

紅葉の黒塗りの高級車に乗って一時間。さつきから右側はずっと高い塀が続いている。

「もしかして、ここが玲央の家なのか？」

「そうですね、前に一度お父様に連れられて来たことがありますの！
こんなにでかい土地は家としていらんだろ！

「池宮城邸ほどではないけどな」

紅葉の家の方がでかいのかよ！ でも前行ったときはそんな風にはおもえなかったけど？

「お前は離れにしか行ったことがなかったよな？ 本館はあんなものではないぞ」

えー！ 百部屋以上あってあれで離れですか？

その後も壁づたいに車で走って行くと、巨大な白い門が現れた。運転手が門のところに立っていた人に話しかけると、ゆっくりと門が開きまた車を走らせた。門をくぐっても中にはまだまだ道が続いている。周りは森になっていたり、庭園になっていたり、駐車場になっていたりする。ここはどこぞのテーマパークですか？ こんなに駐車場はいらんでしょ！

そうしているうちにやっと屋敷が見えてきた。屋敷の門の前に車をつけて車から降りると、スーツのかなり似合っている、いかにも執事と言って感じの人が立っていた。執事は紅葉を見ると一礼する。「いらっしやいませ。長旅御苦労さまです。中でおぼっちゃまが待

っております。案内させていただきます」

そう言つと、また一礼して門を開けて中へ歩いていく。紅葉達がその後ろをついていくので、俺も続いた。中に入ると赤じゅうたんで埋め尽くされた床があり、高い天井からはシャンデリアが吊るしてある。屋敷は西洋の古城を思わせる造りで、こんなものが日本にあり、なおかつ住居として使われていることが信じられなかった。

シンデレラがガラスの靴を落としそうな階段を上り、それからしばらく歩くと突き当たりに他より一回り大きい扉が現れた。

「こちらがおぼっちゃまの部屋でございます」

扉が開くとそこに広がっていたのは体育館くらいはかなり広い部屋だった。その部屋の真ん中辺に装飾のたくさん付いた椅子があり、玲央はそこに腰かけている。

「やあ、いらつしゃい。紅葉さんとそのお付きの方々。ん？ 奏音、お前みたいな庶民は呼んだ覚えがないぞ？」

呼ばれた覚えもねえーよ。

「ごめんなさい。どこで聞いたのかわからないのだけれども、奏音が自分と行くと言い出してしまいました」

おい！ いつ、俺がそんなこと言っただよ！

「紅葉さんは気にしなくてもいいですよ。悪いのは全部奏音なんですから！ さあ、奏音！ 自分が紅葉さんに迷惑をかけているとわかっただろう？ さっさと帰って行ったらどうだ？」

「帰っていいのか？ じゃあ、送ってくれよ！」

早く帰って睡眠の続きをせねば！

「は？ 何を言っている？ お前のような庶民を乗せる車など河原林にはないぞ。早く帰りたまえ！」

あの距離を歩いて帰れと言うのか！ 今日中には家に着けないだろ！

「奏音はどうしてもこの様に立派は河原林邸を見てみたかったのでしょう？ 河原林様、奏音も一緒にいてもよろしいでしょうか？」

いやいや、別に見たくもありませんし。

「紅葉さんがそう言われるのなら仕方ありませんが……。奏音、少しでも邪魔をしたら直ぐに追い返すからな！」

「はいはい、わかりましたよ」

「では、気を取り直して。紅葉さんこちらへどうぞ」

玲央はさつき座っていた椅子とは別のテーブルに紅葉を連れて行き椅子に座るように薦める。ミキ、マキは紅葉の後ろに立っていたが、俺は紅葉の隣に座った。

「紅葉さん、紅茶はいかがですか？ それともコーヒーにしますか？」

「では、紅茶でお願いします」

玲央が手を二回叩くとさつきとは別の執事が現れた。

「紅茶を頼む」

「はっ！」

その執事は扉に向かって歩いていき、扉を出たのと同時にメイドさんがお盆にティーカップを乗せて入ってきた。メイドさんは俺たちと同じくらいの年の娘だった。

「玲央様、紅茶になります」

紅茶は玲央と紅葉の前のみに置かれる。

「俺のがないんだけど」

「お前に飲ませるような紅茶などない！」

「まあまあ、そんなこと仰らずに。奏音としたらもう一生味わえないかもしれないですから、一度くらい飲ましてあげてもよいのではありませんこと？」

ひどっ！ お前ら庶民をいじめて愉しんでるだろ！

「それもそうですね。こいつにも紅茶を頼む」

「かしこまりました」

メイドさんは一礼して扉に向かって歩いて行き、扉をくぐったのと同時に別のメイドさんが現れた。あの扉の向こうはどうなってるんだ？

「紅茶になります」

俺の前に紅茶を置いたメイドさんはまた扉の向こうに帰って行った。

「それで、紅葉さん。紅葉さんの部屋はどのような部屋がいいのですか？」

「はい？ 私の部屋とはどういうことですか？」

玲央の話に紅葉はついていけないようだ。俺からしたら玲央が言わんとしていることはわからんでもないけど……。

「もちろん、紅葉さんが住む部屋の話ですけど。結婚したらこちらに住むのでしょうか？」

やっぱりな。玲央の脳内では紅葉と結婚することになってるんだな。

「しかし私は奏音と付き合っていますし、河原林様と結婚する予定もないのですが……」

「ふふふ。今はこんな奴と付き合っているでもいいですが、最終的には私と結婚することになりますよ」

何を持ってそんなことを言っているのだろうか？ さっぱりわからん。

「まあ、紅葉さんはこの屋敷の事はわからないでしょうから、決めるようがありませんよね。では、今日は屋敷案内でもしましょう！」

そう言っただけ俺たちは河原林邸を見学することになった。なぜ俺まで付き合わねばならんのだ！

結局屋敷内はもちろんのこと、庭園まで案内されて飯まで御馳走になりやつと家に帰してもらえたことになった。紅葉はなんでこんな奴の家に来たのだろう？ 不思議に思ったのでマキに尋ねた。

「お嬢様だって好きで河原林様のところに来ているわけではないぞ。お嬢様クラスのお家になると家庭の事情もいろいろあるんだ。お前とは違うんだよ」

最後のは余分だろ！

「河原林様、今日は本当にありがとうございましたわ」

「いえいえ、気にしないでください。今度も招待しますのでまたいらしてください」

俺に向かつてお前は来るなと言いついてくる。別にもう来たくないよ！

「はい、ではさようなら」

そう言つと車を走らして河原林邸を後にする。

「ふう、疲れましたわ」

最後に紅葉の本音を聞いてしまった。

月曜日がやってきた。昨日は帰ってきた後ベットで横になつていたら、もう外は明るくなつていた。夕飯のときくらい起こしてくれてもいいだろ！朝起きて母親にそうやって文句を言つたのだが、「えっ？帰ってきたの？むしろ帰つてこなくてもいいよ」とか言われて本当に悲しくなつてきた。

別に優しくしてくれなくてもいいから、もう少し気にしてくれてもいいのでは？

そんな愚痴をつぶやきながら通学していると、後ろから肩を思いつきり叩かれて前のめりに倒れそうになつた。

「何すんだよ！」

後ろを振り返るとそこには、いつも以上にキラキラをした笑顔を振りまきながら挨拶してくる瑞希がいた。流石に一昨日プレゼントしたイヤリングは着けていなかったが、なぜか今までとは違う印象を受けた。

「どうしたんだよ？何かいいことあつたのか？」

「そんなの決まつてるじゃん！一昨日は最高の誕生日祝いを貰つたからね！」

余程イヤリングが嬉しかったらしい。でも、そんなに嬉しそうな瑞希を見ると意地悪を言いたくなつてきた俺はひねくれているのかな？

「最高と言つのは値段の話か？流石に俺の懐に大打撃だつたしな」

「確かに金額的にも最高だったかもしれないけれど……。私はそういうことを言いたいんじゃないくて！」

なんか、俺まで楽しくなってきたぞ？

そんなことをやっている間に、この細い道を何台もの高級車が通り抜けていく。あの学園は本当に送り迎えしてもらう奴が多いな。しかし、遠目で眺めていた俺の背筋に寒気が走った。ぶるぶるぶる。うー、寒！ まだそんな季節じゃないはずなのに……。

キーー！

俺の背後でものすごい音がした。振り返るまでもない！ 俺の後ろギリギリのところまで車が急停止したのだ。さっきの寒気はこの前ぶれだったのか？

「おはようございます、奏音」

振り返ると、俺を引きそうになった車から降りてきた紅葉がいた。「池宮城さん！ 危ないじゃないですか！ もう少しで奏音ちゃん引かれるところだったんだから！」

「それはありませんわ。私の運転手の運転技術を甘く見ないで下さりませんか？」

「いくら運転がうまくても、もしもってことがあるかもしれないじゃないですか！」

この二人は会うといつも言い合いになっている気がする。二人ともこんなに人に当たる性格じゃないんだけどな？ ケンカするほど仲がいいってことかな？

「まあまあ、二人ともそれくらいにして。瑞希、俺にけががなかったんだからいいじゃないか！ 紅葉はもうこんな危ないことは二度とするなよ！ そういうことで皆で学園に行こうじゃないか！」

「そういうわけにはいかないよ！ 前から言いたかったんだけど池宮城さんは奏音ちゃんに迷惑をかけすぎだよ！」

「それはあなたにも言えることじゃありませんこと？ 一昨日プレゼントをいただいたそうですね？ 奏音に無理やりプレゼントさせたのではありませんか？」

「そ、そんなことないもん！ 奏音ちゃんは迷惑じゃなかったよね？」

急に振ってくるなよ！ ミキにマキも止めに入ってくれよ！
結局瑞希と紅葉の言い合いは続くし、ミキ、マキは止めに入らない
いしで学園に遅刻しそうになってしまった。

放課後になり、今日はもう何にも巻き込まれずに帰るぞ！ と宣言
したとたん、マキに捕まってしまった。教室を出ようとして、誰も
いないか廊下をのぞいていた時のこと。

「おい、何やってるんだ？ 奏音、かなり挙動不審だぞ？」
俺の努力も虚しく、マキに見つかっていたのだ。

「お前、何時からそこに？」

「そうだな、奏音が席を立つときから後ろにいたぞ」
怖いー！ これからはまず、後ろを確認しないとイケないのかよ。

「それで、今日は頼みごとをしに来ただが……」

「お前が口を濁すなんて珍しいな。言いにくいことなのか？」

「ここではな。だから、ちょっと着いてきてくれないか？」

字面だけ見ると謙虚そうに見えるが、マキときたらそう言いながら
俺の腕を引っ張っていく。振りきれないほどの力で引っ張られて
いるわけではないが、よくわからない威圧感があり着いていくこと
しかできなかった。

連れてこられたのは図書館のテーブルだった。そこには紅葉とミ
キが座っている。

「それで、そろそろ何故連れてきたのか教えてくれないか？」

俺が聞くと、ミキ、マキが顔を落とした。そんなに悪いことなの
か？ 俺が何かしたとでも言うのか？

「言いにくいことなのだが……、実はお嬢様はあまりお勉強がお得
意ではいらっやらないのだ。だから、テストも近い意外にも勉
強のできるお前に勉強を教えてもらおうと思う」

えっ！ なんて決定事項なんですか？ 俺の意思は？

「それで今日は、お嬢様に数学を教わっていただくと思っています」

「えっ！ 数学ですが？ 今日少し気分が乗りませんね」
今、少し焦りましたよね？

「それなら、英語にしましょう！」

「英語はまだやらなくても大丈夫ですわ」

「では、世界史を……」

「世界史は暗記しかすることがないでしょう？」

おい！ やる気ねえーだろ！

「紅葉はどれくらい勉強が苦手なんだ？」

俺はマキを手招きして呼び、紅葉に聞こえないように聞く。

「そんな、苦手と言うほどでもないぞ？ いつも学年一位か二位と
いったところだな」

「俺より頭いいんじゃないの？ 教えられねえよ」

俺の最高順位はこの前の5位だからな。

「それが……、下から数えて……な」

「まじかよ」

この学園は、金持ちが多く通う学園であるため、まったく勉強せず
にここまで来てしまった奴らも多い。逆に英才教育で頭が異常に
いいという奴らもいるから、かなり上下の差が激しい。

そんな中の下から一位？ ヤバいんじゃないの？

「進級できるのか？」

留年になるんじゃないの？

「それは問題ない。お嬢様は全く授業に出席しなくても卒業できる
ぞ！」

「なら、勉強する必要はないんじゃないの？」

「それでも、勉強はお嬢様の将来の役に立つと思うんだ」

そこまで、紅葉の事を考えてるのかよ。じゃあ、俺も答えるしか
ないな！

「よし！ 紅葉、始めるぞ！」

「本当にやるんですの？」

子犬のような潤んだ瞳で見つめてくるがそんなことは無視して始めることにした。

そしてテスト前日。一週間くらい紅葉の勉強を見たが一向に進歩が見えない。それは紅葉の頭が悪いわけでも、俺の教え方が悪いわけでもない。なぜならば、紅葉の学力は中学校で止まっているからだ。一週間ではテストにはどうにもならない。

「お前、もう少し早くから勉強を始めようとは思わなかったのか？」
「勉強など私には必要がありませんでしたから。会社を経営するわけでもありませんし、まして就職など考えたこともありません。私はただお父様がお決めになった殿方と結婚して、その方についていけばいいだけですから。ですので、私は好きなことのみをやっているのもいいですよ」

紅葉は明るくそう言うが、俺にはその笑顔が本心からきているものであるかは分からなかった。

「じゃあ、何でこの一週間勉強をしたんだ？」

この質問に対して紅葉は顔を一瞬曇らせたが、すぐに元の笑顔に戻した。

「奏音が一生懸命に教えようとしてくれたからでしょう？ 自分にもよくわかりません。気まぐれだったのかもしれませんが」

紅葉は人と話すとき、必ず相手も見るようにしていたと思う。しかし、このとき紅葉の目は俺のはるか後ろで焦点を結んでいた。どこか遠くを見つめるような紅葉の視線の先には何が見えているのだろうか？ 会話はそこで途切れてしまった。

それから勉強会は続いたのだが、俺は勉強に身が入らなかった。紅葉に教えている内容も違うことを言っていることに気付かず、マキやミキに何度か注意された。

「さて、これくらいで終わりにしましょうか？ 明日は本番ですし、奏音も自分の準備をした方がいいでしょう。奏音、どうしました？」

気付くと目の前には紅葉の整った顔があった。何度かこのくらいの近い距離で見たことはあるが、何度見ても慣れることはない。俺の顔を映し出している透き通った瞳に、ぱっちりとしたまつ毛。何物にも触れたことのないような卵肌。どれもが俺の心を煩わせるには十分すぎる代物である。

「あ、ああ……」

俺があいまいに返事を返すと、紅葉は満面の笑みを浮かべ顔を離した。

「さあ、外ももう暗くなっていますし送って行きましょうか、奏音？」

紅葉が通学にいつも使っている車で送ってくれるということなのだろう。俺は紅葉にもう少し触れ合っていたいと思いつつも、この場から早去りたいと言う気持ちに支配された。俺が紅葉の申し出を断ると、紅葉は残念と口に出してつぶやいた。

結局俺は紅葉達が車に乗り込むのを見送った後、帰路に着いた。家に帰っても勉強になど集中できないとは分かっていたが、この場で行動に起こせるほどの俺はいなかった。

「はい、やめっ！ テストは番号順になるように前に送ってね」

最後の英語のテストが今終わり、やっと今回のテストも終わりを告げた。テストなんてやっても無駄じゃないか！ テストなんかしたって寸前になって詰め込むだけで、終わってしまえば全部忘れてしまうのが席の山だしな。テストなんて生徒が苦しむ姿が見たい陰湿な教師が作ったに違いない！ こんなに苦労するのは、普段から勉強をしていないからだってことはわかっているんだよ？ でも、そうとは分かっているけどテストもないのに勉強なんてする気にならない。ってことは、テストは意味をなしているってことになるのか？

「奏音ちゃん、テストはどうだった？」

瑞希が後ろの席から首を伸ばし話しかけてきた。

「二番の最後がわからなかったな」

「そこも、分からなかったけど五番の三個目の意味が分からなかったの」

五番は確か英語の諺を日本語に戻す問題だっけ？

「どんなやつだった？」

「えつとTime flies. だよ。時間跳躍？」

「はっはっは！ 時間跳躍はないだろ！ どんな諺だよ」

俺が大笑いすると、瑞希は少し怒ったようだ。

「そんなこと言っただって、分からなかったんだもん！ 他の諺は直訳すれば意味が何となく取れたけど、それだけは良くわからなくて……」

「そうか？ イメージ出来ないこともないと思うけど？」

そんな難しい諺じゃないしな。

「えー、じゃあ答えは何よ？ 教えてよ！」

「さてと、テストも終わつたし遊びに行くぞ、周」

「無視しないでよー！」

瑞穂が泣きべそをかいていたかのような顔で言ってきたが、知らんぷりをして周と話す。

「どこかいい場所はないか？」

「悪い、奏音。今日は先客がいて無理なんだ」

周は教室の後ろの入り口を指差す。

「先客だと？ 誰だよ？ あっ！ わりい、気付かなかったぜ」

周の指差した方を見ると、そこには穂乃香ちゃんがいた。俺が軽くからかい気味に言っただのに、周は反応せずに穂乃香ちゃんと一緒に帰って行った。慣れって怖いね。

周が立ち去ったことで、ここに残されたのは俺と頬を風船のように膨らましている瑞希。面倒くさくなりそうだ。

「周君、帰っちゃったね」

「そうですね、瑞希さん」

ここは瑞希の怒りに触れないように丁寧に扱うのが重要だ。

「それで、奏音ちゃんはどうして私を無視したのかな？」

満面の笑みを浮かべ俺を問い詰める瑞希。笑っているはずなのに、俺は一步後ずさりしてしまった。

「どうしてかな？」

瑞希は追い打ちをかけるように、その一步を縮める。そんなことを繰り返しているうちに、教室の隅まで来てしまった。俺にはもう後がない。ど、どうすればいいんだ！

その時ガラガラと大きな音を立てて教室のドアが開かれた。

「おい、奏音はまだいるか？」

そこにいたのはマキだった。俺はマキに氣を取られている瑞希から、必死に逃げマキのところまで行く。なんていいタイミングだっただろう。俺の目ごろの行いがいいからかな？

「どうしたんだ、そんなに慌てて？」

今来たばかりのマキには状況が理解できず、頭の上にハテナマークをいくつも浮かべている。

「なんでもない、なんでもない。それで俺に何か用か？」

このとき瑞希が後ろから接近してきたことに気付いていたが、平常心を装う。

「お嬢様が奏音に勉強を見てもらったお礼に、一緒にどこかに行かないかってお前を誘われているのだが、用事はないか？」

ここで用事はないかと聞くと、これを見たと、これは俺に選択肢を提示しているわけではないらしい。もし用事がなければ強制連行だろうし、あると言つてもどんな用事が聞かれて大した用事でなければまたもや強制連行。だから、用事があると嘘をつくのも無意味だとわかってしまう。

「ああ、何もないよ」

まあ、折角の紅葉からの誘いを断る必要はないんだけどね。

「ちょ、ちよつと待ってよ。私が奏音ちゃんを先に誘うつもりだったのに！」

横からそんなことを言ってきたのは、疑いようもなく瑞希だ。

「『つもり』だったんだろう？ なら、先に約束したのは私だ。」

残念だったな」

不敵な笑みを浮かべているマキが、紅葉を煽るように言う。やめてっ！　今の瑞希を刺激しないで！

「だって、奏音ちゃん私の話を聞いてくれなかったんだもん！」

「それは奏音に嫌われているんじゃないのか？」

「そ、そうなの奏音ちゃん？」

瑞希がかなり不安そうに俺を見つめてくる。俺ってそんな風に見えるか？　確かに素気なく接することはあったかもしれないけど、さっきだって無視とかしたけど。

「それはないんじゃないかな？」

「何で他人事みたいに話すの？」

そう言われれば何でだろう？　俺は瑞希の事が嫌いなのか？　いや、そんなはずはないと思うけど？　じゃあ、好きなんだろうか？
…？

「そんなことはどうでもいい。奏音、急いで行くぞ！　お嬢様はもう待ってらっしゃるのだから！」

「私はどうなるの？」

「知らん、また今度誘えばいいだろう！」

マキにそんなことを言われ、下を向いてしまった瑞希。なんだかかわしそうになってきた。

「じゃあ、俺たちと一緒に行くか？」

「いいの？」

うつむいていた顔を上げ、潤んだ瞳を向けてくる。

「いいだろ、マキ？」

「だめだ、だめだ！　お嬢様に断りもなく、そんな勝手な判断はできん！」

「じゃあ、紅葉がいいって言えばいいのか？」

それならば、今から紅葉のところに向かうのだ、一緒に行って聞けば済む話だと思う。

「だめだ、お嬢様は奏音を誘ったのだぞ？　他の奴を連れていくな

んてできない」

「別に構いませんよ？」

マキの後ろから声がして、三人とも声のした方に視界を向けた。そこには紅葉とミキの姿が。

「で、ですが！」

「私が構わないと言ったら構わないのです。それとも私に意見するつもりですか？」

初めて見た紅葉の相手を威圧するような瞳。それが今、普段あんなに仲がいいマキに向けられている。紅葉と目を合わせたマキはぼそつと申し訳ございませんと言うとそれから何も言わなくなってしまった。

「申し訳ありませんでした、衣川さん。もしよろしかったら私たちと一緒に行きませんか？」

紅葉は先ほどマキに向けていた瞳とは似ても似つかぬ、こちらを心の底から安心させてくれる類笑みで瑞希を見た。

「私なんかが着いていって、本当にいいのですか？」

瑞希は恐る恐る紅葉に尋ねた。

「私としては、来てくださった方が嬉しいですわ」

「じゃあ、一緒に行かせてください！」

こうして五人で出かけることになった。

さて、皆で出かけることになったのはいいのだけれど、いつもながら何をしたらいいのだろう？ 普段あまり外に遊びに行かない俺としては、今回の様に急な外出の予定が出来てもどこに行けばいいのか見当もつかない。この前瑞希と出かけた時も二人してどこに行けばいいかわからず、さまよってたっけ。

「今日は行く場所は決まっているのか？」

「一応考えてはいるが、何か案があれば聞いてやってもいいぞ？」
ふう、決まっているのか。じゃあ、俺が心配する必要はないな。
「いや、特にないからそこでもいいよ。それでどこに行くんだ？」

「紅葉様がテスト勉強を頑張られて疲れていらつしやるだろうから、甘味処に行こうと思ってる。瑞希さんもそれでいいかな？」

マキは先ほどケンカしていた瑞希に対して、ケンカしていたことが嘘かの様に親しげに聞く。マキは切り替えが早いんだな。確かにこれからずつとツンケンされても気分悪いし、いいんだけどね。こっちはそういうわけにはいかないのかなあ。

瑞希の方に目を向けると、マキの言葉に対して頷いただけで何も言わない。さっきまであれだけ言い合っていたのだ、瑞希の反応が普通だと思う。

「そ、その甘味処はここからどのくらいなんだ？」

このままでは沈黙の時間が始まりそうだったので、何とか会話を続けようと再びマキに振る。

「車で二十分くらいかな。校門のところに車を止めてあるから、それに乗って行くんだ」

「私がいつも行く甘味処です。衣川さんもきつと気に入ってくださると思いますわ。」

紅葉は先ほど瑞希を誘った時のままの笑顔でいる。ずっと同じ顔をしていて疲れないのだろうか？

校門まで来ると、さっきマキが行っていたようにいつも紅葉が乗っている黒塗りの高級車が止まっていた。ミキが車の後ろの扉を開けて紅葉をエスコートする。

「紅葉様、足元にお気をつけください」

「ありがとう。でも私はそんなにそそかしいつもりはないのだけかどうか？」

「そんな、私は消してお嬢様がそそかしいとは思っておりません！」

紅葉にからかわれたミキは顔をぶんぶん振ってそれを否定している。

「ふふふ、冗談よ。ミキは私の事を心配して言ってくれたのですものね。感謝こそすれ、怒ったりなどはしないわ」

紅葉は口元に手を持っていき、ふふふと上品に笑っている。それにつられて俺とマキが笑いだし、最後には瑞希も一緒になって笑った。

この出来事で俺たちの雰囲気はガラツと変わった。さっきまでのどこか暗い雰囲気はなくなり、明るく楽しい感じになった。紅葉が天然で雰囲気を変えたとは考えずらい。多分、故意にやって見せたのだろう。俺は改めて紅葉のすごさを知った気がした。

それから暫くして、目的地である甘味処に着いた。しかし、そこは甘味処というよりは高級料亭といったほうがあっている気がする。「ここがそうなのか？ 実は隣の小さなお店ですとかって言うオチはないだろうな？」

「いいえ、ここですわ。ここはぜんざいが有名で、各界の著名人の方々もいらっしゃるのですよ」

流石は紅葉の行きつけの店といったところだろうか。俺たちの予想の斜め上をいつている。

「でも、ここ。値段が張るんじゃないですか？」

瑞希の質問を聞き、俺はとっさに財布の中身を確認する。中には野口さんが二名。果して足りるだろうか？

「そんなこと気にしなくてもいいですよ。ここは私が持ちますから。奏音もお財布の中を確認しなくてもいいですから」

紅葉はまたふふふという得意の上品な笑いをしている。なんか今日の紅葉はいつもより明るくないか？ 確かにいつも笑ったりもするけれど、今日はちよつとおかしい気がする。

「えっ！ でも、悪いですよ」

「気にしないでください、私が招待したのですから。さあ、立ち話をしていないで中に入りましょう？」

紅葉の先導で店に入ると、従業員一同のお出迎えが待っていた。

「……いらっしやいませ。池宮城様」……

俺と瑞希は驚き固まってしまった。誰が甘味処に入るだけなのにこんなことになると思うか？ そんな俺たちをよそに、女将さんら

しき人が現れた。何故甘味処で女将さん？　とは思ったが、もうここまで来ると何があってもおかしくない気がする。

「池宮城様。いつも御贔屓にしていたきありがとうございます。お部屋はこちらになります」

女将さんの言葉に俺は先ほど紅葉が言っていたこの店に来る各界の著名人の中に紅葉も入っていたことに気付かされた。

部屋に通された俺たちは机の周りに置いてある座布団に座った。紅葉が女将さんに人数分のぜんざいを注文すると、女将さんは部屋から出ていく。そうすると部屋には俺たち五人になってしまう。俺はどうすればいいのか分からず、部屋を見渡した。

部屋の中もとても豪華な造りなのだが、何よりも目に止まるのは窓の向こうに見える日本庭園だろう。石、砂、植栽を使った庭で、かなりしつかりと手入れされている。白砂を使って水の流れを表しているのですよと紅葉に庭の説明をもらっていると、女将さんが五つのぜんざいを持って現れた。

俺の前に置かれたぜんざいを見ると何故か金粉がふんだんに使われている。いつも思うのだけれど、体の中で分解することのできない金をどうして食べるのだろうか？　豪華に見えるからだろうか？

「おいしー！」

そんなことを考えているうちに、皆食べ始めていて瑞希がスプーンを片手に声を上げていた。俺も口に含んでみると、今まで食べてきたぜんざいはなんだったんだろうと考えさせられてしまうくらいおいしかった。こんなにおいしいなら俺も常連になりたいと思うが、悲しきかな、金銭的に無理であろう。男として悲しいけど、また今度紅葉に連れてきてもらおう。

次の日、呼び鈴によって俺は起こされた。別に俺に用事がある人が来たわけではないだろう。今日は日曜だしまだ寝ていてもいい時間だ。再び布団に潜った俺の耳に俺の部屋に近づいてくる足音が届く。ああ、幻聴であつたらどんなにいいだろうか。現実逃避をして

いる俺をよそに俺の部屋の扉が開いた。

「奏音、迎えに来たぞ！」

それはマキの声だった。

「なんだ、まだ寝てるのか？ 後三秒で起きなかつたら叩き起こすからな！ さん！ にー！ いちっ！」

「わかつた、起きるから！」

身の危険を感じた俺はとっさに上半身を起こす。すると、そこには俺に飛びかかるうとしているマキの姿が……。なんでまた強引に起こされなければならないのだろうか？ 召集は昨日あったのだから今日はゆつくりできると思ったのに。

「それで、今日は何の用だ？」

無理やり起こされた俺は機嫌が悪く、ぶつきらばうにマキに聞く。「お嬢様が奏音をお食事招待されたのだ。もちろん行くよな？」

「いや、今日は一日寝るといふ予定が……」

「そうか。じゃあ、残念だがお嬢様には断られたと伝えておくよ」

「ちょ、ちょっと待てよ！ いつもは俺が何と言っても強引に連れて行くのに、どうして今日は引き下がるんだ？」

俺は帰ろうとしているマキを慌てて止めに入る。

「用事があるのだろう？ 仕方がないじゃないか。私も暇じゃないんだ、ここを通してもらえないかな？」

「悪かつた、俺が悪かつたから。紅葉からの誘いなんだろう？ すぐに支度するから待っててくれ」

しょうがないなと待つことにしてくれたマキを見て、俺は安心してため息を吐いた。どうして俺はこんなに慌ててしまったのだろうか？ 今まで紅葉からの誘いもただ面倒くさいと思っていたのに。今だって面倒くさいと思って用事があるとか言ったのに、どうして俺は紅葉からの誘いを受けることができて、こんなにも安心していいのだろうか？

「おい、何ばーつとしてるんだよ。早く準備しないと置いていくぞ！」

そう言って部屋の外に出ていくマキ。

「わかった、今行くから！」

俺は急いで支度をしてマキを追いかけた。

今回の食事は紅葉の家で食べるらしい。前に紅葉の家に行ったのは結構前の気がする。本当はそんなにたっていないのだけれど、最近はいろいろありすぎて一日が長い。充実していると云ったらそうなのかもしれないが、俺はゆっくりと休める日が恋しい。

池宮城の屋敷の食堂に入るとそこには椅子に座った紅葉と、後ろに立っているミキが目に入ってきた。そこにいる紅葉は膝の上できれいに重ねている細く長い指先、すつとまっすぐに伸びてた背中、白く透き通ったきめの細かい肌、朱くふつくらとした唇、秋に澄んだ水のような瞳、それから横に長く引かれた美しい眉で俺が来ることを待っていた。

紅葉は入ってきた俺に気付くと、誘いを受けたことへの感謝の言葉を悲しい笑顔と一緒に俺にくれた。

「今日はどうしたんだ？ 昨日も一緒に出かけてじゃないか？」

「私も昨日で十分だと思っていたのですが、今日になったらまだ足りないと思ってしまうして……」

何が十分で何が足りないのだろう？

「だから、食事に招待してくれたのか。そう言えば最初にあった日にもここで食事したんだっただな。今の紅葉を見ると、あの時の紅葉とはまるで別人だな」

俺はハハハと笑う。だってそうだろう？ 俺はあの時ここで椅子に縛られてたんだぜ？

「恥ずかしいですわ。でも、あのときは手段を選んでいる余裕などありませんでしたので」

顔に紅葉を散らして言う。この一文は駄洒落のつもりじゃないかな！

「あの時は頭の中がごちゃごちゃで料理の事は全然覚えてないから、

こうやってまた食事に誘ってもらえたことは素直に嬉しいよ」

「そう言っていただけと私も嬉しいですわ。前回の事を覚えてらっしゃらないという事は少し引っかかりますが」

紅葉と話し込んでいると料理が運ばれてきた。テレビでしか見たことがないような高級食材をふんだんに使った料理が真っ白のお皿にちょこんと置いてある。いつも思うのだが、こういう料理はどうしてこんなにも量が少ないのだろうか？ 値段はかなり張っているのだから量を増やしてもいいだろうに……。

「それでは足りませんか？ でも大丈夫ですよ。これからまだ料理はたくさん来ますわ」

確かに紅葉の言葉通り、そのあと十種類ほどの料理がやってきた。もちろん紅葉は食べけることはできないので、一口食べたただけでほとんど下げてもらっている。

「もったいないな」。料理の数を減らして全部食べきれる量にしたらどうだ？」

「何を言っている！ お嬢様は奏音にいろいろな種類の料理を食べてもらいたかったからこういう食事になさったのだぞ！」

「いいのです、マキ。確かに食べ物残している私は大変粗末なことをしているのですから」

紅葉は俺に掴みかかってきそうなマキをなだめるように言う。

「俺が悪かったよ。紅葉は俺の事を考えてこうしてくれたんだな。ありがとう」

この食事は前回とはうって変わって、いい雰囲気で終えることができたと思う。このときにはもう紅葉の気持ちは固まっていて、俺の気持ちは傾いていたけれどこのときはただ楽しかった。

第5話

次の日、学園に行くとは何か学園全体がそわそわしている気がした。俺には分からないが何かがあったのかもしてない。話し込んでいる生徒たちの話に聞き耳を立ててみると、池宮城財閥、河原林財閥といった言葉が聞き取れた。経済で大きな事件でもあったのだろうか？ 今日の朝のニュースでは該当するような事はやっていなかった。不思議に思いつつ教室に入ると、俺のところに周が駆け寄ってきた。

「池宮城さんと河原林の事知ってるか？」

周はそんなことを聞いてくる。やはりあの二人に何かがあったらしい。でも他の生徒たちは財閥の話をしていたぞ？

「いや知らないが。何かあったのか？」

「俺も学園に来て知ったんだけど、あの二人それに池宮城さんのお付きの二人も転校したらしい。なんでも池宮城さんが河原林の奴と婚約したらしくて、河原林財閥の経営している学園に転校したとか」

「は？ 何だよそれ、確かなのか？ 昨日も紅葉にあつたが、そんなこと言っただけだぞ？ それに紅葉は前から玲央の求婚を断っていたじゃないか！」

玲央の家に行ったときだって面倒くさそうにしていたのに。

「あくまでも噂なんだが、池宮城財閥は経営が傾いていて河原林の奴が援助してやるから池宮城さんを渡せと言ったらしい。確かに前から河原林の奴が池宮城には余裕はないから、池宮城さんが落ちるのも時間の問題だと言っていたが本当だったとわな」

「つまり、紅葉は家を助けるために嫌々玲央と結婚するってことか？」

「そうだな、政略結婚ってやつだろ。あんな奴と結婚することになった池宮城さんに同情するよ。お前も残念だったな。まあ、奏音には高嶺の花だったんだよ」

「ふざけるなよ」

俺は頭に血が上り冷静に物事を考えられなくなっていた。

「そ、そんなにむきになるなよ。悪かった、茶化したことは謝るからさ」

俺の表情が余程怖かったのか、周は尻込みしながら謝ってきた。

「政略結婚だと？ 何で紅葉が利用されなくてはならないんだよ！ 何でしたくもない奴も結婚しないといけないんだよ！」

俺の中で何か黒いものが湧きあがってくる。

「奏音落ち着けて！ 俺たちじゃあどうしようもないんだよ！」

「池宮城の会長の所に文句を言いに行ってくる」

俺はそのまま教室から出ていく。

「待てって、今からHR始まるんだぞ！」

俺は周の言葉を無視して池宮城邸を目指した。

学園から飛び出した俺は、タクシーを拾い池宮城邸を目指した。池宮城邸は昨日と変わらぬままそこにあり、俺は安堵した。昨日訪れてから24時間も立っていないのだから、当たり前と言えば当たり前なのだが、そんなことすら信じられなくらい俺の周りの環境が変化してしまっているように錯覚を覚えていた。

門番に会長に用事があると伝えると、すぐに連絡を取ってくれて中に入れてもらえた。会長は門番に俺が来るかもしれないと伝えていたのかもしれない。

俺はどこか社長室を思わせる部屋に通された。紅葉の父親は池宮城財閥の会長なのだからこういう部屋があることは当たり前かもしれない。しかし、あの会長からはこういったイメージは受けて取れず、会長は名前だけで下の者にすべて任せているという印象を持っていた俺にはこの部屋は意外だった。

俺は体重をかけるとずっしりと沈み込むソファで座って待つように言われたので、大人しく待っていた。教室で沸騰した俺の頭はある程度冷めていたので、会長が出てきたら何を言ってやろうかと考

え込んでいた。

会長が現れたのはそれから十分ほどしてからだった。

「やあ、待たせてすまない。仕事のきりがなかなかつかなくてね」

「どうして、紅葉を利用したんですか！」

俺は会長が出てくるなり、すぐに言いたかったことを会長にぶつける。

「君はそんなことを言いに来たのかね？　どうして……か。決まっているだろう、池宮城財閥を守るためだよ」

「貴方は、自分の娘よりも仕事が大事なのですか！」

「仕事は大事だよ。君はまだ働いていないから分からないかもしれないが、とても大事なことだ」

紅葉の事を考えて、今までにあれだけ俺に危害を加えてきた人だとは到底思えない。会長は紅葉の事を大切に思っていると感じたから俺はここに来れば何とかなると思ったのに。

「仕事のためなら、娘はどうなっても構わないと？」

「そうは言っていないさ。私だって紅葉の事は大事に思っているし、幸せになってもraitたい」

「なら、何で！」

「君はもう少し大人にならないといけないかもしれないね。冷静になりたまえ。私だって娘は大切だ、家族は大切なんだよ？　でもね、私は池宮城財閥の会長であり、私たち家族は池宮城財閥で働いているすべての人たちによって生活を支えられているんだ。彼らによって私たち家族はこんなにもいい生活をさせてもらっているのだよ。しかし、今は池宮城財閥の経営は傾いてしまっている。私は池宮城財閥の会長として、私の下で働いているすべての人を守らなければならない。彼らにも彼らの家族と生活がある。経営が苦しくなったからと言って簡単に放り出すわけにはいかないんだ！　そして、今回は紅葉で彼らを守ることができる。だから、私は紅葉に玲央君と結婚してもらうことにしたんだ」

会長の言う事には筋は通っていると思うし、俺も働くならこんな

人の下で働きたいと思う。でも、それでも、紅葉を犠牲にするのは我慢ならない。

「本当にそれでいいのですか？ 他に方法はないのですか？」

「他に方法があるとでも？ もうどうにもならないんだ。私は池宮城財閥で働いてくれている人々を守らなければならないし、君みたいな子供にはどうしようもないことなのだよ。今日まで紅葉と仲良くしてくれてありがとう」

「なら最後に本当のことを聞かせてください。紅葉の結婚についてどう思いますか？」

俺はこれを聞くことで、紅葉の為に、この家族の為に頑張る活力を得ようとした。

「経営再建のためになるから嬉しい」

俺はそんな答えを聞くために質問したんじゃない！

「本当にそう思っているのですか？ なら経営者としては最高でも、親としては最低ですね。紅葉と話してきます。紅葉の気持ちも知りたいです」

俺は会長の部屋を出て、どずどずと歩き紅葉の部屋を目指した。出るときに扉を勢いよく閉めたかもしれないが、それすら覚えていなかった。

「旦那様、彼をお嬢様に会わせて良かったのですか？」

「勝手にさせておきなさい。今さら何もできないだろう」

会長は平然な表情で爪がくい込むほど拳を握って言った。

紅葉の部屋の重く大きい扉の前に立った俺は、まず気持ちを落ち着けるために大きく深呼吸を一度した。先ほど会長に怒ったテンシヨンのままでは紅葉に会ってはいけないと思ったからだ。そして俺は、目の前に立ちばかる扉にコンコンコンと三回ノックした。

「はい、入っていらして構いませんよ」

昨日と変わらない紅葉の声。俺は心の中に溢れる何かに急かされ

て、勢いよく扉を開けた。

「何の用かしら、奏音？」

紅葉は突然現れた俺に驚きもせずに、ティーカップを置きながら言った。そこにはミキとマキいなかった。

「どうして昨日何も言ってくれなかったんだよ！」

紅葉の元へ歩み寄った俺は少し大きな声で言ってしまったことに後悔した。まだ、先ほどの事を引きずっているらしい。

「言う必要もないと思いましたので。奏音はまだ授業の時間でしょう？ 早く学園に戻ったらいかがですか？」

「学園には戻らない。俺は今回の紅葉の転校も婚約も許せないから。紅葉だって今の学園の方がいいだろ？ 親の都合で勝手に転校させられるなんて嫌だろ？ 会長にそうやって言いに行こうぜ」

さあ、と紅葉を促すが紅葉は一向に動こうとしない。

「私は今回の一連の騒動に納得していますわ。ですので、お父様に講義する気はありません」

「俺は紅葉に転校してほしくないんだよ！」

「貴方はそんな自分のわがままを言い到此こまで来たのですか？」

紅葉は細めた冷たい瞳で俺を見つめてくる。

「紅葉も同じ気持ちだと思ったんだ。だから俺は紅葉を助けるためにここまで来たんだよ！」

「激しい勘違いですね。自分の気持ちを他人にまで押し付けようとして。しかし、無駄なことです。先にお父様とお話になったのです。貴方にはどうすることもできないのは分かったはずですよ。だから、紅葉が嫌だってことを伝えれば会長も無理やり転校させたり何てしないと思ったんだよ！」

紅葉と話せば何とかなると思ったから……。

「手がなかったので私を味方につけようとしたのですね。でも、残念です。私はお父様のお話を納得した上で同意したのですから」

「そんなはずはない！」

「もう、無駄なのですからそれくらいにしていただけませんか？」

私を連れ戻すためにここまで来られた行動力には感心しますが、そもそもどうして私をあの手園に連れ戻そうと思ったのですか？ 河原林様との婚約に反対するのですか？」

「どうして……？ そんなこと決まっているだろう……」

広く静かな紅葉の部屋に俺の言葉が柔らかく包まれるのを感じた。

「どうして私をあの手園に連れ戻そうと思ったのですか？ 河原林様との婚約に反対するのですか？」

確かに紅葉がどの手園に行こうが、誰と婚約しようが家庭の事情と言われれば俺には関係のない話になってしまふのかもしれないでも、それでも俺がここに来た理由は……、

「どうして……？ そんなこと決まっているだろう……」

俺は一息置いて、深呼吸をする。紅葉も息を呑んでその時を待っている。

「俺は紅葉、お前の事が好きなんだ。だから、紅葉には玲央の所に行って欲しくないんだ！」

俺は紅葉の透き通ったブラウンの瞳を、瞬きもせずに真直ぐ見つめながら言った。紅葉は頬を桜の花弁のように染めて、目をそらした。

「か、奏音にそう言っていただけるのは嬉しいのですが、私はもう河原林様との婚約をしてしまったのです。申し訳ありませんが諦めてください」

先ほどの照れくさそうな表情から悲しそうな表情に変えて言う紅葉を見て、俺は我慢がならなかった。

「紅葉が望んで玲央と婚約したのなら俺だって諦めるさ。でも、お前は家の為に池宮城の為に婚約したんだろ？ 何か他に方法はないのか？」

「ありませんし、私が河原林様と婚約することが最善なのです。そ

れに、奏音には私よりも良い娘がいるはずですよ」

紅葉はそう言うが、今の俺には紅葉以外の娘なんて考えられない！

「なら、もし俺が玲央との婚約以上に良い方法を見つけてきたならば、この婚約はやめてもらえるか？」

「そんなことは無理だと思いますが、奏音が見つけてくることのできたなら、もちろんお父様には何とか破棄してもらおうように動いてもらいますわよ。でも奏音、無理はなさらないでくださいね？ 河原林様と私が婚約することは前から決まっていたことでするので、私も納得していますから」

紅葉が俺の心配をしてくれることが素直に嬉しい。でも、俺にはやらなければいけない時なんだ！

「ああ、紅葉には迷惑は掛けないさ！」

「私はそういうことを言っているのではなくてです……」

まだ紅葉は何か言っていたが、俺はその言葉を聞かずに紅葉の部屋を飛び出した。トンネルの先に光が見えたような気がした。

紅葉の部屋を勢いよく俺は飛び出したが、実を言うとまだ紅葉を取り戻す手段なんて考えもつかなかった。だから俺は紅葉の事に詳しく、俺の見方をしてくれるであろうミキとマキを頼ることにした。まず俺はミキとマキのいる場所を知らなかったので、誰かに聞いてみようと歩いていた。するといいところに一人の若い男が立っていた。

「すみません。紅葉といつも一緒にいるミキとマキの居場所を知りませんか？」

ラフな格好をしていてこの使用人といった様子でなかったその男だが、俺は勤務時間外か何かだろうと気にせず話しかけた。

「ああ、知っているとも。そうか、紅葉を助ける手段をあの二人に相談に行くことにしたのか。まあ、いい考えなんじゃないか？」

「えっ！」

この人は俺が今からしようとしていることを知っていたし、紅葉

のことを呼び捨てにしている。明らかに使用人ではなかった。

「申し遅れたね。私の名前は池宮城鳴海、紅葉の兄をしているものだ。それにしても奏音君とか言ったかな？ 君は果敢だね。紅葉の為にここまで行動してしまうとは。紅葉からしたら君も、玲央君も代わらないっていうのにねえ」

紅葉の兄と名乗るこの男は、口元を釣り上げて静かに笑った。

「俺と玲央が代わらないっていうのはどういうことだ！ あいつは家を守るために嫌々玲央と婚約したんじゃないのか？」

「そうさ、だから代わらないって言ったんだよ」

「意味が分からない。どういうことなんだよ！」

次第に興奮する俺に対し、この男は俺の神経を業と逆なでするように話してくる。

「じゃあ、質問しよう。君は庶民と財閥の御令嬢が偶然出会って仲良くなつていくなどといったことが、この世界で本当にあると思うのかい？ そして、その二人の関係を御令嬢の親が認めるなんてことが本当にあると思うか？」

「何が言いたい？」

「つまり、君と紅葉が出会い、ここまで来ることは仕組まれていたってことさ！」

た、確かに今まで不自然なことは何度かあったが、仕組まれていたと言うには決定的なことが足りない。

「もしそうだとしても、紅葉側のメリットがないじゃないか！ 会長の道楽で俺たちを仲良くさせたとも言つのかよ！」

「そうだな。では、ここで二つ目の質問をしよう。君は母方の親戚に会ったことがあるかな？ 母方の名字を聞いたことがあるかな？」

確かに今まで疑問に思つて母親に聞いたなら、はぐらかされたな。私はお父さんと駆け落ちしたから、家のことは関係ないと言つてたっけ。

「ないけど……、関係ないだろう！ 俺は悠木奏音なんだから！」

「残念ながら、そういうわけにはいかないんだよ。ではここで一つ

昔話をしよう。昔、ある由緒正しい名家に女の子が生まれた。そして、その子には歳が両手で数えられなくなる前には、もう婚約者が決まっていたんだ。しかし、その娘は屋敷で働いていた同じくらいの歳の男と恋に落ちた。すると、その二人は一緒になるために駆け落ちをした。そんなことを彼女の親は許すはずがなくて彼女を血眼になって探した。でも、見つけ出した時には彼女は男の子を身ごもっていたんだ。そうなるとその家の者たちは、後継ぎになるその男の子だけを回収すればよかったから、産んだらすぐに引き渡すように言ったんだ。でも、その夫婦はこの子を連れていけないでくれと泣いて頼む。流石に娘から孫を無理やり引き離すことが悪いと思っただのか、彼女の親たちは条件を出したんだ。今はお前たちが育てていいが、その子が大人になったら家を継がせるようにとね。その話を知った私たち池宮城は紅葉を君に近付けたんだよ、花山院奏音君！」

「……、花山院……？」

「花山院の名くらい君みたいに庶民として育ってきたものでも知っているだろう？ 花山院、池宮城、河原林と言えばこの国の三大財閥だ。だから紅葉は河原林の御曹司である玲央君の所に行っても、花山院の御曹司である君の所に行っても代わらないと言ったのさ。結局は紅葉は池宮城の為に使われてしまうんだよ！」

「そんな馬鹿な。俺が花山院の御曹司？ そんなはずはない！ だって俺は一般家庭で普通に育てられたんだぞ！」

自分が御曹司などということは到底理解できなかったし、何より紅葉が財産目当てで俺に近付いたとは信じたくなかった。

「だから、お前が庶民として育てられた理由は話してやっただろう？ それでも信じられないのだったら親にでも聞いてみるんだな」「嘘だ。そんなの嘘に決まってる！」

俺は真相を確かめに全力で池宮城邸を後にした。

俺が家に着いた時には辺りはすっかり暗くなっていた。玄関を照らす外灯が俺の影を明確にする。玄関の扉は鍵もかけられておらず、いつも通り俺を迎えてくれる。靴を壁にぶつけるかのように勢いよく脱ぎ捨てると、俺は一直線に台所に向かった。そこには母さんがいつも通り夕食の支度をしている姿があった。

「どうしたんだい、そんなに急いで？　夕飯ならまだできてないよ。私の代わりに夕飯の支度をしてくれるのかい？」

「そうじゃないんだ。俺、母さんに聞きたいことがあって……」
そう言つと、母は分かりやすくがっかりした様な仕草をする。

「なんだい？　私も暇じゃないんだ、早く言いな！」

「あのさ……、母さんって花山院財閥の令嬢だったって本当？」
「なっ！」

母さんは今までに見たことがないほど驚いて、持っていたお玉が手からするりと落ちた。

「あんたっ、それをどこで知ったんだい！　他の人には話してないだろうね！」

「池宮城の御曹司に聞かされたんだよ！　母さん、本当なのかよ！　俺は花山院奏音なのかよ！」

「池宮城があんたに接触していたの？　うかつだったわ、私があこの学園への進学止めていれば……」

「嘘だろ！　嘘だと言ってくれよ！　なあ、母さん！」

俺だつてこのとき母さんが花山院の出身だという事はもう理解していた。しかし、それは紅葉が俺の家目当てで俺に近付いてきたことを意味する。だから、どうしても認めるわけにはいかなかった。

ピンポン

玄関のチャイムが鳴ったようだ。なんてタイミングの悪いお客様だろう。

「どうやらお迎えが来たようだね。奏音、今まで隠していてごめんなさい。でも、本当の事を知ってしまったあんたはこれから花山院

の御曹司として生きていかなければならないの。あんたがもし自分の正体に気付いたら、花山院の家に引き取られる約束だったから……。でも、あんたはどうしたい？ こんな話は親たちが勝手に決めたことであんたには受け入れたくないことだろう？ あんたが望むなら私たちが全力で守るよ」

「俺は花山院なんて行きたくないよ。どうしたらいい？」

「出てこないなら勝手に上がりますよ！」

玄関の方からは野太い男の声が聞こえ、足音が近づいてきた。

「とりあえず、裏口から逃げなさい！ そうしたら何とかして父ちゃんに連絡を取りなさい！ さあ、早く行きなさい。私がここでできるだけ喰いとめるから」

「わかった。行ってくる母さん」

裏口から飛び出した俺は玄関に何台もの高級車が止まっているのが目にした。これでは正面から抜けるのは無理だ。裏の家の庭を通って逃げさせてもらおう。そう考え、ブロック塀を飛び越える俺。奴らはまだ母さんが喰いとめているらしい。俺の方にはやって来なかった。

通りに出た俺はさてこれからどうしたらいいだろう？ 母さんは父さんに連絡を取って言ってたつけ。携帯電話は今持っていないから、取り合えず電話がある場所に行くべきだろう。でも、周りに公衆電話がある場所なんて知らない。知っているのは学園の近くまで行かないとない。ならどうすべきか……。知らない民家に駆け込んで貸してもらおうか？ いや、そんなこと今日のこの国では怪しまれて断られるだろう。でも、知っている近所の家だと奴らに見つかりそうだ。もう、学園まで行くしかないのか？ いや、あるじゃないか！ 近すぎず、遠すぎず、俺に電話を貸してくれる家がないか！ 「そうだ、瑞希の家に行けばいいんだ！」

一直線に瑞希の家を目指す俺。瑞希の家は走って三分くらいの所にある。ここなら問題がないはずだ。

「なっ！」

俺はとつさに電信柱の影に隠れた。何故かといえば、奴らの車が前の道を横切ったからだ。奴ら、俺が逃げたことをもう知ったのか？ 次の角を曲がれば瑞希の家だ。家の中に入ってしまったらもう奴らも見つけられないだろう。

俺は角に隠れながら奴らの車がないか様子をうかがった。よし！見当たらないぞ。安全を確認した俺は瑞希の家に向かって全力でダッシュした。もう見えてきたぞ！ いいぞ、たどりついた。そしてすぐにチャイムを鳴らす。

「どちら様ですか？」

瑞希の声が聞こえた。

「俺だ、奏音だ。少し訳があつて今追われてるんだ！ 中に入れてくれないか！」

「わ、分かったよ。今行くから待ってて！」

瑞希の戸惑う声が聞こえる。それはそうだろう、突然追われてるから匿ってくれなんて言う奴が現れたんだから。俺は苦笑いしながら扉が開くのを待った。

「奏音様、残念ながら、この家には私たちが張り込んでいました。さあ車に乗ってください」

「やめろっ！」

後ろから腕を掴まれ、俺は無理やりこいつらの車に押し込まれた。こいつらは素早く俺を車に押し込むと、直ぐに車を出した。そう、扉が開くよりも早く……。

「奏音ちゃん？ えっと、どこに行ったの？」

扉を開いた瑞希に俺は顔を見せることはできなかった。

車で無理やり連れて行かれた俺は不謹慎だと思いつつも、懐かしい気持ちでいっぱいだった。ここ最近はこうやって強引に連れ回されることな幾度となくあったから。そんなことを繰り返していくうちに俺は紅葉の事が好きになり、この前は告白までしてしまった。以前の俺ならば到底考えられないことだろう。環境って人を変える

んだなあと思った。

こんなことをしみじみ感じる事ができたのは、俺を車に押し込んだ奴らが車の中では大変無礼なことをいたしましたと謝ってきて、飲み物を準備してくれるなどVIP対応してくれたからだ。今までの中で一番いい対応ではないだろうか？

しかし、状況を忘れてはならない。俺は無理やり連れていかれて、これからは家に返してもらえないというのだから何とかしなくてはならない。このままでは紅葉を救うどころか、会えなくなってしまうかもしれないのだから！

そうしているうちに、目の前に鳥居くらいの大きさの門が現れた。その門がギギギイと音を出しながら開き、巨大な和風の屋敷と屋敷までの間を埋め尽くす日本庭園が目に入ってきた。

屋敷の目の前に車を止めると、俺は中に通された。暫く廊下を歩かされて着いた部屋は百畳くらいの和室だった。そこには三メートルくらい開けて、二つの座布団が向かい合わせに並べてある。俺はその一方に座らされ、待つように言って俺をここまで連れてきた奴は部屋を出ていった。

少しすると障子が開かれて一人の腰の折れた爺さんが入ってきて、目の前の座布団に座った。爺さんは隣に置いてある肘掛に体重を掛け、扇子を開いて言った。

「お主、奏音とかいったかのう。わしは花山院家現当主、花山院源重郎^{じゅうろう}じゃ。一応、お主の祖父に当たるかのう。聞いていると思うが、お主には花山院家の次期当主になってもらう。話は以上じゃ」

立ち去ろうとする爺さん。

「ちょっと待ってくれ。俺は当主何かになる気はないし、早く帰ってやらないといけないことがあるんだ！」

俺の発言を訝しく思ったようで、

「お主の都合など聞いておらぬ。わしはお主の親と約束をしたのじや。早く連れて行け」

と、家来に告げて出ていった。

「おい、待てっ！」

「さあ、奏音様。お部屋に案内します」

強引に爺さんと反対の方向に連れていかれる。

「やめろっ！ 俺はまだ話があるんだよ！」

爺さんの家来たちは俺の言葉に聞く耳を持たずに俺を引っ張っていった。

俺の連れていかれた部屋はこれから俺の部屋になるそうだ。そこは何十畳もある和室で高価な壺や、掛け軸などもあり俺の部屋にしていいのかと不思議に思うくらいの部屋だ。しかし、この部屋は俺を閉じ込めておくのが目的であり、部屋の外には何人もの見張りが付いている。トイレすら一人で行かしてもらえない。

俺はこんなところで軟禁されているわけにはいかない。早く紅葉の問題を何とかしないと玲央の所に嫁いでしまう。俺はどうしてもそんな姿を見たくないから、何とかして阻止しなければならない。そのためにはまず家に帰らなければならないのだが、爺さんがそれを許してはくれない。

「はあ、俺はどうすればいいんだ？ 結局、紅葉は俺の財産目当てで俺に近付いてきたんだもんな。俺は紅葉の事が確かに好きだが、紅葉は俺の事を好きなわけではなかったんだ。俺は玲央の所に行つて欲しくないと言っているけど、紅葉からしたら俺も玲央も同じなんだろうか？」

ぶつぶつとこんなことを言っている俺は、見張り達からしたらさぞかし不気味だっただろう。ひそひそと外で話しているのが聞こえてくる。そりゃ、こんな急激に環境を変えられたら誰だって慣れるまでは不安定になるかもしれない。そう思うなら俺を元の家に帰してくれよ！

俺は近くにあった壺を持ち上げて、力の限り壁に叩きつけた。
パリーン！

壺の割れる音が部屋中に響き渡った。

「奏音様どうされましたか？」

音を聞いて、外で見張っていた奴らが一気に中に押し寄せてきた。「はあっ、はあっ、はあっ。うるさい！ はあっ、出ていけ！ お前たちには関係ない！」

俺は今までぶつけることができなかった怒りをこいつらにあたり散らした。

「すみません。しかし、このままでは危ないですのでお掃除だけさせてください。今、やらせますので！」

俺はこいつらが慌てるのを見て、逆に落ち着いていった。見張りの体制が崩れている今なら、逃げ出すことができるのではないだろうか？ 俺は全力で外に走った。

「奏音様！ 何をっ！ 奏音様が逃げられたぞ！ 捕まえる！」

俺の見張りの中で一番偉いと思われる奴が叫んでいる。その声によつてかなりの人が集まってきた。俺は見つからないように逃げながら外を目指した。

入口の門の所まで走ってきたが流石に門は閉じられていた。靴を履かずにで走ってきたので、白い靴下が茶色と赤で染まっている。かなり痛むが、今はそんなことを気にしている場合ではない。俺は見張りの少ない所を見つけ堀によじ登り脱出を目指した。

しかし、こんな屋敷では警備体制が完璧で直ぐに見つかってしまう。「ここにいらっしやっただぞ！」

人がどんどん集まってきたが何とか堀の反対側に降りた。よし、何とか脱出できたぞ。問題はこれからどうやって逃げるかだ。このまま歩いていたら、追手に見つかってしまうのは確実だろう。

「おい、奏音！ こっちだ」

声のする方を見るとそこにはマキとミキがいた。

「どうしてこんなところに？」

「それは後で話す。とりあえず車に乗れ！」

こいつらが準備したであろう車に乗って何とか花山院の屋敷を後にした。

「申し訳ありません。奏音様に逃げられてしまいました」

「まあよい。奴は必ず戻ってくるからな」

その時の爺さんの表情に家来たちは薄氷を踏む思いだった。

外伝 5

学園ではいつも通りの時が流れている。池宮城さんの噂を話す人ももう少なくなってきた。奏音ちゃんは昨日学園を飛び出して以来何をしているのか分からない。夕方私の家に来たけれど、玄関のドアを開けたら奏音ちゃんの姿はなかった。私は嫌な予感がしたので、奏音ちゃんの家に行ってみたけれどいつもどっしりと構えている奏音ちゃんのお母さんが、寂しそうに奏音はもう帰って来ないのよと話してくれた。どうして帰って来ないのか、この場面に出くわしてそれを聞かないのは当事者が全く興味がない人だけだろう。私も聞かすにはいられなかった。

私が尋ねると奏音ちゃんのお母さんは全部は教えてくれなかったものの、大まかな内容は教えてくれた。その話によれば、奏音ちゃんはお爺さんに引き取られて、もうこちらには帰って来ないということだった。

「それは奏音ちゃんが望んだんですか？」

今、奏音ちゃんは池宮城さんの事で頭がいっぱいのはずなのにお爺さんに引き取られるなんてそんなことを望むだろうか？

「あの子には何も知らせてなかったのだけれど、私達夫婦と私の父との間で交わした約束だったのよ。だからあの子からしたら、急に無理やり連れていかれたという感じで望むなんてことは全くないでしょうね」

「何でそんな勝手な約束をしたのですか？ 奏音ちゃんの気持ちを考えて上げてください！」

もし、私が同じ状況になったら嫌だ。何故、本人に話もせずになん大切な約束をしてしまったのだらう？

「悪いことをしたと思っっているよ。でも、仕方がなかったんだい。私の父は頭が固くて自分の言う通りにならないと強引に何でもしてしまう人だからね。今まであの子がここにいらただけでも譲歩して

くれてたんだよ」

もう、抵抗することに諦めたかのような発言。お爺さんと今までに何かがあったのだろうか？

「奏音ちゃんは学園には来るんですよね？」

「多分、転校すると思うよ。あの人は今の奏音を放し飼いにする気なんてないだろうから」

奏音ちゃんのお母さんの話を聞く限りだと、お爺さんにとって奏音ちゃんはとても大切なものらしい。でも、それが孫としてではないことは理解できる。

「……今頃、奏音ちゃんはどこで何してるんだろう？」

「どうしたのさ、瑞希ちゃん？」

私の席の前には周君が立っていた。周君は奏音ちゃんの親友だけれど、私と二人で話したことはほとんどない。その周君が私に話しかけてきたということは、奏音ちゃん絡みのことではないだろうか？

「どうしたって何が？」

ぼーっとしていた私には周君の質問の意味が分からなかった。

「さっきから心ここにあらずって感じで目の焦点も定まっていなくて、ぶつぶつ何か言ってるしでどうしたんだろうと思ったんだよ。こういう役は奏音の方がいいだろうけどあいついいないしな」

私はその奏音ちゃんのことと悩んでいると周君には話した方がいいのだろうか？

「俺さ今まで奏音とつるんで来てすごく楽しかったし、よかったと思ってる。何か最近俺の相手どころじゃなくなってる疎遠になってたかもしれないが俺は時々話すだけでいい友達だと実感できた。だから、昨日もそんないつも通りの感じで話していたんだけど、あいつ急に怒り出して帰るから俺が怒らせたんじゃないかと思って帰りに家に謝りに行ったんだよ」

「えっ！」

周君も昨日奏音ちゃんの家に行ったの？　じゃあ、周君も知ってるってこと？

「俺が奏音の家に行ったときにあいつの母ちゃんから聞いたんだけど、あいつ転校するかもしれないんだってよ」

「そうらしいね……」

「知ってたのかよ。それで俺はあいつに転校なんてして欲しくない。あいつはが学園でのいい話し相手だからな」

「私だって転校してほしくなんかないよ。私にとって奏音ちゃんは大切な人だから……。でも、私には何もできそうなことはいない」

「そうだな、今はあいつが頑張る時だよ」

「そう言つと周君は離れていった。」

奏音ちゃん、私たち力にはなれないけれど応援してるから……。

第6話

俺はミキとマキに送ってもらい家まで帰ってこれた。家に帰って母さんが俺を見て発した第一声は「あんた、何でここにいるの？」だった。あれだけの壮絶で感極まる別れだったのに、戻ってきたらいつも通りってどういうことですか？

「そういえば、瑞希ちゃんと周君が来たよ。心配してるだろうから連絡してあげなさいね」

それだけ言々と母さんは台所に下がって行つた。

「何なんだよ。拍子抜けしたぜ」

「それは私が帰ってくるって教えたからな」

ミキが自慢げに自分の胸を張る。お前、そういうことは俺に言つてこようよ。

「そういえば、何でお前らあんなところにいたんだ？ さつきははぐらかされたけど、今なら教えてくれてもいいだろ？」

ミキとマキは二人で顔を見合わせて真剣な顔つきになった。

「それはだな、奏音がお嬢様の為に駆け回っていると知ったから、何か力になれないかと思つていろいろ調べてたんだ。そうしたら、お前が連れていかれたことを知つて助けに行こうと参上したところに、お前が出てきたってかんじだな」

助けに参上するって俺を連れだす方法などあったのだろうか？

「話は変わるが、これでお嬢様を河原林様から救う方法ができたな」

「何か見つかったのか？」

俺は自分の家のことで振り回されてしまつていたが、今重要なのは紅葉を守ること……。俺にはその方法は思い浮かばなかったが、ミキとマキに何か案があるならそれは願つてもないことだ！

「何を言ってるんだよ。お前は花山院の御曹司だったわけだろう？ なら、お前がお嬢様に婚約を申し込んで河原林様との婚約を破棄させればいいだけの話じゃないか！」

ミキとマキはこれで完璧だと頷いている。

「それは俺にあの家に戻ってことだよな？　それはできる限り避けたいのだけれど、他に方法はないのか？」

「他に何もなかったから奏音は悩んでいたのではないのか？」

もつともなことを言われ俺は何も言い返せなかった。でも俺が花山院の御曹司として婚約を申し込むということは、何の解決にもなっていないのではないだろうか？　俺は確かに紅葉のことが好きだが、玲央の様に紅葉を無理やり手に入れようとは思わない。もし、俺が婚約を申し込んだとしても紅葉からしたら結婚させられるかもしれない相手が増えただけで何も変わっていない。むしろ、面倒事が増えるだけではないだろうか？

「お前たちはそれでいいのかよ？　俺が婚約を申し込んでも、結局は紅葉が無理やり結婚させられることには変わらないんだぞ？」

何度も言うが俺は紅葉のことが好きだ。しかし紅葉は俺の財産目当てで俺に近付けさせられたのだ。この方法では紅葉の為にはなっていない！

「前にも言ったように私たちはお前とお嬢様との仲を認めてるんだ。今更反対などしないさ」

俺はミキとマキが樂觀的過ぎると思わずにはいらなかった。俺は紅葉のことを一番に考えていると思うし、ミキとマキも一番に考えていると思っていた。でも、ここにきてミキ、マキと考えがこうもずれていることを考えると本当に紅葉のことを考えているのかと疑ってしまう。

「お前たちはどうして紅葉が望んでないことをそんなに認めることができるんだよ！」

「私にはどうして奏音が渋っているのか理解できないね」

ミキも隣で頷いている。

「お前はお嬢様のことが好きなのだろう？　お嬢様を河原林様から救いたいのだろうか？　ならなぜ、方法が見つかったのに行動しないのだ？」

「俺は玲央の様に嫌々婚約させるなんて嫌なんだよ！」

ミキとマキが目を白黒させている。

「だってそうだろう？ 紅葉は最初から俺が花山院の御曹司だから近付いてこさせられたんだぜ。俺と婚約することは嫌と思ってるに決まってるじゃないか！」

「えっと、本当にそう思っているのか？ 確かに婚約は話が早すぎる気もするが、奏音のことは嫌がってないと思うぞ？ 今までお嬢様は奏音と一緒にいるとあんなにも楽しそうにしていたじゃないか！」

そうは言っても、紅葉は普段から笑顔を振りまくことは慣れている。俺といた時に楽しそうにしていたからといっても、それが本心からなのかどうかはわからない。

「奏音は気にすることなどないさ。さあ、お嬢様のところに行こう！」

ミキとマキは俺を紅葉のところに連れて行こうと急かす。

「でも……」

「お嬢様に聞いたら早いじゃないか！ 行くぞ！」

俺はミキとマキに連れられて行くことになったが、身の細る思いだった。

ミキとマキに連れられて池宮城邸にやってきた。連日訪れている俺を警備員や家臣たちは横目で見ていく。ミキとマキの先導で屋敷の中を歩き、目の前に紅葉の部屋の扉が現れた。この先には紅葉がいる。俺は紅葉に尋ねるのが怖かった。もし、今までの紅葉の態度が全て演技だったら……。そうさ、紅葉が俺のことを好きになってるなどそんな都合がいいことはない。ファーストコンタクトは最悪だったし、紅葉にとって俺は親の言うことを聞いて近付いた人間だ。好きになる要素などどこにもないじゃないか！

「奏音、何立ったまま固まってんだよ！」

目の前の扉を開こうとしない俺に痺れを切らしたのか、ミキが俺

の背中を勢いよく押した。

俺は突然のことだったのでバランスを崩し、扉を開き紅葉の部屋の中に倒れ込んだ。

「誰ですか！」

突然部屋に入ってきた俺に神経をとがらせてこちらに視線を送ってきたが、それが俺だとわかると緊張を解いて近付いてきた。

「何をやっているのですか？ そこには躓きそうなものなどないはず不是吗？」

顔を上げるとそこには紅葉がシャンパンカラーの透き通った瞳を俺に据えている。ああ、どうしてこんなにも紅葉に見つめられるだけで心がざわめくのだろう。紅葉にただ振り回されていた頃には感じなかった感覚だ。

「紅葉、君を玲央に渡さないための方法が見つかったんだ。聞いてくれないかな？」

俺が立ちあがると、紅葉は返事代わりに部屋の中に案内してくれる。紅葉は俺を腰まで沈むくらいクッションの効いたソファに座るように促し、自身も俺の前に座った。すると直ぐに紅茶が運ばれてきて前のテーブルに置かれた。紅茶を持ってきたメイドが部屋から出るのを確認してから俺は紅葉に話した。

「昨日、ここに来て玲央との婚約を解消する方法を見つけてくるって言ったよな。とても昨日のこととは思えないよ。実を言うと、方法なんてあの時何も考えてなかったんだ。でもさ、あれからいろいろあってその方法が見つかったんだ」

紅葉は見つかるとは思っていなかったのだろう。本当ですかと俺に尋ねる。少し表情が柔らかくなったかもしれない。

「でも、この方法は紅葉からしたら何の解決にもなっていないと思う……」

「どういことですか？」

「紅葉は知っているとと思うが……、俺は花山院の跡取りにさせられるらしいんだ。だから、俺と婚約して玲央との婚約を破棄すればいい

いんだ。でも、紅葉からしたら相手が玲央から俺に代わるだけでも変わらないよな」

俺の言葉を聞いた紅葉はあたふたと慌てだした。

「奏音が花山院の跡取り？ 本当ですか？ それに奏音と婚約！ そんな、私と婚約などして奏音はよろしいのですか？」

紅葉は俺が花山院の跡取りということを知らなかったらしい。

「じゃあ、花山院の為に俺に近付いたんじゃないのか？」

「ええ、奏音とは偶然が重なって会うことが多くて御近付きになれたと思うのですけれど」

「偶然ね……」

「それより、奏音は私と婚約をしてくださるのですか？」

「俺は昨日も言った通り紅葉のことが好きだ。だから、もし紅葉がいいと言ってくれるなら俺は紅葉と付き合っていきたい。どうかな？」

紅葉は恥じらいながらコクンと頷く。えっと、紅葉がOKしてくれただよな？

「本当にいいのか？ 夢じゃないよな？ ありがとう、紅葉！」

俺は嬉しさのあまり紅葉をぎゅっと抱きしめた。女の子ってこんなに柔らかいのか。いい匂いもするし……。

「かつ、奏音。少し痛いです」

顔を真っ赤にしている紅葉をもっと抱きしめたくなるのを何とか抑えて、紅葉から離れた。

「ごめん。あまりにも嬉しくてさ」

「私も嬉しかったです」

紅葉は俺の顔をもう見ていられないといった様子で俯いている。俺は夢見心地で頬が緩むのを抑えて、もう一度紅葉を抱きしめた。

俺は紅葉とのことを会長に話に行った。会長は終始頷くだけだった。俺が話し終わると会長は立ち上がり一言だけ言った。

「紅葉、お前はそれでいいのかい？」

会長が紅葉を見つめる。俺も紅葉に視線を合わせると、紅葉も俺の方を見て微笑を浮かべたあと、顔を引き締め会長を見る。

「はい、お父様。私はもう決めました。これからが大変だと思いますが、私は奏音と二人で乗り越えていきたいのです」

「そうか……。では、私もできる限りのことはしよう。今更かもしれないが、紅葉の気持ちも考えずに婚約者を決めてしまつて悪かつた」

深々と頭を下げる会長を前に娘である紅葉は慌てている。普段、誰にも頭など下げることがないであろう池宮城財閥の会長が自らの娘に頭を下げているのだ。会長の心からの行動なのだという気持ちが覗えた。

「お父様、やめてください。私はお父様が謝られる理由が分かりませんわ。なぜなら私は池宮城の人間であり、池宮城財閥の為に私がすべきことだったのですから」

俺は紅葉が今まで本当にそう思ってきたことを知っている。それは池宮城の教育の賜物であり、支配の結果だ。会長からしたら紅葉を複雑な気持ちで見守ることしか出来なかったのだらう。取りだしたハンカチで目尻に溜まつた涙を拭きとっている。

「大丈夫ですよ。俺が紅葉を幸せにしますから！」

「それは少し気に喰わないんだが……」

俺は会長の最後の言葉に乾いた笑いしか出なかった。

会長には納得してもらえたが、一番の問題となるのは何と云つても婚約相手の玲央だ。話をつけるために会長、紅葉、俺の三人で河原林の屋敷に乗り込むことにした。

池宮城の会長が自分で来たということもあつて、アポイントがなくても河原林の屋敷に入ることができた。

通された部屋には何十人も座れるだろう長机があり、その先に玲央と髭を生やした男性の二人が座っている。玲央の隣に座っているのは、多分玲央の父であり、河原林財閥の会長なのだらう。どっし

りと椅子に腰かけた姿がとても様になっている。

俺たち三人は玲央達と向かい合うように座らされた。お互いに長机の短辺側に座っているので、間の距離は十メートル以上あるだろう。

「今日はこういった要件でお見えになったのですかな？」

玲央の父親の声はそれほど大きなものではなかったが、この部屋は音響設備がしっかりしているのか、これほどの距離があるのにも関わらずはつきりと聞くことができた。もっとも、そうでなければこのような態勢で話をしようなどとはしないだろうが。

「この度アポイントも取らずにこちらへ訪問したのは、以前からしていた玲央君と紅葉の婚約を破棄させていただくことをお願いするためです」

会長が話し始めてくれたその言葉を聞き、玲央が顔をしかめる。

「ほう、それはまた一方的なお話ですね。私たちが何か気に障ることでもいたしましたか？」

玲央とは対照的に父親は眉一つ動かさずに対応する。

「その様なことはまったくもってございません。この娘に結婚したい相手ができたのです。私としてもこの娘の意思を尊重して上げたい……」

「そちらの少年がそのお相手ですか？ 私としては構いませんが」

玲央の父親がそう言いかけると玲央が少し焦ったような声を上げ父親の言葉を遮った。

「玲央、落ち着きなさい。悪い様にはしないから」

玲央の父親は玲央を諭して落ち着かせた後、顔をこちらに向け再び話した。

「失礼。もし、玲央との婚約を破棄してその少年と結婚することになったとして、貴方の財閥はどうするのですか？ 玲央との婚約の話だって、池宮城に我々河原林が援助を行うために関係を密接にしようという目的の為のものでしょうか？ 玲央との婚約を破棄したら、もちろん援助など行いませんよ？」

ここにきて玲央の父親は初めて表情を変え、不敵な笑みを浮かべた。玲央も安心しきった顔を見せている。

「申し訳ありませんが、そちらの少年に池宮城を立ち直らせる様な力がある様には見えませんか？」

「池宮城が傾いているのは、元々私の責任です。娘達に背負わせるのではなく、私の力で立ち直らせて見せます」

「それができないと思ったから、私達に助けを求めてきたのではないのですか？ そんなに池宮城を潰したいのなら私は何も言いませんけれどね。しかし、そんなに一方的に婚約破棄をなさるのでしたら慰謝料を請求できますよね？ さてさて、いくらくらいにいたしましょうか？」

玲央達は池宮城が経済的に厳しいことを知っていて、慰謝料を請求してくる。こういったものの金額は経済力によって変わってくるのもだから、慰謝料もとんでもない金額になることを想像することは容易い。

「今ならまだなかったことにしても構いませんよ？ 玲央は貴方の娘さんと結婚を望んでいるようですよ」

「結構です。私は娘達の好きにさせることにしましたので」

「私は親切で言っているのですよ？」

玲央の父親は会長が思った通りに動かないことに苛立ちを覚え始めていたようだ。

「心使いはありがたいのですが、もう決めたことですから」

会長の言葉に玲央の父親の中で何かが切れたのだろうか？

「そうですね、なら好きにきなさい。しかし、覚えていなさい。後から後悔してももう遅いですからね」

玲央が父親は顔を赤々とさせ、対照的に玲央は父親の言葉に顔を青ざめる。玲央にしたら父親が悪い様にはしなうと言ったから大人しく聞いていたのに、父親がこう言ってしまった以上紅葉と結婚することは絶望的だろう。玲央は勝手な奴だったが、紅葉のことを好いていたことは本当のことだ。玲央に悪い気もしてしまうが、しか

し俺だつて紅葉が好きだし、譲る気など毛頭ない。

会長が失礼しますとだけ言つて立ちあがり部屋を出ようとする。

俺と紅葉はそれに置いていかれないように後を追つた。

外に出ると空は青々と晴れ渡つていたが、西方には暗雲を確認することができた。

また一步俺は紅葉に近付くことができたが、まだ解決しなければならぬ問題は多い。その一つに俺が飛び出してきた花山院との関係回復がある。会長は自身で池宮城を立て直すと言つていたが、流石に難しいだろう。元々、河原林の代わりに花山院が支援するようにするという事で紅葉と玲央の婚約を取りやめにしてもらつたのだ。会長は約束を果してくれたのだから、次に誠意を示すのは当然俺だろう。

紅葉達に車で送ってもらい花山院の屋敷の前にやつてきた。紅葉は俺のことを心配してくれて、私も一緒に行きますと言つてくれたが、それは俺の問題である。それにこの場で紅葉を連れて行つて、この人と結婚したいので援助してくださいなどと言つてもうまくいかないだろう。俺は紅葉に感謝の言葉を述べて、車を出してもらつた。紅葉を乗せた車が見えなくなるのを確認した後、屋敷の門と向き合つた。すると、中から監視カメラが何かで俺を見ていたのだろうか？ 大型のトラックで再悠々と通ることが出来る大きな門が野太いうなりを上げてゆっくりと開く。次第に広がつて行く俺の視界。再び見る花山院の屋敷は、その一つ一つに経てきた歴史が感じられ、どっしりとした屋敷を包む空気に押しつぶさせそうになる。

「奏音様、お帰りなさいませ」

そんな声がどこからか聞こえ、辺りを見回していると自分の正面に俺とそんなに歳の離れていないだろう和服の女性が深々と頭を下げて立っていた。俺は目を疑つた。なぜなら彼女が立ってえいた方向は、俺が声を聞く前まで見ていた方向であり、まるでどこから現れたのか見当もつかなかったからだ。

顔を上げた彼女は無機質な表情をして、心の奥深くまで見透かされそうな鋭い瞳で俺を見つめてくる。

「御館様に申しつけられてお迎えに参りました。御館様が待っております。こちらへどうぞ」

彼女は体を反転させるとそのまま歩いて行ってしまう。俺はその後ろ姿を何も考えられずに見つめていると、彼女に促されたので慌ててついていった。

通されたのは前に爺さんと話をした部屋だった。前と違っていたのはそこには既に爺さんが煙管を蒸かして待っていたことだ。

「お主が戻ってくることは分かっていた。私の為に花山院の跡取りになることにしたのだろう？　そういえば、この前お主が出て行ったときに割った壺だがあれは二億円もするものだったのだぞ？　それを粉々にしてくれたからな。当分はお主に金は与えないからな」

右手に持った煙管を灰皿に打ちつけながら、はっはっはと豪快に笑っている。その様子を見るとこれは冗談のつもりで言ったのだろう。爺さんにとっては思惑通りに戻ってきて嬉しいのかもしれない。「爺さん、実は頼みがあつて戻ってきたんだ。今、池宮城財閥が傾いているのを助けたいんだ」

「何故お主がそんなことをする必要がある？　他の財閥のことなど知ったことか。お主もそんなことを気にするな」

爺さんはつまらないことを言い出すなと付け加えてくる。

「どうしても何とかしたいんだ！　援助をしてくれないのなら、俺は爺さんの後は継がない」

「ふん、お主がわしに交渉するのか？　笑わせてくれる。お主はおとなしくわしの言うことを聞いていればいいのじゃ」

「じゃあ、どうしたら池宮城を助けてくれるんだよ」

ここで引いてしまったならば、紅葉は結局玲央の元へ嫁ぐことになってしまふだろう。行動を起こした以上、もう後には引けない！「そうだな……、では池宮城の娘との関係を断つてもらおうか。もう連絡を取り合わずにわしの言うことを聞いて後を継ぐというのな

ら考えてやらないこともない」

「なっ！」

「わしがお主達のことを承知していないとも思っていたのか？ わしを誰だと思っているのじゃ？ わしはわしの直系であるお主にこの花山院を継いでもらいたいと思っではある。じゃが、お主がダメだったときの為に既に跡取り候補は別に手配してあるのじゃ。わしの言うことを聞けないというのならは今すぐこの花山院から出ていくがよい」

勝手に連れてきておいて、今度は出て行けという。俺のことなど自分の目的を達成するための一つの駒くらいにしか思っていないのだろう。そんな爺さんの下で生きていくことなど、俺には選択できなかった。

「なら、俺は爺さんの後は継がない。帰らせてもらいます」

「勝手にせい」

爺さんは煙を俺の顔に吹きかけると俺よりも早く部屋を出ていった。

俺は爺さんとの話し合いがうまくいかなかったことを報告しに池宮城邸を訪れた。俺は紅葉と一緒にいるために行動をしたが結局だめだった。追い詰められた俺の頭の中には両親の顔が浮かんた。

そういえば、俺の両親は結婚するために駆け落ちをしたのだったな。今なら親達の気持ちがよく理解できる。

「紅葉、悪い。爺さんを説得できなかった。爺さんときたら紅葉ともう会わなかったなら、池宮城を助けてやるなんて言うんだぜ？

俺には紅葉がいないとだめだっていうのに」

「そうですか……、それは残念でした……わ」

紅葉の今にも消えてしまいそうな小さな声に俺は自分が大きな過ちを犯してしまったことを思い知った。

俺は自分が頑張ったということを紅葉に認めてもらい、慰めてもらいたかったのかもしれない。一番不安なのは、玲央との婚約を破棄してしまったことで池宮城が窮地に追い込まれた紅葉だろう。その紅葉に俺は池宮城を助けることができなかったなどと、より不安になることを深く考えずに言ってしまった。

つまり、俺は子供だったのだ。こんな場面で俺は自身の弱みを見せ、紅葉を精神的に追いこんでしまっている。好きな人にこんなことをしている俺など男じゃないと思う。ここは虚勢でも大言でも、堂々と振舞い安心させてやる必要がある。俺は何をやっているのだろうか……。

「でもさ、俺が何か他の方法を考えるから。心配するなよ」

かなり今更の気もしたが、一応言っておいた。

「ありがとうございます。でも、もういいのです。お父様の言うことを聞かずに婚約を破棄した私が間違っていたのです」

「そんな悲しいこと言うなよ。俺が玲央との婚約を反対したから行動を起こしたんだろう？ 間違っていたというなら、婚約破棄を薦めた俺が間違っていたんだ。それにあの時、玲央よりも俺を選んでくれたことが本当に嬉しかったんだ。それなのに、俺を選んだことを後悔するなんてそんなことはして欲しくないし、俺はさせないよ」

「いえそんな、奏音は何も悪くはありません。私が与えられた役目を放棄したことがいけなかったのですから」

紅葉は自分が悪かったと言い、俺は俺が悪かったのだと言う。傍から見ればとても滑稽な状況なのかもしれないが、俺達は至って真剣だ。

コンコンコン。

そんな状況の中、紅葉の部屋の扉がノックされた。なんて空気が読めない人だろうか？ いや、読めているからこそこの雰囲気を読み拭しに来てくれたのかもしれない。

紅葉が入ることを許可するとゆっくりと扉が開いた。扉の向こうに立っていたのは紅葉の兄だった。

「お兄様でしたか。どうされましたか？」

紅葉は平然を装っているが、声が少し震えていた。

「紅葉、君は玲央君との婚約を破棄したそうだね？　そそのかしたのは奏音君だね？　なんて事をしてくれたんだ。君達のせいで今池宮城は一大事さ」

言葉とは裏腹にやれやれというジェスチャーをして、軽く微笑む。この前会った時も思ったが、この人は何を考えているか全く分からない。

「さて、紅葉は君が引き取ってくれることになったのだろうか？　君は晴れて花山院の跡取りかい？」

実の妹である紅葉を物のように扱っていることが気にいらなかったので、文句を言ったのだけれどもまともに取り合ってもらえず質問に答えるように促された。

「それが、うまくいなくて花山院の跡取りにはなりませんでした」

「はい？　私の聞き間違いかな？　奏音君は花山院の跡取りになれなかったと聞こえたけれど？　もし、本当だとしたら君たち二人は勝手な恋愛ごっこに私達を振り回して、池宮城を追い込んだということだね」

「そんな言い方はないだろう！　俺達は真剣なんだ。結果として駄目だったけれど、少なくとも紅葉は池宮城のことを思っているんだ」

俺は紅葉の兄に声を荒げ反論したが、紅葉は俯いてごめんなさいと謝った。紅葉は兄に強い態度に出れないらしい。確かにこんな嫌味ばかり言い続ける兄など、苦手になっても仕方がないと思う。

「では、この責任はどちらが取ってくれるのかね？　遊びでなかったというのなら、大人らしい対応をしてもらわないとね」

傷つき痛めている心の中に土足で踏み込んでくる俺達の目の前にいる人の皮を被った悪魔に対し、俺は怒りを通り越して殺気をはらむまでに至った。

「そんなに睨まないでくれよ。私は何も間違ったことは言っていないだろう？　それとも、まだ親に尻拭いをしてもらわないといけ

なかったかな？」

俺達が何も言えずに黙っていると、扉に体当たりでもしていたかのように執事らしき人が飛び込んできた。

「なんだね君、落ち着きがなさすぎだよ。誉れ高い池宮城の執事としてそんなことでは恥ずかしいよ」

嫌味の標的にされた執事は困惑しながらも、要件を話した。

「申し訳ありません。ですが、緊急事態なのです。先ほどから河原林が池宮城系列の会社の株を買い漁り始めました」

「M&Aかつ！ 河原林め、婚約を破棄したことへの腹癒せのつもりか。お前達のせいでこんなことになってしまったぞ、どうしてくれるんだ」

突然の事態に俺や紅葉は何も言葉を発することができなかった。

河原林が最後に言っていたことはこういうことだったのだ。

「お前たちなどどこかに行ってしまう、邪魔だ。私は買収に対抗しなければならぬのだ。さてお父様と話しあわなければ」

それだけ言うとは紅葉の兄は執事を連れて、早足で紅葉の部屋を出ていった。

紅葉は扉が閉まるのを確認するよりも前に泣き崩れてしまった。

言葉にならない泣き声を上げる紅葉を俺は慰めたが、なかなか泣き止むことはなかった。

俺は何とか紅葉を泣き止ませると後をミキ、マキに任せて、河原林邸を目指した。こんなことになってしまったのは俺の責任だ。何とかしてやめさせることができれば、紅葉に会われる顔がない。ここにやってくるのも何度目だろうか？ 門番も直ぐに俺を認識し、連絡をとって中に入れてくれた。

巨大な玄関の扉を開くと玲央が腕を組んで俺を見下すようにして出迎えてきた。

「どうしたんだい、奏音？ 君は私と紅葉さんとの婚約を破棄させたのだから、もうここに用はないはずだけれど？」

玲央は分かっている俺が来た理由を聞いているのだ。俺の方が立場が弱いことが分かっているから、かなり俺を見下している。

「今回来たのはそれについてじゃないんだ。今河原林が池宮城の株を買っているだろう？ それをやめてくれないか？」

俺はこれが無理なお願いだと分かっていた。だから俺は普段のノリではなく、真剣に深く頭を下げて頼んだ。

「そんなこと無理に決まっているじゃないか。今は河原林を大きくする最大のチャンスなんだよ？ 俺は池宮城を吸収して、紅葉さんを嫁にするんだ！」

「そんな事しても紅葉は喜ばないぞ！」

「そんなことわかっているさ。池宮城を吸収したら、紅葉さんは悲しまれるかもしれない。しかし、こうしなければ池宮城は救えないし、そして何より紅葉さんを救えない！」

こいつは紅葉が俺と一緒にいると不幸になると言いたいのだろう。確かに、今の俺は池宮城を救えなかったばかりか紅葉を泣かしてしまった。でも、俺はもう弱さを見せない。紅葉に心配をかけさせないと心に決めたのだ。だから、俺はこんなところでは諦めない！

「玲央には悪いが紅葉は俺が幸せにする！ 池宮城も救って見せるだから、池宮城を買収しないでくれないか？」

「庶民のお前に何ができる？ それに私は私から紅葉さんを奪っていったお前を許すことができない！ お前の頼みなど聞けるものか！」

玲央は冷静さを失いかけてきている。玲央から見たら俺は好きな人を横からかすめ取って行った憎き奴なのだから、そんな奴から真剣に頼まれても、頭に血が上るのは当たり前かもしれない。

「そこを何とかできないか？」

「くだい！ 俺はお前の戯言にもう付き合っ気はない。早くこの屋敷から出ていけ！」

玲央は警備員に俺を屋敷の外につまみ出すように言うと、俺は二人の大男に両腕を掴まれ外に引きずられる。

「離せ！ 俺はまだ玲央に用があるんだよ」

俺は玲央のところに行こうと全力で暴れるが、全然逃げられそうにない。その間に玲央は屋敷の奥に歩いていってしまふ。

「おい、玲央。何とか言えよ！」

俺は抵抗虚しく、門の外に捨てられた。

俺にはもうどうすることもできなくなり、最後にやってきたのはここだった。できることならここだけにはもう来なくなかった。ここに来る前に紅葉にお別れを言っておくべきだっただろうか？

「三度わしの前に現れたのだから、『三度目の正直』というやつかのう？ 流石にもう戻ってくることはないだろうとは思っておったのじゃが、何か心情の変化でもあったのか？」

「まあ、そんなところだよ」

「先に言っておくが、わしは条件を変える気はないからな？ わしを説得するつもりだったのなら諦めることだ」

爺さんは一昨日この屋敷を訪れた時と同じように煙管を吹かしている。三度目と言うこともあつてか、俺にはもうほとんど興味を失くし、庭を見つめながら俺に話してくる。

「分かつている。俺は爺さんの傀儡になっても構わない。紅葉に会えなくなってもいい。だから、池宮城を助けてやってくれないか！」

「頼み方がなっていないが……、まあいいだろう。その言葉、後で忘れたとは言わせないぞ？ わしとしてはそこまでして池宮城を助けようとするお前の気持ち的理解できないが、約束は約束だ。その頼み今すぐに聞いてやるうではないか！ お前には今日らここに住み、花山院が経営する学校に転校してもらう。同じ学校では関係を断つなど無理だからな。いいな？」

「ありがとう……」

俺は心の底から素直にお礼を言える気持ではなかったが、爺さんは俺の言うことを聞いてくれた。

「だから言っておるだろう？ 口のきき方になっていない！ これ

から花山院の跡取りとして生きていくのじゃからそんなことではだめじゃ」

「ありがとうございました」

俺はもうこれから爺さんの言うことを聞いて生きていくことを了承したのだ。言われたことはやるしかない。

「そうじゃ。これから厳しくやっていくからのう、覚悟しておきなさい」

爺さんは心を落ち着けるかのように煙をゆっくりと吐く。

「お前がわしの跡取りになってくれてわしは嬉しいぞ。お前の母親があの小僧とここを出ていったときは、どうなる事かと心配したものだ。本当によかった、よかった」

爺さんは前に俺が訪れたときのように豪快に声を荒げて笑う。それに対し、俺は爺さんに合わせて愛想笑いをするこしかできなかった。

「突然ですが、家庭の事情で悠木さんは転校することになりました。

」

俺はクラスメイト達の前に立たされ転校することを担任に話してもらっている。

爺さんの配慮で俺は最後にお別れを言うために学園に来ることを許された。

「奏音ちゃん、そんなの聞いてないよ！ どうして話してくれなかったの」

「そうだぞ奏音！ 俺達は親友だと思っていたのは俺だけなのかよ！」

瑞希と周の言葉に謝ることしかできなかった。爺さんにはこれから友達と会うことも許されていないのだ。こいつらと会うことも今日が最後になってしまう。

俺はこの日の授業は全くもって頭に入って来なかった。何時間も授業はあったのに俺は休み時間も含めてその間微動だにしなかったらしい。

放課後になり、紅葉を迎えに行った。先に紅葉には後で会いに行くからそれまで来ないでくれと言っていたので、紅葉は待ちくたびれていたらしい。しかし、紅葉とは誰にも邪魔されない場所でありお別れを言いたかったのだ。

「紅葉、迎えに来たぞ」

「奏音、私は貴方に話したいことがたくさんありますわ」

「俺もだ、でも場所を変えないか？」

ここは紅葉のクラスでありまだ数人ではあるが生徒達が残っている。俺も紅葉も今や有名人になってしまっている、ここでは話づらい。

俺達は学園の屋上にやってきた。もうこの時間になると日も傾き、空をオレンジ色に染め上げている。

「紅葉。実は俺、花山院の跡取りになることに決めたんだ。だから俺はこの学園から転校するし、もう紅葉に会うことはできないんだから、俺のことは忘れてくれないか？」

「何でそんなことを勝手に決めてしまったのですか。私は貴方のことを忘れることなどできません」

「でも、あのときは他に方法がなかったんだ。そのおかげで池宮城は河原林に吸収されることなく、立て直しできかけているだろう？」

俺が跡取りになることを認めると、約束どおり爺さんは池宮城を立て直すために動いてくれた。今や、池宮城は河原林の脅威から逃れ、順調に立て直している。

「確かに花山院財閥のおかげで池宮城は立ち直りつつあります。ですから、もう私達の間にはもう問題は残されてないのですよ？ 家柄も私達なら問題無いではありませんか」

「でも、これが爺さんとの約束なんだ。爺さんが約束を果してくれたのだから、俺も果さなければならぬ」

「その約束と私、どちらが大事なのですか！」

紅葉は白く透き通った肌を赤らめて、感情的になっている。トパーズの様な美しい彼女の瞳は真直ぐ俺を見つめて、視線を逸らそうとしない。

「そんなこと、言うまでもない。紅葉が大事に決まっているさ。でもね、もし俺が爺さんとの約束を破れば、爺さんは池宮城を援助しなくなり、池宮城は再び傾いてしまう。そうしたらまた紅葉が悲しむだろう？　俺は紅葉に悲しんで欲しくないんだ」

「貴方と会えなくなっても私が悲しむとは思わないのですか？」

俺が今まで幾度となく魅せられたきた彼女の瞳に涙が溜まりだす。俺は彼女に近付きそつとハンカチで彼女の涙を拭きとる。

「思ったさ。だけどね、俺以外の誰かが紅葉を幸せにすることはできるかもしれないけれど、今池宮城を救うことができたのは俺だけだった。だから、俺は紅葉を悲しませないために池宮城を救うことにしたんだ」

「私は貴方以外の人など考えられません」

「そう言ってもらえて、俺も嬉しいよ。でも本当に仕方がなかったんだ」

紅葉は俺の言葉を聞くと涙を流し、声を上げ泣きはじめた。

そんな紅葉を俺はそつと抱き締めて、頭を撫でた。

永遠に続いて欲しいと思う俺たち二人を置いて、次第に日は傾き辺りは暗くなっていく。

太陽は俺達を照らすことを諦め、次の人々に温もりを与えに行ってしまった。見上げれば、星屑の海が広がっている。

俺達は寄り添い学校の屋上にまだ座っている。

「紅葉は泣き虫なんだね。初めて会ったときはそんな風には思わなかったよ」

「私は貴方以外の前では泣きません」

「そっか……、紅葉の涙は俺だけが見れる特別なものなんだね」

「そうですよ、だからもつと大事に扱って欲しかったですわ」

紅葉はもう泣いていないが、瞳の周りは薄らと赤くなっている。

「俺は大事に扱ったつもりだったけどな？」

「ハンカチの生地が少し痛かったですわ」

「そうか？ それは悪かった。もつとそつと拭いてやればよかったな」

「そうですよ」

二人はどちらからでもなく、笑いはじめる。

「こうやって奏音と話すのもこれで最後になってしまうのですね。

もう少し、奏音と早く出会えていれば……」

「過去のことなど考えても仕方がないさ。だから、これからのことを考えた方がいいよ」

「そうですね。奏音は花山院の跡取りになるのですもの、これから大変ですわよ」

「そんな、脅さないでくれよ」

紅葉とこうやって楽しく話をしたのはかなり久しぶりの様な気がしてならない。ここ数日は本当に大変だったから仕方がないかもしれないが……。

こうして二人で過ごす最後の時を迎えた俺達はそれぞれの道を歩みだした。この二本の道はもう交わることがないのだろうか……。

エピソード

私は御爺様の言うことを聞いて、今まで花山院の跡取りになるべくいろいろなことを学んできた。そしてやっと花山院の代表になることが認められた。ここまで来るのにあれから十年かかった。

御爺様はやっと社交界で私が出ることを知ってくれた。社交界に出ていなかった私はこの世界ではあまり知られていない。噂くらいにはなっていたらしいのだが、身内以外は花山院に直系の跡取りがいるなど知らないのだ。

しかし、私が出ないからといってこの国で最も歴史あると言っても過言ではない花山院が出ないわけにはいかない。だから、私の影武者みたいな人がずっと出ていたそうだ。だから、私の存在が認識されていないのも自然なことかもしれない。

普通なら社交界は成人になる前にデビューするのが普通らしいのだが、私はもう二十代後半。かなり歳を取ってしまったている。

私のデビューがこんなにも遅いことには幾つか理由があるのだが、何と言ってもその一番の理由は……。

私は後ろ姿を見て、直ぐに誰なのか理解した。

「麗しき御婦人。私と一曲踊ってくださいませんか？」

「はい。喜んで」

その女性は上品に笑うと差し出していた私の手の上に彼女の手を重ねてきた。

「久しいな、紅葉」

「お久しぶりです、奏音。お元気そうだなによりです」

オレンジ色の雅やかなドレスに身を包み、楽しそうに俺と踊っている。

俺達は十年の時を経て再び共に歩みだしたのだ。

エピローグ（後書き）

最後まで読んでくださって本当にありがとうございました。ここで『ライスマと味噌汁で』はとりあえず終わりになります。この世界観でもう一作ぐらい書きたいと思いますがいつになるやら……。

最近は更新していませんでした。

この小説は実質、私の初作品なのでうまく書いてはいなかったと思います。文章も稚拙で、書いていて何故もつとしっかりとした文章が書けないものかと思いました。内容も筋が通っていないところが多々あります。

次に書くときはもう少しいい作品を作りたいと思います。ですので、もし私の次回作を見かけたなら読んでくださったら幸いです。

おまけ

ある日の放課後

俺は紅葉達と学食でお茶をしている。

「紅葉は本当に上品に食べるよな」

「それは池宮城のお嬢様として恥ずかしく無いよう振舞いを教えられてきましたから」

「でもさ、俺達が最初に会ったときは紅葉がそんなに上品とは思わなかったぜ。そういえば、紅葉と最初に会ったのはここだったよな」
そう言くと、彼女は頬を赤らめて恥ずかしがる。

「た、確かにあの時の私は品がありませんでした。この学園に馴染んでいなくて、変に強がっていたのかもしれない」

一年以上通って馴染んでなかったのかよ！

「そうだよな。紅葉が消しゴムを投げるなんて信じられないぜ」

「えっ！ 私その様なことしていませんよ？ するはずがないではありませんか」

「じゃあ、品が無かったってどういうことだよ？」

紅葉は先程よりも顔をより赤くした。

「私、大きな声を上げてしまいました。今思い出しても恥ずかしいですわ」

「じゃあ、俺のラーメンを食べれなくなったのは誰だよ！」

俺はミキとマキをジト目で見ると、彼女達は全力で首を横に振る。そんなに振ったら取れてしまわないだろうか。

「私は奏音のことを当たり屋かと思っていましたわ」

当たり屋ってよくそんな言葉知ってたな。

「私が五月蠅くしていたから、食事に消しゴムが入ったと文句を言うてきたのかと……。あのときはすみませんでしたわ」

「ああ、お互い様だから気にするな。それより、紅葉じゃないなら

消しゴムを入れたのは誰なんだ！」

ミキとマキは先程より大きく首を振って否定した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3077i/>

ライスMと味噌汁で

2011年3月21日22時56分発行